

第2回 防災教育推進連絡協議会 報告書

平成 27 年度 文部科学省「リスクコミュニケーションのモデル形成事業」成果報告

平成 28 年 3 月

群馬大学 広域首都圏防災研究センター

片田 敏孝 編

第 2 回 防災教育推進連絡協議会 報告書の発行にあたって

東日本大震災の発生以後、小中学校における防災教育の重要性が再認識され、全国各地で様々な活動が実施されるようになってきました。その中には、「防災に関する知識を得た」「防災に対する意識が高まった」などといった防災上の教育効果だけでなく、防災を通じて、地域コミュニティや地域住民とのつながりを重視した教育活動を実践することにより、「他者の命を大切にする」「地域を愛する」といった防災以外の面での教育効果があることも報告されています。

このような背景のもと、防災教育を「防災を教える教育」だけでなく、「防災を通じた教育」という観点から捉え直し、特に“教育効果”と“地域と連携した教育実践”の着目し、今後求められる防災教育とはどうあるべきか、それを実践するために教員はどうあるべきかを議論する場として、防災教育推進連絡協議会を立ち上げました。本協議会は、すでに様々な防災教育を実践されている地域の皆さんにご参加いただき、各地の実践報告などをもとに上記課題について議論を深めていくものであり、定期的を開催していく予定です。そして、この活動を通じて、小中学校における防災教育を推進し、それを継続する仕組みを構築することにより、地域の災害文化の形成およびその定着に寄与することを目的としています。

平成 26 年 12 月には、岩手県釜石市において、第 1 回防災教育推進連絡協議会を開催させていただきました。第 1 回では、全国各地から参加された先生方の中で、これまでどのような実践をおこなってきたのかを情報共有しました。そして、グループディスカッションを通じて、防災教育として、何をどのように教えるのかといった「コミュニケーション力」と「地域と連携した防災教育」の必要性に対する認識を共有し、今後、具体的に検討していくことを確認しました。

そして、平成 27 年 8 月に和歌山県田辺市において、第 2 回防災教育推進連絡協議会を開催いたしました。具体的には、第 1 回の議論を踏まえて、「防災教育に求められるコミュニケーション力」と「地域と連携した防災教育」について、パネルディスカッションとグループディスカッションを行いました。本書は、その内容を報告書としてとりまとめたものです。本書が防災教育を実践されているみなさんの一助になれば幸いです。

平成 28 年 3 月

群馬大学大学院 教授 片田 敏孝

目次

1. 開会	3
(1) 趣旨説明.....	3
(2) 挨拶.....	4
(3) 田辺市における防災教育に関する取り組みの紹介.....	6
2. パネルディスカッション 1.....	9
(1) 話題提供 1：シンサイミライ学校のビデオ視聴.....	9
(2) 話題提供 2:田辺第一小学校「シンサイミライ学校を受けた児童の様子について」	10
(3) 討論「防災教育に求められるコミュニケーション」	15
3. パネルディスカッション 2.....	35
(1) 話題提供 1：新庄中学校生徒発表『新庄地震学』で学んだこと」	35
(2) 話題提供 2：新庄中学校『新庄地震学』について」	39
(3) 討論『新庄地震学』にみる地域と連携した防災教育とその継続」	49
4. 新庄地区視察	65
(1) 「新庄地震学」の授業見学.....	65
(2) 「新庄地震学」の講評.....	67
(3) 話題提供「昭和南海地震の様子について」	69
5. グループディスカッションを踏まえた討論会	73
(1) グループディスカッション.....	73
(2) 議論した内容の発表.....	74
(3) 討論会.....	88

【付録】 当日配布資料

1. 開会

(1)趣旨説明

片田 敏孝 （群馬大学大学院 教授）

全国各地から遠路、お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。昨年、釜石市で第1回防災教育推進連絡協議会を開催した際には、立ち上げということで全国各地の取り組みの紹介をしていただきました。そして、第2回は、“防災教育はどうあるべきか”について議論することを目的に、和歌山県田辺市で開催することになりました。ご当地の田辺市長さんをはじめ、教育長さん、教育委員会の先生方に、開催にあたりまして多くの準備にご協力をいただきました。こういったご協力なくしてはできなかつたと思っております。本当にありがとうございます。



片田 敏孝 教授

今回は各地の取り組みの紹介が中心でしたが、今回の連絡協議会は、二つのパネルディスカッションを中心に、議論する時間を多くとっています。ほとんど筋書きのないパネルディスカッションになりますが、できるだけ率直な議論を皆さんとしていきたいと思っております。パネルディスカッションというと、パネラーが議論をするのを皆さんに聞いていただく、というイメージを持たれるかもしれませんが、本日はコーディネーターに「会場と一体感をもって、パネラーだけで議論しているだけでなく、会場にもバンバン話を振ってくれ」とお願いしてあります。皆さんは気楽に聞いている立場ではございません。本日はどう話を振られるかわかりませんので、緊張感をもって、この連絡協議会に参加していただきたいなと思っております。そして、二日間の議論を終えた際には、「こういう方法なんだ」という何かの感触を持っていただき、それぞれの学校に戻っていただきたいなと思っております。

震災から4年半が過ぎました。全国各地で防災教育の必要性が認識され、各学校では熱心な防災教育が展開されようとしておりますが、正直、まだまだ先生方には混乱というか、“どう防災教育を進めたらいいの？”ということに対して迷いがあるように思います。どちらかというをやみくもに一生懸命やっているという感じがあるようにも思います。僕たち自身もそうでした。そういう思いを共有する者同士が「こうするとうまくいきそうだ」「ああするとうまくいきそうだ」というものを持ち寄って、みんなで“共有の財産にしていきたい”というのがこの連絡協議会の趣旨です。先生方の取り組みの中で、パネルディスカッション以外でも、「自分はこんなことをやって、こんな良いところがあった」ということが、少しでもあれば、この場でどんどん皆さんに紹介していただきたい。そこから得られるものをみんなで共有して、持ち帰るというかたちにしていきたいと思っております。ぜひ、二日間の議論に積極的に参加をしていただければと思います。

最後になりますが、市長さんをはじめ、田辺市の皆さんに重ねてお礼を申し上げたいと思っております。どうもありがとうございました。

(2)挨拶

真砂 充敏 (田辺市長)

本日、第2回防災教育推進連絡協議会が、この和歌山県田辺市で開催していただきますこと、本当に意義深く思っております。と同時に、皆さんのお越しを心から歓迎申し上げたいと思います。

みなさんがお越しのこの施設は、新しく改築になったばかりの『田辺スポーツパーク』といい、全体一帯が総合運動公園になっています。来月の9月26日に開催される国体に合わせて、県と一緒に整備した施設でございます。今日はちょうど県の陸上の大会も開催されています。今後、全国から多くのスポーツマンを迎え、この施設を中心にスポーツ交流を盛んにしていきたいと思っております。

今日の防災教育の会議は、日頃、片田先生にご指導いただいている地域のみなさんが連携して開催しているとお伺いしております。田辺市も片田先生に防災教育をお願いして3年目になり、大変お世話になってございます。田辺市は合併して10年になりますが、地域が大変広いです。面積は1,026km²で、近畿で最も広く、和歌山県の約4分の1が田辺市になります。そのため、津波の被害だけでなく、4年前には台風12号によって、土砂災害・風水害・洪水による被害も発生いたしました。あらゆる災害が田辺市内に懸念されるということで、「防災」はまちづくりの大きなテーマになっています。

片田先生は、防災教育を通じて、“どういうまちづくりにしていくのか”“どういうふるさと教育をするのか”というところを求められています。私はその点について大変共感を覚えておりまして、全幅の信頼をおいて片田先生にお任せをしています。田辺市は、防災担当部署を“防災対策課”から“防災まちづくり課”と改名をしました。名前を変えただけで喜んでいるのではなくて、この名前の通りに中身を変えていくために、人員も増員してやっていこうと思っております。

国も地方創生ということで対策を打ち立てていますが、まちづくりには人口減少やいろいろな課題があります。私は大きく二つにわけて「攻め」と「守り」というような表現をしております。「守り」というのは、もちろんベースに“安心安全なまち”というのがなければ、何も次のステップがないわけです。そういう意味では、この「守り」の部分として、いかに災害に強いまちをつくっていくために、“教育を通じて、地域の防災力につなげていくのか”が大きなねらいだと考えております。

いずれにしても、こうした機会にこの会議が、本市で開かれるというのは本当に意義深く思いますし、タイムリーだと考えております。実り多い会議となりますように、そしてまた、それぞれの地域の皆さん方のご活躍を、そして防災力の向上を心から祈念申し上げましてご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。



真砂 充敏 市長

中村 久仁生 （田辺市教育委員会 教育長）

私たちの田辺市においでいただきまして、ありがとうございます。田辺市の取り組みについては、市長からご紹介をいただきました。私からは、学校教育について、どのような取り組みをしているのかについて、少しご紹介いたします。

市長も申しましたとおり、田辺市は非常に広範囲でございます。大きく分けると、沿岸部分、中山間地域、山間地域の三つになり、それぞれの土地に歴史と伝統がございます。市内には、現在、小中学校在が 41 校ありますが、その 41 校の学校それぞれに防災担当教員を位置付けてございます。

そして、その担当教員の皆さん方に知恵を振り絞っていただいて、三つのゾーンの防災教育のための授業計画を作成していただいております。こういう防災にかかわる指導の手引きは、行政がコンサルなどに外注をして、出来上がったものをみんなで一斉に使うことが多いのですが、私たちは自前のものを、その地に住む教師たちによって作り上げています。田辺市には非常に熱のこもった先生方が数多くおられます。その先生方によって、現在 2 年間、このような取り組みを続けています。そして、出来上がったものを教育委員会、市へ提出いただいて、今後のそれぞれの大きな実践の基にしようということで取り組みをしているところでございます。

何はともあれ、片田先生は日本の防災教育の第一人者であります。その第一人者である片田先生をお迎えして、この研修会が開催できるのは、この上ない喜びであります。また、今年の釜石市に続いて、二番手として田辺市で開催されるというのも非常に大きな意味をもっているのではないかと考えております。この二日間で、私たちの実践をしっかりと提起をさせていただいて、ご参加いただいた皆さん方からご意見をいただき、より強いもの、より正確なものへと導いていただけたら、と非常に期待をしております。

本日は二つのパネルディスカッションが中心になりますが、明日は昭和の南海大地震で大津波による被害を受けました新庄地区の視察が予定されております。そこでは、直接、被害に遭った長老の方からの報告をいただきます。また、新庄中学校が長いこと取り組んでこられた『新庄地震学』という取り組みの紹介として、実際に授業を見ていただきますので、皆さん方からアドバイスをいただけたらと思います。

本日は本当にご苦労さまでございますけれど、私たち一人ひとりが全力で皆さん方をお迎えしたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。



中村 久仁生 教育長

(3) 田辺市における防災教育に関する取り組みの紹介

寺本 行雄 (田辺市防災教育担当者会 会長)

私の勤務している学校は、この場所のすぐ下にある明洋中学校です。近くにはナショナルトラスト運動の発祥の地であり「天神崎」があり、自然にいっぱい囲まれたとても過ごしやすい快適な学校です。その一方で、12年前には台風による高潮で床下浸水したまわりの住民が、明洋中学校へ避難するという事もありました。そういう地域で防災教育をおこなっています。

田辺市の防災教育の簡単な概要を説明したいと思います。

当地方でも、近い将来予想される東南海地震への対応ということで、以前から学校ごとに防災の授業はしておりました。ですが、東日本大震災の発生や台風12号によって大きな被害を受けたことを契機に、市行政や教育委員会も力をいれてくれることになりました。そして、防災教育担当者会を立ち上げることになり、私たち各学校の教師がそれを担当することになりました。

先ほど教育長からもありましたが、新庄中学校は15～16年前の総合的な学習の時間が始まった頃から「新庄地震学」を開始し、すごく発展した内容の学習をしています。今日のパネルディスカッションや、明日の現地学習などで紹介があると思いますが、田辺市で一番進んだ取り組みをしている学校だと思います。また、NHKのシンサイミライ学校などの取り組みの中で、小学校の各家庭で避難訓練を行ったり、中学校で釜石市を訪問するというような学校もあります。しかし、多くの学校は「防災教育担当者を決めろ」となった時点で、年間カリキュラムを作成して取り組もうというかたちになったのが本当のところだと思います。

1. 田辺市は大変広い地域なので、海に近い“沿岸部”、山の中の“山間部”、川が流れる“中山間部”と三つに分けました。被害としては、沿岸部は当然のように津波もありますけれど、台風の高潮もあります。中山間部は水害・浸水があります。そして山間部は土砂災害があり、台風12号のときは山崩れが発生しました。そのため、三つに分けて、計画をつくることを考えました。そして、まずは自分の学校を見直してみようじゃないかということで、一年目は各学校の取組内容をまとめました。



寺本 行雄先生

田辺市防災教育担当者会の取組

- 沿岸部ブロック 11校
- 中山間部ブロック 10校
- 山間部ブロック 22校

平成25年度
・防災教育実践集録の作成

平成26年度
・防災教育の手引きづくり

平成27年度
・防災教育の手引き完成
・研究授業の実施



2.私たちの地域にはたくさんの学校があり、職員は約 700 人います。一年目の取組から、防災教育担当者の先生や、いろいろな準備をしている学校は熱心だけれども、まだまだ取り組めていないところについては、手探り状態だということがわかりました。特に感じたのは、何かをするための資料があまりないということです。私たちは 3 年前、片田教授と初めてお会いしたときに釜石を訪問しました。その後、帰ってきてすぐに“釜石の奇跡”という NHK のアニメを見ました。その中で、小さい小学生が「なんで逃げたの？」という質問に対して、「いつも先生から恐ろしい津波の映像を見せられてこんなときは逃げなくてはいけない。今回はそれに匹敵するようなすごい揺れだったから私たちは逃げた。」というような発言がありました。ですから、私たちもそのような津波の映像を見せてやりたいなと思いました。授業一、二回分くらいはどこかにあるのですが、3 年間のカリキュラムとなるとなかなか難しいということで、そこら辺を中心として考えることになりました。具体的には、沿岸部・中山間部・山間部のそれぞれで、中学校では 1・2・3 年生、小学校では低学年・中学年・高学年とわけて、指導案というか授業のサンプルとなるような計画をつくることになりました。現在、ある程度出来上がりました。三つの地域の小中学校を合わせると約 60 くらいの指導案ができます。今年の秋には、その指導案に基づいて研究授業を行う予定です。

3-5.平成 23 年の台風 12 号の水害について少し見てもらいたいと思います。本宮地域では 2 週間で 2,000mm の雨が降ったそうです。この雨によって土砂崩れが発生しました。写真は山崩れの様子です。

6.田辺市内の伏菟野です。崩れた地域の方によると、土砂崩れは普段あまり起こらなかったような地域でも起こっていたそうです。

7.本宮の水害です。本宮もひどい被害でしたが、隣の新宮市熊野川町辺りが一番ひどい被害でした。

8.大塔川の氾濫で小学校に水が入ってくる様子です。

9.最終的には浸かってしまったグラウンドの様子です。

10.本宮小学校の一階は写真のようになってしまいました。

11.台風の被害をしたときに中学生がおばあちゃんの話し相手をしている様子です。

12.私たちの防災教育担当者会の研修会の様子です。

(成果)
 ・手引きづくりを通して、防災教育担当者の意識が少しずつ高まっている。

(課題)
 ・教職員の防災教育に対する意識の温度差。
 ・保護者、地域との防災に対する連携。
 (中山間部、山間部)

地域の方と街を歩く



地域の方と一緒に考え作成



江川町内会



避難マップ

校内屋上へ

避難訓練



園児の手を引いて高台へ **二次避難、校外の高台へ**

13.成果は少しずつ意識が高まってきたことです。課題は意識の温度差とありますが、これも埋まりつつあるのではないかと考えております。以下に地域と連携した防災教育の取組をいくつか紹介します。

15-18.西部地域共育コミュニティ本部は小学校・中学校・公民館・幼稚園が参加しており、活動しています。

19-22.各学校の避難訓練の様子です。

23.中辺路中学校は、校舎は高台にあります、下にある幼稚園の子たちを連れに行き避難する訓練もしています。

24-25.シンサイミライ学校を行った高雄中学校です。避難訓練では学校から一番近くにある避難所に避難しているのですが、津波が来たら地域の人でいっぱいになってしまうのではないかと、という課題が見つかったそうです。

26.東陽中学校です。近くにある小学校や保育所と合同で訓練した様子です。

27.山間部での防災講演会の様子です。

私は町内会の避難訓練の反省会に参加しました。そこでは訓練の参加人数が少なかったため、「呼び掛けないといけない」という意見がでました。一方で、「呼び掛けないと来ないようじゃダメだ」「呼び掛けないと来ないようじゃ意識が足りない」という意見もでていました。また、地域の方からは、「やっぱりお年寄りも動かんわ」「子どもが連れてあがってくれるようなそういう教育をしてくれよ」というようなことを言われました。確かにその通りだと思いましたので、これからの小学校・中学校における防災教育は大切だと考えています。これで、田辺市防災教育担当者会の報告とさせていただきます。



2. パネルディスカッション 1

(1) 話題提供 1 : シンサイミライ学校のビデオ視聴

コーディネーター 金井 昌信 (群馬大学大学院 准教授)

ビデオ視聴について

東日本大震災のあと、NHKの「シンサイミライ学校」という番組で、3年前に田辺第一小学校と高雄中学校で片田先生が授業をしております。一つ目のパネルディスカッションでは、田辺第一小学校で行った授業の様子を見ていただき、それを踏まえて、今後防災教育を行っていくうえで、「何を考えていったら良いか」という点を議論の中心に据えてディスカッションしていけたらなと思っています。

まず、片田先生が“一体どんな授業をしたのか”、“その授業を通じて、子どもたちがどんな反応をしたのか”という点に着目して映像で見ていただければと思います。

東日本大震災後、田辺第一小学校では防災の授業を行っていました。そのうえで、このシンサイミライ学校の授業は行われています。当時の防災の授業といえば、「東北ですごいこと起きたね。田辺も次に来るかもしれないよ。こんな大きな津波が来たら、こういうふうにはちゃんと逃げなきゃいけないよ。」という“ちゃんと逃げようね”“逃げるときはどういうふうにしようね”という“知識”を教える授業が主だったと思います。そのような授業をすれば、震災の映像を見た子どもたちは「すぐ逃げる」と言うに決まっています。それでは、本当にその「すぐ逃げる」と言った子どもたちは“ちゃんと逃げられるのか?”という点を、片田先生が突っ込んでいった授業の内容になっているかと思っています。



(2) 話題提供 2 : 田辺第一小学校「シンサイミライ学校を受けた児童の様子について」

佐々木 三千代 (当時の田辺第一小学校 教諭)

田辺第一小学校は沿岸部に位置しておりまして、4階の教室からは綺麗な海がすぐそこに見えるというような学校です。私は、シンサイミライ学校で片田先生の授業を受けた当時の4年生を担任していた者です。これから、片田先生に教えていただいた子どもたちが、その授業で何を学び、どのように変わったのかという点について、お話しをさせていただきます。

1. 写真は、授業を受けた子たちが6年生になったときに、夏休みの奉仕作業で育友会の方々と一緒にかまどベンチをつくったときの様子です。かまどベンチを使って日赤奉仕団の方と一緒に炊き出し実習をおこないました。

2. 2011年3月11日の東日本大震災が発生したときの様子をお話したいと思います。震災当時、この子たちは小学校2年生でした。授業も終わってほとんどの子どもが下校していました。私は数名の子どもたちと一緒に教室に残っていたのですが、大きな揺れを感じたのを今でも覚えています。田辺市にも大津波警報が発表されました。下校していた子どもたちの様子を紹介します。友達と一緒に帰っていたAさんは、途中で近所のおじさんに「警報が出たから、はよ帰りよし」と言われて急いで帰ったそうです。地震が起きたときに家にいたBくんは、お母さんとの約束で「学校に避難する」ことになっていたもので、いったん家まで、学校に向かいました。しかし、途中で友達の家へ寄りかかって遊んでしまいました。その後、この子のお母さんは、「学校に子どもがいない」ということで、私たちと一緒に探し回りました。家にいたCさんは、警報の放送は聞こえましたが、何もせずにそのまま家で過ごしていたそうです。

3. 津波が来るかもしれないと思って、家の2階や屋上に上がった子もいましたが、ほとんどの児童は避難もせずに、普段通りの生活を送っていました。私たちが少し地域を見回っても、自転車に乗って、「いま習いごとの帰りだ」と言って帰っている子もいました。このときには何の知識もなかったというのが実情です。子どもたちの様子からわかったことは、まずは津波ということに出会ったことがないので津波の怖さを知りません。そして、逃げなければいけないとは、わかっているけれど“どこに逃げればいいのか”



佐々木 三千代先生

資料04-1

自分の命は自分で守る
シンサイミライ学校から学んだことへ

田辺第一小学校
佐々木 三千代

東日本大震災(2011年3月11日)のとき

- ・当時小学校2年生
- ・田辺市でも大津波警報が流れた。

Aさん...友達といっしょに家に帰っている途中だった。
途中でおじさんに「警報が出たからはよ帰りよし。」と言われて急いで帰った。

B君...地震発生時は家にいた。
お母さんとの約束では学校に避難することになっていた。一度家を出て学校に行こうとしたが、途中で友達の家へ寄りかかって遊んでいた。
お母さんはこのB君を探し回った。

Cさん...家にいた。
放送は聞こえたけれど、何もせずにそのまま遊んでいた。

○津波が来るかもしれないと思い、家の二階や屋上に上がった児童は数名。
○ほとんどの児童は避難しなかった。

↓

シンサイミライ学校以前の児童の実態

- ①津波の怖さを知らない。
- ②逃げなければいけないと分かっているけどどこに逃げればよいか分かっていない。
- ③津波が来ると分かったときの行動を家族で話し合っていない。

津波の怖さを知る その1

- ◆2012年5月 小学校4年生
- ①「いなむらの火」の紙芝居

がわかっていない。それから、津波が来るとわかったときの行動を家族できちんと話し合っていないので、“どうすればいいのかわからない”といった状況でした。

4.そこで、まずは、片田先生に来ていただく前に「津波の怖さを知る」ということで、稲村の火の紙芝居を見せて学習しました。

5.次に、東日本大震災のときの映像を見せました。子どもたちからは「津波が来て人々は焦っていた」「車で逃げても津波に襲われたら逃げられなくなると思った」「津波はものすごいスピードで来ていた」「木や家やいろいろな物が流されていて怖かった」「津波はものすごいスピードで勢いよく来るからとても怖いと思った」「もし家族が死んでしまって一人ぼっちになったらどうしようと思った」というような“津波が怖い”ということや、“津波に飲み込まれて自分が一人になってしまったらどうしよう”というように感想が多く出されました。

6.そのときの板書です。このあと、子どもたちと一緒に「津波から命を守るためにどうしたらいいだろう」ということについても考えました。子どもたちからは、「とにかく高くて丈夫で海から遠いところに逃げないとだめなんじゃないか」という意見がでたので、次に避難場所について考えました。

7.子どもたちからでた“近くにある高くて丈夫で海から遠いところ”は、資料にある5箇所くらいでした。学校の屋上の高さも実際に測ってみました。東日本大震災のような大きな津波が来たときに、「本当にここで大丈夫だろうか」、「安全だろうか」と不安に思い、より安全な避難場所も考えました。そしてでてきたのが、近所にあるオーシティという大型スーパーです。次に、本当にここまで避難できるかどうかを考えました。

8.学校からオーシティまでは約1.4kmです。どのくらいの時間がかかるのか実際に走って確かめてみました。資料の写真はそのときの様子です。保護者の方にも一緒に参加していただき、9つのグループにわかれて避難しました。遅いグループで20分、早いグループだと14分でした。これなら津波が来る前に避難できるのではないかと子どもたちも私も考えました。ここまでが、片田先生に来ていただく前に、当時の4年生が実践していたことです。そして、片田先生にシンサイミライの授業をしていただきました。

津波の怖さを知る その2

②東日本大震災の映像

<児童の感想>

- ・津波が来て人々はあせっていた。車で逃げても津波におそわれたら逃げられなくなると思った。
- ・津波はものすごいスピードで来ていました。木も家も船もいろいろな物が流されていてこわかった。
- ・津波はものすごいスピードで勢いよく来るからとてもこわいと思った。もし家族が死んでしまって独りぼっちになったらどうしようと思った。

5

防災授業の板書



6

避難場所を知る

◆とにかく高くて丈夫で海から遠い所

- ・紀陽銀行
- ・玉置病院
- ・NTT
- ・学校の屋上
- ・愛宕山

より安全な避難場所
↓
・オーシティ



7

学校からオーシティへの避難訓練

◆学校からオーシティまでは1.4kmくらい 保護者の方といっしょにグループで避難訓練



8

家で一人にいるときに地震が起こったら・・・

◆シンサイミライ学校以前

- ・家族に連絡して、帰ってくるまで待っておこう。
- ・家族が迎えに来てくれるまで待っておこう。
- ・帰ってくるのを待って、家の人といっしょに逃げよう。



片田先生は

みんなを助けに来た家の人はどうなるのだろう？
逃げ遅れたりしないのかな？

9

9.田辺第一小学校に来られた片田先生は、「家に一人にいるときに地震が起こったらどうする？」と子どもたちに尋ねられました。ほとんどの子どもたちは、「家族を待って避難する」という答えでした。片田先生は「みんなを助けにきたおうちの人は大丈夫なのかな？」「逃げ遅れたりしないのかな？」と子どもたちに投げかけ、「みんなが助かるためにはどうしたらいいのかな？」と尋ねられました。ビデオにもありましたが、聞かれた子どもたちは「どうしたらいいんだろう？」「おうちの人を迎えにきたら、おうちの人を危ないな」「でも僕一人じゃ逃げられないし、どうしたらいいんだろう？」というふうに本当に困った様子でした。

10.片田先生は「津波てんでんこ」の話もしてくださいました。ご存知の方も多いと思いますが、「津波てんでんこ」とは、三陸地方に伝わる津波から子孫を守るための知恵で、“地震があったら家族のことさえ気にせずてんでばらばらに自分の命を守るために一人ですぐに避難せよ”という教えだそうです。

11.その後、ビデオにもありましたように『約束の命』というアニメを見ました。ここで子どもたちは“家族がお互いに、一人ひとりがちゃんと逃げるということを信じあっていて、一人ひとり別々にちゃんと逃げることを家族一人ひとりの命を守ることに”ことを学びました。そして片田先生からの宿題として、おうちの人にそのことを一生懸命伝えたわけです。

12.左海さんの家の様子がビデオにありましたが、ほとんどの子どもたちが、おうちの人にその日の授業で学んだことと、“自分は一人でもちゃんと逃げる”ことを必死になって伝えました。次の日、学校へ来て子どもたちにその日の様子・感想を書いてもらったのがこの資料です。

13.ビデオにあった女の子の感想です。ほとんどの子どもたちが、このように「ちゃんと逃げるよ」というように意識が変わったようです。

14.シンサイミライ学校で片田先生に教えていただいたことにより、田辺第一小学校の子どもたち、保護者、職員は多くのことを学びました。一つ目は、「自分の命は自分で守る」ということです。津波のことをよく知り、避難場所や避難経路を考え、一人でも自分から避難することが大事だということです。二つ目は「家族の絆」です。みんなが助

「津波てんでんこ」



◆三陸地方に伝わる津波から子孫を守るための知恵

地震があったら、家族のことさえ気にせず、てんでばらばらに、自分の命を守るために、一人ですぐに避難せよ。

10

アニメ
「約束の命」



家族がお互いに一人ひとりがちゃんと逃げるということ信じ合っていて、一人ひとり別々に逃げるのが、家族一人ひとりの命を守ることになる。

11

授業後の感想

学習をする前は、津波が来ると分かってても、自分一人で逃げることは絶対にできないと思っていました。でも、学習した今では、自分一人でも逃げないと、自分も家族も死んでしまうかもしれないということが分かって、「自分で逃げよう」と思うようになりました。家族とも「私は一人でもちゃんと逃げるから、お母さん達も逃げな。」と約束しました。

学習をする前は、津波がくると分かったときに、どこに逃げればいいのか分からなかったけど、今は、安全な高い所に逃げようと思います。自分の命は自分で守るということを学んだので、できるようになりたいと思います。もし津波がきたときに、家族を待っていたら自分の命も家族の命も危ないので、自分ひとりでちゃんと逃げたいと思います。家族も安全な場所に逃げてくれると思います。

12

私は、片田先生から学んだことと、ちゃんと自分一人で避難することを家の人に伝えるとき、みんなばらばらになるかもしれないと考えたら、つい泣いてしまいました。でも、家の人と話をして、『津波が来たとき絶対に家にはもどらない。自分の命は自分で守れるように、みんなで逃げるんじゃなくて自分一人で逃げる』ということ約束しました。いつ津波が来ても自分一人で逃げられるようにしたいです。



13

シンサイミライ学校で学んだこと

- **自分の命は自分で守る**
「津波のことを知り備えること」「高いところ高いところへ逃げる」「自分から進んで逃げる」が大切である。
- **家族の絆**
みんなが助かるためには家族が互いに信頼し合うことが大切である。
- **故郷田辺を愛する心**
津波がくるかもと恐れて生活するのではなく、愛する故郷田辺から犠牲者を出さないために自分達が今できる最善のことを考え実行していくことが大切である。

14

かるためには、家族が互いに信頼し合うことが大事だということ。三つ目は「ふるさと田辺を愛する心」です。津波が来るかもしれないと思って、恐れて生活するのではなく、この愛するふるさと田辺から犠牲者を出さないために、自分たちが今できる最善のことを考えて、実行していくことが大事だということ。15

15.片田先生によるシンサイミライ学校以降の取り組みとして、子どもたちは一人ひとり防災マップをつくりました。参観日に保護者の方と一緒にどこに逃げるのが安全かを考えたり、おうちの人との約束を決めたりしました。写真は参観日の様子です。決めたことをみんなの前で発表しました。

16.子どもたちがつくった防災マップの一部分です。自分の家、放課後よくいる場所、避難経路、家の人との約束、避難にかかる時間などを書き込んでいます。避難経路については、わかりやすくするために色わけをしました。

17.シンサイミライ学校で片田先生に教えてもらったことで、それまでとは違う変化が子どもたちにも保護者にもあらわれています。まず、家族で地震や津波について話し合う機会が多くなり、防災グッズの点検や避難経路の確認をしたというご家庭が増えました。「子どもたちがつくった防災マップを使って避難してみた」という声も保護者から聞かれました。そして、保護者の方の意識も変わりました。

「子どもだけで避難させるのは心配だし、本当に一人で大丈夫なのか」というように不安だったのが、片田先生の授業を受けたあとは、「自分の命は自分で守る。自分一人でもちゃんと逃げる」という子どもを信じてみよう。そして、「自分もちゃんと避難しよう」というように変わりました。ある保護者の感想を紹介させていただきます。

「最初に片田先生に『子どもだけでも自分一人でも逃げろ』と教えていただいたとき、目からうろこが落ちました。そこから毎回、『自分の命は自分で守る』『一人でも逃げる』ことを教えていただき、子どもたちにそういう気持ちが芽生えたことは大きな進歩でした。親自身も心配や不安が尽きない中で、子どもを信じてみようという希望が持てるようになりました。実際の地震、津波を考えると被害の大きさに心が痛み、足がすくみます。子ども一人ならなおさらです。でも、そんなときには地域の人々、近くにいる人たちが声をかけてくれたり、導いてくれたりするだろうとい

「シンサイミライ学校」以降の防災学習

防災マップ作り

参観日の授業で、地区ごとに集まって、どこに逃げるのが安全か保護者の方と話し合いました。



話し合ったことをみんなの前で発表



防災マップ



- ・自分の家と放課後よくいる場所
- ・避難経路(色分け)
- ・家の人との約束
- ・避難にかかる時間

「シンサイミライ学校」以降 その1

- ①家庭では・・・
 - ・地震や津波について話す機会が増えた。
 - ・防災グッズの点検や避難経路の確認をした。
 - ・作った防災マップを使って避難訓練をした。
- ②保護者は・・・
 - 子どもだけでは心配・不安

↓

「自分の命は自分で守る。自分ひとりでも逃げる」という子どもを信じよう。

「シンサイミライ学校」以降 その2

- ③子どもは・・・
 - <ある日の地震>
 - ・学校の近くにいた児童は
 - ・家にいた児童は
 - ・帰る途中だった児童は
 - <意識の変化>
 - ・子どもから大人に伝えていかなければならない。
 - ・いざという時は、私達高学年が低学年を連れて逃げないといけない。
 - ・家族って大切。

今、田辺第一小学校では

「自分の命は自分で守る」を合言葉に

- ①津波について知る。
- ②防災マップ作り
 - ・避難場所
 - ・避難経路
 - ・時間
 - ・家の人との約束
 - ・危険な場所
- ③避難訓練
- ④保護者への啓発

『犠牲者ゼロの田辺』を目指して

う希望を胸に、これからは『自分の命は自分で守る』『一人でも逃げる』ことを子どもと一緒に実践していきたいと思います。避難場所や経路についてはまだまだ不安が残りますが、最善の方法を家族で考えていきたいと思います。」という感想をいただきました。多くの保護者の方から、「本当に子どもを信じてみよう」、「実際に私もそういうふう実践します。いろんなことを学べて良かったです。」とおっしゃっていただきました。

- 18.子どもたちもちろん変わりました。シンサイミライ学校の授業があつてからしばらくした日に地震が発生したことがありました。私は教室にいましたが、子どもたちは教室に戻ってきました。「どうしたの？」と聞くと、「先生、地震があつたやろ？津波来るかもしれないと思って戻ってきて、屋上へ逃げようと思ったんだ」と言っていました。私はそんな意識が全然ありませんでしたが、子どもたちは教えられたことはすぐに頭の中に入るんだなとビックリしたのを覚えています。学校の近くや運動場にいた子どもたちは、教室に戻ってきて屋上に逃げようと思つたり、実際に逃げた子も多かったです。地震が発生したときに帰る途中だった子どもたちは、近くに高い所がないか探したと聞きました。地震から津波を予想した子どもが多くて、私はびっくりしました。明らかに子どもたちの意識が変わりました。自分のことで精一杯だった子どもたちが、「この防災の学習を通して学んだことを、大人にも伝えていかなければならない」と思うようになり、「いざというときには私たち高学年が低学年の子どもたちを連れて逃げなければならない」と思うようになりました。もちろん全員ではありませんが、そういう意識が高まったのは事実です。そして何より家族を思う心が育ちました。
- 19.シンサイミライ学校で片田先生に授業をしていただいてから 3 年が経ちましたが、今も田辺第一小学校では、「自分の命は自分で守る」を合い言葉に、津波について知り、一人ひとりの防災マップを作っています。地震の避難訓練はもちろんですが、学年ごとにオーシティーまで走ることもしています。そして、保護者の方々にも地震や津波について知ってほしいと思い、参観日等を使って、防災の授業をしています。「今まで知らなかったことを、子どもたちと一緒に学べて、防災について考える良い機会になった」というご意見をいただいています。田辺市では、地震や津波だけではなく、地震や津波に限らず、“災害による犠牲者ゼロの田辺”を目指して、自分の命は自分で守れる子どもたちにするために、保護者の方々や地域の皆さんとともに、これからも防災学習に取り組んでいきたいと思っています。

(3) 討論「防災教育に求められるコミュニケーション」

パネリスト	左海 伸和 (当時の田辺第一小学校 児童保護者)
	佐々木三千代 (当時の田辺第一小学校 担任教諭)
	玉置 浩 (現在の田辺第一小学校 教諭)
	京田 光広 (シンサイミライ学校 ディレクター)
	片田 敏孝 (群馬大学 授業実施者)
コーディネーター	金井 昌信 (群馬大学)

以下略



金井 このパネルディスカッションでは、田辺第一小学校の“シンサイミライ学校の授業”、そして“それを契機に現在実践されていること”を題材に、「子どもたちと、どのように防災について語りあい、考えていけばよいのか」というように、『防災教育を教師と子どもたちとの間の“コミュニケーション”という観点で捉えたときに、何が重要になってくるのか』について、皆さんと一緒に議論させていただきたいと思います。まずはパネリストの皆さんに一言ずつ自己紹介がてらコメントをいただければと思います。

左海 3年前に佐々木先生から取材の依頼の電話をいただきました。当時、片田先生が授業に来られることを、僕ら保護者は知りませんでした。私もあまり難しく考えずに、「できることであつたらやりますよ」という感じで取材をお受けしましたが、まさか3年後にこうしてこの場に居るとは思いもしませんでした。ビデオにもありましたように、家の居間までNHKさんのカメラが入りました。子どもたちは昼間に授業を受けましたが、一枚のプリントはいただきましたが、私たちは授業を受けておりませんでしたので、ほとんど授業内容を知りませんでした。

NHKさんからもあまり説明もなく、娘が帰ってきて、いざ話を始めるのですが、よくわからないまま、どうしたものかと家族会議をしたのがビデオの風景でした。本当に今となっては片田先生と出会い、防災教育をしていただいたことで、人生で大切なものを得たように思います。

玉置 学校では、防災に限らず、大きな事象があるときばらばらはその対策と取り組みが進みます。しかし、少し時間が経過すると忘れてくるという問題が大きいと思っています。このような機会を通じて、“何も起こっていない今、できることをどれだけするか”が、一番大事な点じゃないかと思っています。普段から学校教育の中で、子どもたちに、「災害が起きておらず、何も心配することがないときに、どれだけ緊張感のある授業をすることできるか」など、工夫して

いかなければいけないと思います。今回の連絡協議会や担当者会は、そのことに気づいただけでも意義が大きいかなと担当者としては思っています。

京田

シンサイミライ学校を始めた当時は、NHK の大阪放送局におりました。今は NHK の神戸放送局で働いています。シンサイミライ学校からスタートし、東日本被災地に通いながら、幅広く震災について番組をつくっております。先生のお話にあったように、大阪・神戸でいえば、阪神淡路大震災以降、防災や減災という言葉も生まれて、『NHK スペシャル』等、いろいろな番組で『命を守るために』という番組を20年前から作り続けてきたと思います。今度、東日本大震災から5年を迎えます。被災後の区切りには、震災5年、震災10年のように、5年刻みみたいなものがあります。阪神淡路大震災は、震災10年が一区切りで、そこから少し空気が変わる中、神戸でもどんどん意識は下がりました。震災15年も、かなり大規模な番組をやりました。正直言いますと、東日本大震災発生時は、メディアに携わる人間としては、「震災は15年で打ち止め、やりきった」みたいなそういう気分でいました。

阪神淡路大震災から16年目の3月11日に発生した東日本大震災の衝撃は、“本当に自分たちはちゃんとやれてきたのかどうか”を、自分たちがもう一度問い直すきっかけになりました。そういう中で、何をやればいいのかと思ったときに『シンサイミライ学校』という発想が生まれました。この『学校』というのは、狭い意味での教室での学校教育というよりは、子どもだったり、家庭だったり、地域の人たち、行政、神戸でいえばNPO だとか様々な団体がありますが、それらの人たちが垣根を越えてみんなで学びあうような場所ができないか、という発想で『シンサイミライ学校』を番組やホームページ含めて展開しました。

そういう中で、片田先生に出会うことができました。片田先生の講演は、最初に大阪で聞かせていただいたと思います。「いくら防災の講演会をやっても防災好きしか集まらない」「全然広まらない。だから学校なんだ」という発想は、目から鱗でした。『NHK スペシャル』は大きな素晴らしい番組ですけど、好きな人しか見ないというところもあります。そういう中で、まったく新しいかたちで防災をやろうということで『シンサイミライ学校』がスタートしました。田辺第一小学校、高雄中学校の方々には最初、とにかく授業から始めました。カリキュラムなど含めて時間を確保することが大変でしたが、なんとか1年間やらせてもらいました。その結果、3年経って、今、こういう広がりがあるということを本当に嬉しく思っています。



左海 伸和さん



玉置 浩先生



京田 光広さん

片田 あれから 3 年経ちました。その後、佐々木先生に子どもたちの様子や家庭の様子を聞いたり、また左海さんのお話を伺ったりして、良かったなという思いをもっております。ただ、正直、シンサイミライ学校の番組を撮ったときの授業も、細かな授業計画を立てていたわけではありません。NHK から事前の打ち合わせで、『約束の命』というアニメをつくりました。いつも片田先生の話している内容に沿ったものです」ということくらいしか聞いていませんでした。しかし、そのような中で授業をしたことが良かったのかもしれませんが。そのときの状況の中で、素直に思ったことを子どもたちに伝えました。予定調和で「こういう内容をこう教える」という淡々としたものではなくて、「僕はこう思うんだ」ということを子どもたちにぶつけていく中で、子どもたちの心が動いたのではないかと思います。先生方があの授業をどのように見ていただいたかはわかりませんが、僕自身は教育の専門家ではありません。正直、元気な子どもたちが目の前にいっぱいいる状況は、面食らいます。日頃は、講義をする相手は大学生ですから、うるさかったら「黙れ」と言って黙らせて、淡々と授業をやります。それから講演会で大人を対象に話します。「危機感のない人は寝てればいい」くらいの感じでやっているわけです。あのよう、子どもたちに向かい合って授業をやるというのは、「僕の思いをちゃんと伝えたい」「伝えなきゃいけない」「子どもたちが聞いてくれなかったらこっちのせい」という思いもあります。ですから、焦りながら自分の心をどうコントロールしていいのか、また、子どもたちにどうしたら伝わるのかということを探しながら、数少ない経験をもとに、子どもたちに向かい合うわけです。シンサイミライ学校の授業そのものは、東日本大震災で釜石の子どもたちが一生懸命逃げてくれたというあの行動から、「何が子どもたちを動かしたのか」を考えながら授業をやりました。一つの結論としては、淡々と防災に関わる知識を付与していく教育ではない。とにかく子どもたちを突き動かすような、子どもたちの心を揺さぶることが必要なんだと思います。それが、「誰かに言われたから」とか「知識として逃げなきゃいけないんだ」という思いをつくるのではなく、「逃げたい」もしくは「逃げなきゃ」「僕は逃げるんだ」という、子どもの心の内から起きあがってきた内発的な気持ちをつくってやることにつながるのではないかと思います。そして、そういうコミュニケーションをするにはどうしたらいいのかという思いと、子どもたちと向い合わなきゃいけないという思いでやった授業です。ぶっつけ本番ですし、子どもたちの反応もどうでてるかわからないまま、やっているものですから、出来上がってみたら、こうだったということなのです。

また、一つ確信が持てたのは、“教える側の心づもり一つだな”ということです。子どもたちとのコミュニケーションなので、こちらがそれなりの思いをもって向かい合えば子どもたちの気持ちを変えることはできる、という実感もこの授業で持ちました。授業をやる側の心持ちをそこまでもっていく、もって行って子どもたちと向かい合うことは大変ですが、改めてビデオを見てみると、あの授業は僕の中ではけっこう良い授業ができたなと、思います。ただ、教育の専門家ではないので、ちょっと乱暴だったのかもしれませんが、その辺については先生方からも忌憚のないご批判もいただければなと思います。

金井 すでに確信に迫るところを、片田先生がキーワードとしてだしていただきましたが、「あの授業の何がいったい良かったのか」という点は追々考えることにします。

佐々木先生にご紹介いただいたように、シンサイミライ学校の前にも、子どもたちは防災の授業を受けていました。しかし、子どもたちが、親に「今日、防災の授業でこういうことを習

ってきたんだよね」と言うことはそんなにならないような気がします。その一方で、片田先生のシンサイミライ学校の授業を受けたあと、宿題というかたちで「習ったことをお父さんお母さんと相談してこい」と言ったからというものもあるかもしれませんが、子どもたちはみんな親に言ったわけです。子どもたちに「親にも伝えたい」と思わせたのは何だったのか、というのがこのパネルディスカッションで重要な点になるのではないかなと思って話を聞いていました。

その中身に入る前に、左海さんにもう少し詳しくお話を伺いたいと思います。あの日、NHKからの事前情報もほとんどなく、いきなりカメラが押しかけてきて、娘さんが切実に話をされたということでしたが、あの日以前に、左海さんのお宅では、一体どんな話をされていましたか。また、娘さんから話を聞いたときに、保護者としてのどのように思いましたか。

左海 正直に申し上げまして、あれ以前は親子で「どうやって逃げる」とか「地震が来たらどうしよう」とか、そういったことをほとんど話したことはなかったです。片田先生の授業を子どもが受けてきて、ビデオのような家庭での様子がありましたが、親としたら、「子どもを思って逃げる」という意思がまったくありませんでした。当時、娘は小学4年生で、一つ上に小学5年生の息子、そしてもう一人小学1年生の娘がおりました。それぞれまだ小さいですし、まず子どもの安否が気になるころでした。そのため、娘が帰ってきて、そういう授業を受けてきたという話を聞いて、最初は「え!？」という感じでした。それぞれが好き勝手に、じゃないですが、“それぞれの判断で逃げる”という話を聞いていくうちに、「そういうことか」「それが一番みんなが助かる方法なんだな」と思いました。命さえ助かれば、狭い町なので、あとで会うことはそんなに難しいことでもないでしょう。私の妻も同じ気持ちでしたので、あの授業をきっかけに親としてもそういう意識の変化がありました。

金井 二つ目のパネルディスカッションの内容になってしまうかもしれないのですが、学校で防災の授業をやる際に、地域と連携したり、保護者の方に協力してもらって一緒にやっというところを考える学校も多くなっていると思います。いろいろなやり方があると思いますが、このような方法も一つの連携のあり方になるのではないかなと思います。いくら片田先生がいろんな町に出張っていても、そこに出てくる人は意識の高い人です。そういう人たちではない、意識の低い人に情報を伝えることが難しいことは、ずっと前から言われていました。シンサイミライ学校の授業を受けてきた子どもが必死に保護者と話をし、それを聞いて保護者が変わったというのが、今のお話からもよくわかりました。

先にやり方の話は終わらせてしましましょう。京田さんにお聞きします。片田先生がシンサイミライ学校の授業をする際に、保護者の方に片田先生の名前で「このような授業するので、ご協力お願いします」という依頼文書を配布されていたと思います。このように、子どもの授業だけではなく、そこに保護者や家庭を巻き込んでいったねらいや着眼に至った経緯、そして、その効果として期待したことなどがあれば、教えていただきたい。

京田 シンサイミライ学校の枠組みを説明したときにもお話しましたが、『“学校”というかたちで子どもたちをきっかけに、いかに家庭や地域に広めていくのか』をシンサイミライ学校設立の理念として最初に決めていました。そういうイメージの中で片田先生と出会いました。片田先生から、釜石では、子どもたちへの宿題と保護者に協力依頼の手紙をだす取組を實踐して、非常に効果があったという話を聞きました。本当に効果はあるのか、実際に見てみたいという思いで企画しました。先ほど厳しいご指摘がありましたが、連絡が滞っていたのではなく、左

海さんに十分な説明をしなかったのは、そこで具体的にどんなことが起きるのか、片田先生が子どもの心を動かしたように、子どもが親の心を動かせるのかどうかをドキュメントとして捉えたいと思っていました。良い番組、面白い番組をつくりたかったわけではなく、この素晴らしい“片田防災”をちゃんと見つめて、そのことを過去の話ではなく、テレビというメディアを通して表現したいと思っていました。かなりのプレッシャーがあったかと思いますが、左海さんには頑張ってくださいました。一方で、カメラがなかったら、あそこまで頑張れたか、という思いもあります。左海さんの素晴らしいノリといえますか、ある種のホームドラマじゃないですか、その中で演じるというのは大事です。手紙を読んで理解して、親としてある意味で演じていると思うのですが、それがテレビカメラの存在でリアルになって、あの涙までいったのかなと思います。我々もあそこまでのことまったく考えておりませんでした。

片田 「NHK の準備が悪い」という批判をしているわけではないんですね。僕の授業でもそうですし、シンサイミライ学校の番組そのものもそうですけれど、予定調和というか事前に決めたことに沿ってやることなんてできないんです。今変えようとしているのは、子どもたちの心であったり、親子の信頼関係のもとでとられる行動であったりするわけです。事前にシナリオを描いてその通りにやっていると、知識としての理解にとどまってしまう。そうではなくて、その場、そのときに起こってくる子どもたちの素直な感情を見つけ、その動きをしっかり読みとり、そしてちゃんとコミュニケーションしていくという中に本当の心の動きというのがでてくると思います。そういう意味では、「準備が悪い」と言いましたけれど、批判しているわけではなく、だからこそ、ああいう非常にリアリティのある、現実感のあるものになったのではないかなと思います。

金井 番組をつくるうえでの注意点を議論するところではないのですが、まずは触れて置かないといけないなと思ったのは、釜石で防災教育を始めた背景です。片田先生が釜石で最初に防災教育を始めたとき、それまでずっと大人を相手にコミュニケーションをとってきましたが、どうしてもうまくいかないし、全然広がりませんでした。その中で、言葉が非常に悪いのですが、“子どもをだし”にして、子どもを介して地域に防災を広めていくことを目指して、防災教育を始めました。その経緯に京田さんはじめ皆さんが共感し、番組をつくっていただいたのだと思うのですが、田辺の事例を見ていると、僕は逆なのかなとも思いました。子どもの学校での授業の成果を最大限発揮するためには、家庭の協力は必要不可欠なんだと描かれているように感じました。もともと、左海さんのお宅は「番組前にほとんど何もなかった」とのことでしたが、「そういうご家庭でも、子どもの熱の入った言葉というのは響くんだよ」ということをご紹介したいなと思っていろいろお話を伺ったところです。

ここで片田先生にお話していただこうかと思います。議論の中でも、知識の教示、「逃げろ、逃げろ」と言うだけの教育、それから「津波っていうのはこういうもので逃げ方こういうんだよ」といった“知識の教育”ではなくて、「ちゃんと逃げたいんだ」「逃げなきゃいけないんだ」という内発的な気持ちをどうつくるのが重要で、それを狙った授業がシンサイミライ学校だったとのことでした。また、その中で、先ほどキーワードとして“心を揺さぶる”という発言もありました。シンサイミライ学校以外でも、いろいろな地域の事例を見ていて、片田先生ご自身は、「子どもの気持ちを焚きつける」というか「やる気にさせる」というか、子どもたちに主体性をもたせるために、何が重要だとお考えなのか、お話をいただきたいのです。

片田 防災教育のプロみたいに言われていますけれど、全然そうではなくて、本当に毎回毎回子どもたちに向かい合って動揺しています。「どういうふうに語ればいいのか」「どうすれば子どもたちの心を動かせるのか」「どうすれば子どもたちの心に僕は逃げるんだという気持ちをつくれるのか」ということに対して、毎回毎回手作りですし、毎回毎回個人と個人のコミュニケーションですから、「このようにやればよろしい」なんてうまくいくわけないんですね。毎回毎回悩みながら、正直恐れながらやっています。ただ、僕自身そんな中で防災教育とはなんぞやとずっと僕なりに悩みながら続けてきたわけですけど、おそらく先生方もそうだったと思います。僕も最初はそうでした。

防災教育というと、一定のかたちがあります。津波の危ないところであるならば当然津波のメカニズムは教えます。なぜ怖いのか、津波を知る。これも重要なことですので、それを否定しているわけではない。「過去にこんな被害がこの地域でありました」「だから逃げることは大事だよ」と、このように逃げることの必然性を理路整然と子どもたちに語っていく。これがこれまでの防災教育だったんだろうと思うし、それ以上のものも頭に浮かばなかったんです、正直。だからそれを僕も最初はやっていたんです。子どもたちの防災教育をやらなきゃいけない。そのご当地の津波の歴史を調べ、被害の歴史を調べ、その地域の地形の地図を持ってきて、「この学校だったらこの辺かな」というところをパワーポイントに準備して子どもたちに授業をやる。僕がやらなくてもいいよなっていう思いもありました。僕がやらなくてもいいし、誰がやってもそれだったら一緒だなと。そして何よりも「それをやったら子どもたちは本当に逃げるようになるのだろうか」って、率直な思いとしてそれがいちばん僕の中で疑問でした。

じゃあ、防災教育を本当に子どもたちが一生懸命逃げる子になるというかたちに仕上げているために、僕らは何を子どもたちに教えればいいのか？ わかったことは、そもそもこういう **How To** を教えようと思った時点で、ダメだなということです。やりながら気づいたことです。どれだけこちらが熱心にやっても「わかりましたか？」と言えば、子どもたちは「はい」と言う。そして、津波が危ないところだって子どもたちもわかっているから、本当に従順に素直に「なるほど」ってわかってくれる。知識としての習得はある程度のところまではいけると思います。僕よりも先生の方がそれはうまいんだと思います。でもその領域でとどめたときに、本当に子どもたちは、その日そのとき、今まで経験したことのないような揺れの中で「逃げなきゃいけない」という知識があるだけで、本当に逃げられるでしょうか。「大事にしているうちのペットの犬は大丈夫だろうか」、「お母さんはいまどこにいるのだろうか」、「妹はどこにいるのだろうか」など、「逃げなきゃいけない」という知識以上に、その日そのときの状況によって、子どもにとって気になることが頭にポンッと思い浮かんでくることがあるはず。それぞれ大事にしている人のことが頭に浮かびます。加えて、自分の命の危険に対しては、正常化の偏見という心理特性があつて、子どもであれ、大人であれ、自分の命がこれから無くなるうとしている、襲われて危ない目に遭うかもしれない、というリアリティを人間誰も持てないものです。自分の命が本当に危ういというのは、ナイフをちらつかされるとか、そういう状況でしか人間は本当に自分の命の危険をリアルに感じられないものです。その一方で、そのときに、頭に浮かぶのは自分の命の心配以上に、自分の大事にしているもの、お母さんだったり犬だったりということがまず頭に浮かぶ。そうすると、逃げなきゃいけないという知識がどこかに行ってしまうんです。逃げないといけないことは百も承知です。でも、その知識以上に、

「お母さんは僕を迎えにきてくれるだろうな」とか「妹はどこに行っちゃったんだろうか」とか、そんな中でそのときそのときの行動が規定されてしまう。結局、その行動の結果として“逃げない”という状況になる。

そうすると、理路整然と「逃げなきゃいけない」と教えたあの教育はどこに行ってしまったのか。その教育の成果はどこにいったらいいんだ。最初に出てくるのは「逃げなきゃいけない」という知識ではない。もっと大事なものは、その日そのときの頭に浮かびくるものです。それを前提にしたとき、それであつてもちゃんと命を守れる状況を整えるために、子どもたちに考えさせておかなければいけない。事前に子どもたちの頭に一度考えさせておかなければいけないこと、それは何なのかを考えなければいけない。先ほどの授業でもそうでしたけれど、「みんな逃げるよね？」と言えば、「はい」と言うわけですよ。そこで、改めて僕は「本当に逃げられる？」と問いかけます。「本当に逃げられる？」と問い直したあたりから、子どもたちの知識ではなく、その日そのとき起こることのリアリティがでてきます。「その日そのとき、君の頭をよぎることは何？」「君にとって大事なことは、学校で教えてもらった『高いところへ逃げないといけないよ』という知識を実行することなの？」その日そのとき迎えに来るであろうお母さんやお父さんのこと、その結果として起こること、それを子どもたちの頭の中に一度作り上げていくんです。そうすると、いっぺんに子どもたちの中にリアリティが出てきて、子どもたちは正直あの場面は動揺しているんですね。正直、僕も動揺しています。こんないわば答えのない、「お父さん、お母さんのことも放っておいて逃げちゃえ」って、これから子どもに教えようとしているわけですね。でも、そのときに子どもたちの頭によぎった親のこと、それからてんでんこするために、子どもたちの心にひっかかっている絆のこと、そんなこともどう子どもたちの心の中で処理させてやるのか。そこで信頼という言葉、信じあうこと。それぞれ信じあつて逃げる、その状況を整える、頭にももちろんお父さん、お母さんのことは思い浮かぶんだけど、僕が逃げていければお父さんも逃げてくれるんだ、というところに持ち込みたいがために、子どもたちの心を思いっきり揺さぶっているわけです。

その日そのとき懸命に逃げる子をとにかく作り上げないと子どもの命を守れないわけです。そのときの子どもたちの心の動きを、自分の中で現実感をもって再現し、それを手当てしていくという教育が必要になるわけです。先ほどのように「本当に逃げられる？」というところから紐解いて、子どもたちに自分が逃げることの意味、「そのときにお父さん、お母さんがそれを信じていてくれれば、お父さんやお母さんも逃げられるよね」というところまで持ち込んでいく。『自分の命を守る』ということの『家族の絆』と『自分の命』の意味を考えさせる。そして、自分だけじゃなく、お父さんもそう思ってもらわないとダメなわけです。そこで、左海家のような子どもたちのチャレンジがあるわけです。子どもたちにとっても大きな心の負担だろうと思います。何にも考えていない左海さんのお父さんがいて、友稀ちゃんは「逃げよう」と今日の授業で思った。でも、友稀ちゃんがいちばん心配しているのは自分の命ではない。迎えに来ちゃうお父さん、お母さんのことなんです。友稀ちゃんなりに勇気を振り絞って話を切り出したものの、その重さに耐えかねたわけです。だけど、そこまでもっていったからこそ、お父さんはそれを感じ取ったわけです。そして、お父さんも子どもに「逃げる」と宣言してくれたことで、友稀ちゃんが安心して逃げられる裁量をつくったということにもなる。

こういう設計しているわけです。防災教育をはじめ、冒頭申し上げた津波のメカニズムを教え、理路整然と逃げなきゃいけないという知識を与え、「逃げますか?」「はい」という良いお返事をもらう。それにとどまっていた防災教育から一步脱する防災教育へのそこに大きな転換があるわけです。いま、子どもたちに付与しているのは知識じゃない。もちろん知識も必要です。それは、内発的な意識をもった子どもがつかって初めて有効になる知識なんです。その内発的な気持ちをつくるということにおいて、そのコミュニケーションの設計をしているように思うんです。子どもたちとのこのコミュニケーションの設計。子どもたちにこういう問いかけをしたときに、子どもたちの心はどう動くのかを僕が予想し、そして、そのもとで次に投げかける問いを考える。その結果として、子どもたちの心を「僕は逃げるんだ」というふうに動かしていく。そして、その障害になる『お父さんやお母さんが迎えに来てしまう』という問題も解決して、これで晴れて友稀ちゃんは「私、逃げるもん」って思っていると思います。お父さんもたぶん信じておられると思います。こういう状態をつくりあげて、初めてその日そのときの最大の懸案が解決できる。そして行動にうつせるようになる。こういう設計をしているんだろうと思います。そういう思い至るまでにはずいぶん時間がかかりました。

僕が思うに大事なことは、自分の教えなきゃいけないと思っていることを箇条書きにして淡々と伝えようと思うことではなく、子どもの心の側に立ってみたときに、いまこの子にとってこの刺激、この情報はどう心を動かし、その結果この子は何を心配し、もしくはいまどう思っているのかということをつぶさに読み解いて、そのうえで次の情報を与え、順番に子どもたちの心を導いていくというこういうコミュニケーションの設計なんだということです。これに気づきました。まだシンサイミライ学校を撮影していただいた当初は、確たるものまでもっていませんでした。ただ“何となくそうなんだ”ということを経験し、その後各地の学校に呼ばれて教育をやっていく中で、徐々に積み重ねていってこんなことかなと思い始めた矢先の撮影がこれでした。いま、正直確信に変わっています。これでいいんだと思っています。ただ、毎回毎回手作りで、どういうふうに子どもたちの心を動かしていいのかっていうことに対しては毎回毎回手探りです。例えば、牟岐町にお邪魔したときにも、この話題で子どもたちに授業をやったことがありました。子どもたちは「逃げる」と言ったわけなんですけれど、改めてシンサイミライ学校みたいなアプローチもしたんですが、その前にもう一つ挟んだのは、すごくリアルな状況想定をさせました。子どもたちは、学校で避難訓練を繰り返していたため、学校から逃げるイメージしかもっていませんでした。しかし、子どもたちは学校によるよりも家にいる時間の方が長く、しかもその大半はお布団の中にいる状況です。ときにはお風呂に入っていることもある。そのような状況で地震が発生したらどうするか?服を着て逃げる?裸で逃げる?冬場で寝ているときに地震が発生したら、パジャマのまま飛び出したら寒いかもしれない。どんどんリアリティを子どもたちに与えながら、そのときどうするのかを考えさせる問いかけを続けたというように思います。ちょうどそれが固まりつつあったときに、シンサイミライ学校の撮影がありました。あれから何年か経って、現在の田辺第一小学校の子どもたちの様子や、左海さんのお話を伺いながら、またその後の僕自身の取り組みもかえりみながら、そういうことなんだなという実感を持ち始めています。

だから「こうすればいいんだ」という“カタチ”を申し上げられないのが非常にづらいんですね。「いまのケースはこういうケースだ」「子どもたちの心を動かすこういうケースだった」

と言っているだけで、他の状況想定、他の場面では、どうコミュニケーションしたらいいのかは毎回違うように思います。ただ大事なことは常に子どもの心がどう動くのかを常に見続けているってことです。それに寄り添いながら常にコミュニケーションしていくことだということとは間違いないかなと思います。

金井 「“カタチ”はない」と片田先生はおっしゃっていましたが、片田先生が授業されているのを見ていて、いくつか“カタチ”にできるキーワードというか知見はでてきたのではないかなと思うところがあります。

やはり知識として得たものではなく、いかにして自分の生活、自分の行動に鑑みて、“わがこと感”を持てるか、“リアリティ”を持てるかが、いちばん最初のとっかかりの部分で必要なのだと思います。しかし、津波という命を危険にさらす脅威に対してでも、残念ながら人はその脅威を自分のこととしてなかなか受け取れない。ここに踏み込んだときに、その子どもたちにとって重要な第三者、他者を介在させている。そこで他者への思いを喚起する問いかけをいれている。今回であれば「自分のお父さん、お母さんが逃げられないかもしれない」と。そういう背景の中で、自分だけではなく、自分の行動と自分の大切な人の結びつきの発問があったのかなと思います。

そしてもう一つは、そのときその状況になったときの対応を、リアリティを持って考えさせる中で、どちらがいいかの正解がない問いに対する葛藤をうまくつくっている点です。ただ、葛藤させておわりではなく、一つ正解があるような気がするんです。片田先生のいまの言い方をちょっと変えるならば、「その場そのときその状況に直面したら、もうどうすることもできない」「けれど、時間を巻き戻して、何も起きていない今の状況ではどうだろうか」「今ならやれることがあるよね」という正解があるような気がします。そして、いちばん重要だと思ったのは、「振り返ってみて、いまやれることがあるよね」「さあやってみよう」と言って、必ず実践につなげている。今回のシンサイミライ学校であれば、おうちの人のことが心配なのであれば、宿題というかたちで、おうちの人にちゃんと伝えてみることを促す、という実践をさせている。さらに重要なのが、その実践した相手から自分のやった行為が認められて、「それでいいんだよ」「やってくれてありがとね」という評価が自分のとった行動をさらに勇気づけている。こういうかたちが、一時間の授業だけじゃなくて、一つの実践として、子どもの行動まで含めてコミュニケーションの設計をする。一つの授業案じゃなくて、そこまで踏まえた防災学習がいま重要なんじゃないかなと片田先生の実践のお話を聞いて思ったところです。

ぜひ、田辺第一小学校の佐々木先生と玉置先生にお聞きしたいのですが、佐々木先生、先ほどの話題提供の中で、子どもだけではなく、教職員も「自分の命は自分で守る」「家族の絆」「ふるさと田辺を愛する心」が大事であると、片田先生から教えていただきましたとおっしゃっていました。しかし、先生は教える側ですから、片田先生の授業を見て、「良いことを学んだ」だけでなく、あの授業を見た中で、授業実施者として、「こういうことが必要なんだな」ということとか、片田先生の授業から学んだことがあったら教えていただきたいです。

佐々木 あれから3年経ったのですが、片田先生の授業をそばで見させていただいて、同じことを次の子どもたちにもしてみようと思って、やってみました。しかし、片田先生と私との津波に対する思いであったり、熱意に多少の違いがあるので、うまく子どもたちには伝わらないところがあるなっていうのが自分自身の反省としてはあります。やはりリアリティというか、先ほど

から言われていますが、知識だけではなくて、思い、“絶対に逃げるんだ”って子どもたちに思わせるということがとても大事だなんていうふうに思います。

金井 その「思いが大事だな」と思っていられしやることを、授業などで、「子どもたちと接する中で具体的にこういうふうにやってみました」みたいなのがあったら教えてください。

佐々木 それこそ片田先生に教えていただいたときのものを真似しながらやっている状況ですけど、そこには「本当に私の心をちゃんといれないといけないな」と思うことと、もう一つは継続的にということか、「いつもそういうことを頭の中に入れて子どもたちに接しておく」ことも大事なんだろうなと思います。何かがあったから教えるではなくて、何も無いまにできることをやっぱりやっていきたいなと思います。

金井 玉置先生にもお聞きしたいのですが、シンサイミライ学校のあと、田辺第一小学校ではいろいろな実践がおこなわれていると思うのですが、「ここ注意している」とか「ここはうちの小学校売りですよ」というようなことはありますか。防災学習のメニューとして、『津波について知る』という授業をやっています、「防災マップづくりをやっています」という学校は多いと思います。避難訓練もそれぞれ工夫してやっていると思います。しかし、取り組み自体にユニークさを求める必要ないと思うんです。佐々木先生もおっしゃったように、そこに第一小学校の先生方に「どんな思いを込めているか」というのが何かあったら、先生の思いで結構ですので教えてください。

玉置 防災教育だけでなく、何気なく日頃から、そういう要素が入っているように思います。防災教育の時間だけをとるんじゃなくて、いろんな教育活動全体の中で、いろんな教科に散りばめられている。結局は、「防災教育を通して」というわけじゃなくて、“他者への思いやりの心”だとか、“命を尊重する態度”が、防災教育の場面で、地震や津波の場面で、子どもの心が本気で動かされた場合に、何か継続したものが芽生えていくのではないかと思います。その期待は大きいと思います。命とかそういう“他者への思い”、“家族の愛情”とか“地域への貢献”というものは、いろんなところで教育できると思うんです。ただ、片田先生のお話を伺っていると、防災教育ってそのことをゴールに近づけるような要素が大きいと思うので、重要だと思っています。全職員そういう思いで、目当てとしては、“自分の命は自分で守る”、それから“命を尊重する”、“他者を思いやる”、“地域への誇りと愛情”、これらを第一の大きな指導の目標としてやっているわけなんですけど、1時間の授業の中の最初の段階で、子どもの思いを動かしてから、テクニックの部分やメカニズムにいかないただただ終わっていただけになると思う。そのため、いかに材料をそろえて、子どもを本気にさせていくか、を考えた授業づくりがこれから大きな第一の課題と思っています。そのためには、お互い見合っ、振り返ったり、検証していったりする場がなかったらなかなか難しいかと思います。日頃忙しい中で、他のこともいっぱいする中で、その時間をいかに見つけていくか。これも一つ大きな課題かなと思います。

金井 片田先生や我々が学校に出向いて授業しようとなったら、1時間一本勝負なんですよ。それまで一体子どもたちがどんな活動をしていたのかがわからない、そもそも性格もわからない、そういう中で、1時間をどううまく設計して防災上の効果を高めていこうか、と考えなければならぬ。しかし、学校の先生方でしたら、普段から子どもたちとの付き合いがあるので、一回の授業で全部片付けようとするのではなくて、いろいろな学習場面や学校活動を通じて、命

の大切さなどを継続して意識させることができる。そういう観点も現場の先生方には重要なと思います。ただ、そうはいっても、「防災の学習をする中で一つの実践を試してみよう」となったときに、今日見ていただいたあの発問と子どもたちへの投げかけは、一つの案でしかありません。実際に、佐々木先生も真似てやっていただいたということですが、ああいう子どもの心を揺さぶって、主体性とい



西本 貴俊先生

うか、「逃げなきゃいけない」と強く思わせる授業案が何か他にないのではないのでしょうか。

それぞれの地域でも、おそらく同じような議論が少なからずあると思います。知識を教えるマニュアルは山ほどあるけれど、その先をいくものとして、授業をお互いに見合っ研究することも大事だというお話されました。同じように子どもの心を揺さぶるような授業を考えて、先月、実際に地域で研究授業をおこなった地域があります。次回の開催地域の黒潮町でそういう取り組みをさせていただきました。黒潮から新たに参加された先生もいらっしゃるので、研究授業をやった感想や、どんな授業をやったのかをご紹介いただきたいなと思います。西本先生、ぜひ一言いただければと思います。

西本 黒潮町佐賀中学校の西本といいます。およそ一か月前、南郷小学校で4年生と6年生で研究授業をやってもらいました。6年生では「津波てんでんこ」についての授業を行ってくれました。何度も何度も先生方全員が集まって指導案を検討していることもよく伝わってきましたし、そして、南郷小学校が一つになって取り組んでいました。この「津波てんでんこ」が、本当にてんで逃げるのが目的なのかなということ、本当に逃げるだけが目的なのかなということ、その授業の中で考えさせられました。やはり「津波てんでんこ」は、命てんでんこ、それぞれの命を守りあって地域の信頼のもとに、それぞれの信頼関係のもとに、その「てんでんこ」という言葉が生まれているんだ。そのためには、子どもたちに授業をしていく中で、地域というものをもう一度振り返らせてみるのが大切なのかなと思いました。しかし、地域と触れ合うために、いま、学校が考えなければいけないのは、私も含めて地域と疎遠になっている教員がたくさんいる。その中でどのようにして地域とつながっていくのか、そして、地域全体として、どのようなつながりを持ちながら、その震災に備えていくのか、地域全体の防災教育をどう進めていくのか、ということが大きな課題として学校にはつきつけられていると思います。その中で、子どもたちは、自分のことを一人ひとりが大事にする。そして、自分たちの置かれている立場を理解しながら、自分のできることを考えていく。さらに、自分自身の命を守ることを最優先しながら、子どもたちがその津波についての学習を進めていく。こういったことができるればいい。それを小学1年生から中学3年生まで系統的に学習していくためのプランができることがいちばん望ましいなと考えさせられています。

先ほどの話を聞きながら一つ思いました。いま、本当に真剣に防災教育に向き合っているのは、子どもたちの方なのではないかと。教員はひょっとすると、「まだ来ないよ」「大丈夫だよ」という思いがあって、ひょっとすると子どもと教員の間、思いのズレというものが生じているのかなとも思います。自分の職場を考えたときでも、先生方は一生懸命やってくれているんですけど、子どもたちに伝わりにくい場面がある。あるいは、いろんな発想が出てきにくい

ところがあって、そのあたりが課題として強く思っているところです。素直に入っていく子どもはそれをリアルに受け止めるかもしれませんが、我々教員は、ひょっとするといつも現実を見ている。我々は、ひょっとすると 100 年後、何十年後の出来事と思いながら、教育を進めている場面もあるのかなっていうことを感じております。そのズレが解消されれば、自分を含めて、熱い思いになった授業が展開できるのかなと。今日の話聞きながらいろいろと考えさせられました。

片田 いまの西本先生のお話、本当にそうだなと思うんです。大人はやっぱりダメですよ。客観的に話をし、東日本大震災の事例を見せ、「ここも間もなくだと言われているんだよ」と言えば、子どもは純粹に迫りくる危険をストンとその感覚の中で考えてくれます。でも、教員も含めて我々大人は、いろいろリスク情報に慣れ過ぎている。「韓国で MARS が流行っている」だとか、「エボラ出血熱がでた」だとか、そういう情報を聞いても、“わがこと感”はゼロです。それこそよく引き合いにだしますけれど、交通事故で年間 4 千人も死んでいるけど、当事者感がないですよ。 「あれが危ない」、「食事にこんなものが混ざっていた」とか、いろいろなリスク情報を得ている中で、その中の一つに紛れ混んでしまっていて、「津波ね、危ないね」「津波が来たときには大変だ、対策しないと」となってしまう。リアリティが全然ないところにいる大人や教員と、しっかりと受け止めた子どもたち間のコミュニケーションギャップが、僕も最大の課題だと実は思っています。

僕が釜石の防災教育に、僕なりに力を注ごうという僕の中でのリアリティを形成したのには、二つ理由があります。一つは 2004 年の 12 月 26 日にあったインド洋津波です。僕は昔、アメリカのワシントン大学にいたことがあって、その関係でアメリカの調査団で被災地インドに入ったんですね。初めて津波の被災現場を見ました。それも日本のように自衛隊が入って何かしてくれるというところではない国です。インド東海岸はアウトオブカーストと言われて、カースト制度にも入れてもらえないような極貧の地域で、そのままの状態の中、僕は現場に入りました。ご遺体はそのまま、瓦礫の中に蠅が玉のようになって飛んでいる、ものすごいにおいがしてくる、泣き叫ぶ家族がいる、という状況に身をおきました。あの衝撃はリアリティをつくりあげます。でも、それでもその程度の刺激ではダメです。お医者さんがご遺体を見るのに慣れているようにそんな現場ばかり見ていると、「ここもくさいな」なんて言いながら、そんなふうになっちゃうんですね。我ながら情けない話なんですけれど。見ることに慣れてしまう。でも、どうしても慣れなかったものがあつた。それは流木を集めて茶毘に付している現場で、そのわきに小さい子どもがさらに小さい弟を抱きかかえて、茶毘に付しているお母さんを見ている光景です。いまでもトラウマのようになっています。「あれがまもなく起こる」、そう思ったときに僕の中でのリアリティというよりも、「まもなくなんだよ」と。たぶんその辺がこの津波防災にあたって、いまだに僕の心の根底にあることなんだと思います。そして、いまはそのうえでさらに釜石の被災がある。これからまた次の津波がくる、ということを考えると、正直もうやりたくないんですね。でも、こうやって先生方と、事前のちゃんとした対応ができるようになれば、僕の見てきたものが少しでも軽減できる、同じことを起こさないようにできる。いま、西本先生の言われた「どれだけこちらがリアリティを持っているのか」という部分については、そういう面ではぜひ釜石の現場に行っていたら良かった。だから第 1 回は釜石だったわけですね。これはどれだけ映像を見てもダメだし、本を読んでもダメだし、その現場に立

つかない。子どもたちは話していく中で、知識として吸収していけるけれど、大人は本当にリアリティある経験によって、初めて子どもたちと対等に語れるところに行くのではないのかなというようにも思います。

インド洋津波を見てきた直後、まだ釜石が被災する前ですけど、子どもたちがしゃあしゃあと「僕は逃げない」「だって立派な堤防もできたし、お爺ちゃんも逃げない」と言う。大人たちのリアリティのなさに子どもたちが毒され、「逃げない」と言っている。そう考えたときに、「いま、僕らが現実感をもって、子どもたちの実効性のある教育にどれだけ展開するか、がそのまま被害の多寡を大きく左右する」という確信みたいなものを持っているんです。その最大の課題が、西本先生がおっしゃったリアリティのなさということなんです。東日本大震災を対岸の火事として、単なる時間の経過の中での忘却の対象としないためにも、改めてあの現場を思い出していただきたい。そして、明日ここで起こるかもしれないという現実感を常にもち続ける。それには教える側の律するところも必要だと思うんですね。僕はもう律する必要ない。インド洋津波のあの現場をいまだに思い起こしますし、それと釜石の光景なんか重なって、僕はもう忘れません。でも、そうはいっても我々はすぐに忘却していくものです。どうやってこの意識を保ちながら、子どもたちと向かい合えるのか。子どもといえど人と人ですから、ちゃんと伝わるという確信もあります。僕らが「きみたちの命を守りたいんだ」と思っているその思いは、教え方の上手い下手ではなく、「伝わるな」という実感があります。あまりテクニカルな話は重要でもないようにも思っているんですね。「何をどう教えるか」ではなくて、「子どもたちにどう伝えるか」を議論していく中で、「子どもたちをどうしたいと思っているのか」という教員自身が変わって行かなくちゃいけない。そちらの方が大事なんじゃないかなと思います。子どもと向かい合えば子どもは変わるんですから、少なくともこの間に共感のコミュニケーションがないといけなと思うんです。「先生はみんなの命を大事だと思っているんだ。」「ちゃんと逃げる子になって欲しいんだ」って。子どもたちは割と柔軟性があるから意識は変わるんですけども、教える側がそれについていけない状況をたくさん見受けます。「そう教えることが大事だと言われているから」、「片田の授業はそうだったから、自分もやってみよう」とやってみるんですけど、実はいちばんできていないのは教える側じゃないかと感じます。ですから、ある意味、こう言う失礼なんですけれど、今日のこれも啓蒙活動だと思っています。防災教育の **How To** をみんなで議論するということが以上に、こういう議論を通じて「防災教育とはなんぞや」ということ、そしてそれ以前に「防災教育をする側はどうあらねばいけないのか」を学びとっていく場なのかなという思いがあります。

金井 佐々木先生の方からも、「同じような授業でやってみたけれど、なかなか伝わらない。やっぱり熱意の違いですかね。」との発言をいただきましたが、それに繋がるお話だったと思います。片田先生を前にして、そこまでの思いを誰も彼もがもてるかっていうとなかなか難しく、そこまでの経験なんてする機会も皆さんないですと。そうすると、いま、片田先生が最後におっしゃっていただいたように、一人で煮詰まらなくて、議論を通じて熱を保つというか、思いを共有するために、このような集合や集まりをつくっていくことも続けていくために大事なのかなと思います。そのためには、玉置先生もおっしゃったように、一つの授業を題材に授業研究したりして皆さんで集まっていく。西本先生もご紹介いただいた南郷小学校は、非常に小さい学校だったので、校長先生はじめ全職員が「この授業をうまくやるぞ」という思いで、

かなり前から準備されていた。そういう議論を通じて授業者の先生も、学校全体でもうまく熱意をもった良い授業になっていたのかなと思います。

ここまでの議論を通じて、「うちではこんなことを思っています」とか「こういうこと悩んでいます」とかありましたらご紹介していただきたいと思います。牟岐町の栗林先生お願いします。



栗林 啓次先生

栗林 徳島県の牟岐町教育委員会の栗林です。退職して3

年目です。片田先生には平成23年12月23日に来ていただきました。釜石の子どもたちが津波から生き抜いたということで、それまでの防災教育の取り組みに感動しました。私も3.11のその日にとった行動について問い直す、見つめなおす機会になりました。釜石の防災教育から学ぶということで、周辺の小学校、中学校、高校、すべての学校の取り組みが変わっていきましました。いままでは“地域を学ぶ学校教育”だったんですが、“地域とつながる防災教育”をやっていました。子どもたちを通して、学校の姿を通して、地域の人、親も変えてみたいとなり、釜石の防災教育の手引きを配布したり、それを集まった先生方で検証しようとして提案しました。津波避難訓練の際には、「牟岐小学校が避難訓練を行います、学校から700m先の高台に子どもたちが全員避難するので地域の方々も一緒に避難しましょう」と声掛けをしたりしています。そうこうしているうちに、地域のいろんな防災の関係機関である婦人会、民生委員、警察、消防署など、いろんな団体が一緒に行動しようということになりました。大事なのは全教科にまたがる防災学習じゃないかと思います。そういうことを釜石から学びつつ、行動するときには大々的に、それを年間何回も何回も行いました。障害者の方が働いている施設からも「ぜひ私たちも参加させてもらえませんか」という申し出がありました。小学校の子どもたちは、「自分の命は自分で守る」ということが基本なんですが、心に障害のある方も一緒にやっているということで、寄り添ったり、保育園の子には、声をかけたり、手をつないだり一緒に行動しています。釜石の避難行動が、それぞれ頭にあります。地域とつながる防災教育を通じて、子どもが頑張る姿、行動する姿が親に伝わって、地域の人たちを協力するかたちへ変えていきました。

平成25年4月から小学校も保育園も高台の牟岐中学校の敷地内に移転しました。いまは、保小中一体となった防災教育カリキュラムを系統的にして、避難訓練等も保小中で行っています。避難三原則は、学校はもちろん、地域にも定着しています。小学校には一人でも逃げられる子に、中学校には助ける立場に地域のリーダーになれるようにしていきます。ずいぶんと子どもたちは成長して、内発的な気持ちも育ってきているかと思います。

金井 学校の防災の取り組みから地域とつながる防災教育ということでした。お話の中で、避難訓練を通じて、身体の不自由な人を助けたい、まさに行動を通じて「自分以外の誰かを助ける」というところに思いを馳せる。授業の中での問いかけだけでなく、そういう実際の行動を通じて、そういうところの気づきを与えていくということも、一つのやり方として重要なのかなということでお話し伺いました。

このパネルディスカッションは防災教育のためのコミュニケーション力ということですが、「コミュニケーション力を何と定義するのか」も難しいんですけど、最後に「先生方、一人

ひとりの資質として、どんなことが重要になるのか」ということを、皆さんと議論し、ある程度の共通理解をもって終わりにしたいと思います。

ここまでの議論の中で重要と思われることとして、非常に安っぽい言葉の言い方になってしまうのですが、“熱意”があげられるかと思います。片田先生からも先ほどお話いただきましたし、西本先生からも話題提供いただきました。小手先の授業を



中平 巖先生

「どううまくまわすか」という話ではなくて、そもそも「どうしたら子どもたちの心を変えていくことができるのか」、そのために先生方の資質として、「何が重要なのかな」ということは言葉で非常に言い表しづらいです。この辺について言っておきたいことや、「こんなことじゃないかな」というお考え、また「私はここをうまくやったんじゃないかな」というご経験があればご発言いただきたいなと思います。

中平 黒潮町立田ノ口小学校 6年の担任しております。また、防災担当をしております。授業の中で私たちが思っているのは、知識や体験があるうえで、子どもの心をどう揺さぶっていくかということを考えています。コミュニケーションというテーマになっていますが、「家族へ返していく」ことを授業で考えています。すべての授業で子どもたちは自己決定して、その結果を家庭に持ち帰って家族防災会議をもつことで、家族へすべてのことを返していくという活動をしていくようにしています。それから、どの先生でも授業できるように、今年は全学年で授業に案をつくり、校内研修もやることにしています。そんな中で片田先生に関わってもらって黒潮町でつくった「命でんでんこ」についての授業を自分もやりました。授業案では見知らぬおじいさんが逃げ遅れることを想定するのですが、僕はこれを家族に置き換えてやってみました。最初、おじいさんに置き換えたときは、「自分のおじいさんだったらどう？」って聞いたら、子どもは、「命もあと少しだし、ちょっと助けに行かなくても・・・」というようなことを言っていたのだけれど、「じゃあ、お父さん、お母さんだったらどう？」と聞いたら、「先生に責められているような気がして辛い」と言いました。その瞬間に、“わがこと”と捉えるように心は動いていったかなと思いました。だから知識の面では、ずっと継続してやっていかないといけないし、家庭は全部介して授業はやっていかないといけないのだけれど、心を揺さぶるところでは、教材とか画像っていうのは大きいなと思いました。

また、同じ授業を南郷小学校で黒潮町の多くの先生が集まって研究授業として実施した際には、教材について意見がでて、亡くなっている人を題材にするのはどうかというものができました。それが僕は心にグサッと刺さっていて、あるとき授業をやったけれど、亡くなった人を教材として扱っていることについてはひっかかりました。ひょっとしたら、その家族の人は「これでいろんな命が助かるならいい」と言ってくれるかもしれないけれど、参加者の中でその言葉がでたことは若干心にひっかかっています。画像の有効性などを考えたらリアリティなものを使って共感を呼ぶことは非常に有効かなと考えています。

金井 「心揺さぶる発問」というキーワードもでていました、いまのお話は、黒潮でおこなった授業がどのような内容なのかについて、共通理解がないと難しいと思うので、私の方から補足します。この授業では、東日本大震災のときに釜石市役所から撮った映像を使っています。おそら

く皆さんもご覧になったことがあるかもしれません。市役所の目の前に津波がワァーッと押し寄せてきて、逃げ遅れたおじいさんが流されてしまう、という映像です。流される直前のギリギリのところ映像は編集されているのですが、授業では、津波がそのおじいちゃんに迫ってきているところで映像止めて、「きみがこのカメラを構えている人だったとしたら助けに行くかどうか」を問います。その人が「知らないおじいさんだったらどうか」「自分のおじいさんだったらどうか」「お父さんやお母さんだったらどうか」とだんだん身近な人が流された状況をイメージさせていきます。そして、最後には立場を逆に、「きみたちがあの状態になったときに、その様子を家族が見ている状態だったら助けに来て欲しいか」を考えさせます。先ほどの中平先生の場合だったら、自分のお爺ちゃんだったら「先が短いからいいかな」だけど、お父さんお母さんだったら「助けに行く」という心の葛藤を生み、結局何が正しいという答えはでないけれど、「いま出来ることはある」ことに気づき、「それを実行する」ことを促す授業です。



山本 健一先生

中平先生のご発言の中で、いくつか重要と思われる点があったかと思えます。「知識・体験をベースにしたうえで、それを踏まえたうえでやらないといけない」という話と、これは資質というよりも仕組みになるのかもしれないですけど、「授業で習ったことをなるべく家族に返していくようなやり口をしている」というのは重要なことだと思います。それからもう一つは先生方の資質になると思います。知識偏重になりがちな防災の授業の中で、如何にして「自分のことだよ」と考えさせる“心の揺さぶり”をいれるかと、“わがこと感”を高めるようなその仕組みをどう入れていくか、が重要ではないか、とご指摘いただいたのかなと思います。

山本

新宮市立王子ヶ浜小学校の山本です。平成27年6月28日に授業参観で防災の授業をしました。それまでの授業などで、「津波が来ました、どうしますか」と聞くと、子どもたちは必ず「高いところへ逃げる」と当たり前のように言うのはわかっていました。なので、“リアリティ”を持たせるということで、「家族が建物に挟まれてしまった場合、どうするか」という問いかけから、「究極の選択をしないためには、平時に何をすればいいか」というところへもっていく授業をやってみました。これは以前、片田先生が新宮市のワーキング会議でこのような授業が必要だという話をされていたものです。授業では、家族ではなくて、自分が挟まれてしまった場合を想定し、「家族が目の前で必死になって助けている」「でも津波警報が鳴っていて、もうそこまで津波がきている」「まわりはみんな逃げている」という状況で、「あなたは助けてもらうか、先に行ってと言うか」というところで考えもらいました。しかし、“知識の防災教育”が押し進められた結果の産物だと思うんですけど、全員「先に行って」って言うんです。それって、絶対に本心ではないと思って、どうにかして揺さぶりをかけようとしたんです。そして、「先生だったら絶対『助けて』って言う」と言ったころから、初めて「私も」「僕も」って子がでてきました。そこで、僕と子どもでどう思うではなくて、「この子はこういう意見を言っているけれど、こういう意見に対してあなたはどう思う？」というように、子どもからでてきた意見を他の子どもたちに振って、教室で共有していきました。すると、「あの子がこういうふう言うけど、それは違う」という子もいれば、「その子の意見を聞いて、やっぱり私も

『助けてもらいたい』って思うようになった。でも『助けて』って言ったら、目の前にいるお父さんお母さんが亡くなってしまう。」という子もいた。また、その意見を聞いた友達が「でも、お父さんお母さん助けてもらいたいけれど、僕の命も助けて欲しい」というように、いろいろな葛藤があったので、やって良かったかなと思いました。今年の12月に釜石に行かせてもらって、そこでのことを子どもたちに教えてあげたいという気持ちがすごく強かったので、授業の最後に写真も見せたんです。授業後、懇談会に残ってくれたお父さんお母さんたちが、子どもたちがボケーッと見ているのに対して『お前らこの写真がどれくらい価値があるのかわかっているのか』と後ろからすごく言いたかった、だけど授業中で邪魔するのは悪かったので、必ず家で『あの写真はこういうことなんだぞ』『そういうことを教えたいからあの先生は授業でこの写真を見せたんだ』と言ってやりたい」というようなことを言ってくれて良い授業参観だったなと思いました。

片田　いま話を伺いながら、少し私の思うところと、その境界の私の知識を少しお話ししたいと思います。尾鷲の中村先生が授業の中で、筆筒が倒れてきた事例をやっております。山本先生は自分が下敷きになったという状況想定から始めましたが、その授業では、二つの状況想定をだしています。「いまここで大きい地震があって、きみのお母さんが筆筒の下敷きになってしまった」「お母さんは津波が来るから行ってちょうだいと言っている」「そのときにきみはどうしますか」「逃げますか、それともお母さんの近くにいますか」と。最初に、その問いかけをするんですね。それはなぜかという、「自分が下敷きになる」ということには、リアリティがでてこない。それこそ“正常化の偏見”というのか、自分の命がそうやって亡くなるという状況想定を人間はなかなかしづらい。けれど、大事なもの、大事な人がそういう状況になったという状況は、すごくリアリティを感じられ、なおかつ、より深刻に事態を受け止めやすいんですね。「お母さんは『もういいから行って』と言う。でも、まもなく津波もくる。さあ、きみはどうする？」と言うと、その問いかけ直後は山本先生もおっしゃるように、まだ現実感もなく、「そんなのいやだ」と言いながら、始めは和気あいあい議論をしているんですけど、そのうちに現実感がでてくると、徐々に深刻な状況になっていくわけですね。ある子は「お母さんの近くにいる」と言います。「そんなんじゃ死んじゃうじゃない」かと「津波てんでんこじゃないのか」というような話がでてきたりして、徐々にリアリティがでてくる。そして、二つ目の状況として、今度は「きみが下敷きになったら、きみはお母さんになんて言う？」「お母さんは一生懸命筆筒をどけようとしてくれるんだけど、筆筒は動かない。このままじゃお母さんも死んじゃう。『もういいからお母さん行って』と言うか、『自分一人で死ぬのはいやだ、お母さんここにいて』と言うか」と。こうすると、やっとなんか“わがこと”として考える。防災の話をするときに、「きみの命が危ない」という話を直接もっていても、なかなかダメなんですね。一歩はずして、お母さんを・・・というかたちで入ると、割とその結果、自分のところにもってきやすいというところがあります。

もう一つは、「防災に正解がない」という点です。これまで先生方がおこなっている授業は、手元に教えないといけないこと、正解をもっています。そしてどこに導かなきゃいけないのかっていう明確な目標があって、そこに向かって淡々と教えていきます。その教え方の技術を研究授業なんかで議論するわけですね。ところが防災の授業には、「正解がない」と思うんです。子どもたちに議論させたときに「筆筒の下敷きになったお母さんをおいて、僕は逃げる」、

「そんな薄情なことにはできないから、僕はお母さんの近くにいる」と言った子に対して、どちらが正解とも言えませんよね。「お母さんの近くにいる」と言った子には心優しい良い子だと言ってやりたいし、「お母さんが『逃げろ』と言うから僕も逃げた」と言った子は命でんでんこちゃんとできる子だとやっぱり褒めてあげたいし、そこには正解も何もないんですね。そのときに、そこで子どもたちに言わないといけないのは、「先生もわからない」「どちらが正しいのかわからない」「大事なことはこんな嫌なことを考えなくて良くなることだ」「つまり筆筒の下敷きにならないこと」と。その授業は家具の固定が大事であるという授業だったんです。これまでの従来の授業であれば、「家具の固定大事だよ」「だって阪神淡路大震災ではこんなに家具の下敷きになって人が死んだもん」「だから家具の固定大事だよ」だったでしょう。そうではなくて、下敷きになったお母さんの状況、そしてそれに対してきみはどう振る舞うか、今度はきみが下敷きになった、お母さんになって言う？という現実感を植え付ける。ここでキーワードになっているのは、先ほども言っていただきましたが、“家族に返す”ってことなんです。おそらく人にとって、人間誰しもそうなんですけれど、何が大事かって、それは親であれば子どもであったり、子どもとすればお母さんであったり、夫婦であったり、恋人であったり、いろいろ大事な人っていうのがあって、本当に何もかも破壊し尽くす災害ということを議論するとき、最後一番大事なのは家族なんだろうと思うんですね。この家族の間の愛情だとかという問題はあえて意識しない、デフォルト値として当たり前になっている、再認識しない。左海さんの話を伺っていても、友稀ちゃんは当たり前のように「お父さんが迎えに来てくれる」と思っているし、お父さんは当たり前のように「迎えに行く」と思っている。そこに友稀ちゃんは父親の愛情なんか感じていなかったと思います。その環境の中で生まれているから、それがあって当然の当たり前のものになっている。でも、それができない津波の状況を想定する中で、「家族って大事だな」と“家族の絆”というものを再認識した。そのうえで、「お父さんは自分の命よりもきみの命の方が大事なんだぞ」とあらためて言って聞かせると、「だから自分の命を守ることはお父さんの命を守ることだ、お母さんの命を守ることだ」ということに気づきがある。そこで“家族に返す”ことが意味を持つてくる。自分のことよりも、家族のことで議論することによって客観性がでてくるというのか、正常性バイアスという自分のことを横においてしまう問題を回避できるということがあると思うんです。

先生方も教えるということに関しては、正解をもっていて、正解を教えようとするが無理がでてくる。正解なんかないんですよ。一緒に悩む。「先生もよくわからない」というところまでさらけ出したときに、「こんな問題を考えなくていいように、事前の対応をちゃんとしておこう」と初めて気づく。あらためて家族の関係というものを考え、「お母さんの行動はこうだ」「お父さんの行動はこうだ」と考えたときに、初めて“命でんでんこ”の意味が本当に理解できる。先生が子どもたちに迫られたアプローチの仕方も、家族との関わりというのがあったから教育効果があがったんだと思います。

あらためて防災をやり始めて思うのは、防災は、「津波に対してどう向かい合うのか」「災害に対してどう向かい合うか」の前に、家族との関わりを再認識することが必要なんだと。その日そのときに自分がとる行動は“正常化の偏見”が働いたりして動けないところ、だけど最大の行動規定要因が家族との関わりだったりすることを再認識する必要があると思います。そう

いう部分から防災教育を進めていくと、あらためて“人間教育”や“絆の教育”へどんどん広がっていく教育なんだなというのを感じます。

金井 いくつかキーワードでできたように思います。『心揺さぶるような問いかけ』、それから『家族や自分の大切な人のことを考えさせる』、家族に返すという言い方をさせていただきました。それから、何よりも先生方の熱意を高める。一人ひとりじゃ難しいかもしれないけれど、集団として、熱意を高めていくことに対して、努力は怠っちゃいけないなという感じがしました。最後、山本先生にご紹介いただきました、釜石に行っていたときの写真を紹介したお話は、子どもにまでは伝わらなかったけれど、親御さんには先生の思いが確実に伝わっていた結果なんじゃないかなと思います。

どうしても一つ聞きたかったことがあるんです。最初、左海さんに片田先生が「友稀ちゃん、絶対逃げますよね」と聞かれたら、二つ返事で「うん」と言わないで、ちょっと苦笑いしながら頷いているのが非常に気になりました。シンサイミライ学校の授業を受けて2~3年近く経ちましたが、継続という観点でぜひいまの左海家の様子をお聞きしたいです。ちゃんと備え続いていますか？

左海 先ほど申し上げましたけれど、当時小学校1年生の娘がおりまして、シンサイミライ学校の機会いただいて、本当に心配だったのはその娘のことだったんです。もちろん小学校1年生ですから、道もあまりわからないし、言っていること自体、理解しているかどうかともわかりません。そのため、一番下の娘には、シンサイミライ学校のあと、車でいろんなところに送り迎えしたりする中で、「家族で集まるのはオーシティーだ」と、近くをよく通るので、通るたびに「ここへ集まるんだ」と言ってきました。また習い事であったり、いろんなところへ遊びに出掛けたときも、「とにかく高台だったら動かない」「ここだったらあっちに逃げないとダメだ」と、常に意識して下の娘にはそういうことを言ってきました。その娘がいまはビデオの友稀と同じ4年生になっていまして、また佐々木先生に担任していただいています。当時から学校ではやっていただいているので、そこはまったく心配していませんが、やはり先ほど中平先生がおっしゃっていたように、もっと家庭にどんどん話を振っていただいてもいいのかなと思います。先生がこれだけいろんな工夫して、苦勞されて子どもたちに教えようとしているのだから、親が一番、愛する者に対して伝えないといけないと思うので、学校はそのことをどんどん家庭に振っていただいてもいいのかなと保護者としては思います。本当に先生方、ご苦勞で頭が下がる思いです。左海家といたしましても、子どもはどんどん大きくなっていくので、少し大丈夫かなという気持ちもありながら、この場で先生方のいろいろなお話を聞いて、ちょっともう一度引き締めなおさないといけないなと再認識いたしました。

金井 総じて言うならば、効果はちゃんと継続しているということがよくわかったかと思います。

以上

3. パネルディスカッション 2

(1) 話題提供 1 : 新庄中学校生徒発表『『新庄地震学』で学んだこと』

- 1.これから新庄地震学の発表を始めたいと思います。田辺市立新庄中学校の6名です。
- 2.私たちの住む田辺市は和歌山県の南の方にあり、近年、地震が起こるといわれている南海トラフから近い場所にあります。
- 3.田辺市の中でも私たちの学校がある新庄町は、田辺湾に面しており、過去に幾度となく津波被害を受けてきました。
- 4.過去の津波被害を調べてみると、1707年の宝永地震では高さ約12mの津波被害を受けた記録が残っています。また、その後も1854年の安政南海地震、1946年の昭和南海地震と約100年から150年周期で大地震と津波の被害を受けてきました。
- 5.新庄公民館に昭和南海地震のときの写真が残っています。これは津波によって浸水している新庄駅付近です。
- 6.津波が引いたあと大きな船が陸に残されています。
- 7.これは地域の神社の前の道で津波によって瓦礫が散乱し、道が通れなくなっています。
- 8.このような歴史があり過去の教訓に学ぶ、津波・地震の正しい知識を得る、今できる防災について考える、地震が起こったときの正しい行動を学ぶ、学んだ知識をまわりに広めるために平成13年に新庄地震学がスタートしました。
- 9.現在は3年生の総合的な学習の時間に各教科のグループに分かれて防災に関連したテーマを決めて学習し、毎年11月に地域の方を招いて発表しています。これまでに先輩たちが取り組んだ内容を紹介します。
- 10.15年間の間に防災に関する制作物をたくさんつくってきました。資料の左上の写真は防災マップの立体模型、右上の写真は新しい津波想定での防災マップです。左下の写真は防災横断幕です。新庄中学校は地域からよく見える場所に建っているので校舎の3階にこの横断幕を掲げ防災を啓発しました。右側は普段はベンチとして使用し、災害時はかまどとして使用できるかまどベンチです。滋賀県の彦根工業高校に教えてもらい、中庭に二つつくりました。
- 11.また防災のカルタや、紙芝居、ダンスや替え歌をつくって幼稚園や小学校との交流を続けてきました。非常時の発電方法の研究で田辺工業高校にも協力してもらいました。



過去の津波被害について

1707年 宝永地震	M8.6 津波の高さ約12m
1854年 安政南海地震	M8.4 津波の高さ約8m
1946年 昭和南海地震	M8.0 津波の高さ約4m

田辺市死者・行方不明者46名
新庄地区の死者・行方不明者26名

津波に対する油断・認識不足が生死を分ける!

- ・過去の教訓に学ぶ
- ・津波、地震の正しい知識を得る
- ・今できる防災について考える
- ・地震が起こったときの正しい行動を学ぶ
- ・学んだ知識をまわりに広める

平成13年 新庄地震学スタート

総合的な学習の時間(週1時間)
教科と関連つけた防災学習
毎年11月の地震学発表会
学んだ情報・成果は学校・地域で共有
新庄中学校の伝統
今年で15年目

これまでの新庄地震学の取り組み
幼稚園・小学校・高校との連携

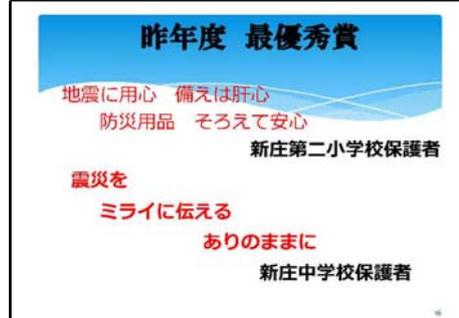
歌とダンスで防災学習 | 防災カルタ
防災紙芝居 | 工業高校と発電研究

- 12.地域の方にもたくさん協力していただきました。昭和南海地震を経験された方から、当時の様子を教えていただいたり、未来に残せるように『語り部』DVDを制作しました。左下の写真は安否札とって災害が起こったときに避難する前に玄関のドアにかけておき、あとで探しにきた人に避難先などを知らせるものです。釜石東中学校の生徒さんが考えたものを参考にして1000枚つくり、地域の敬老会でお配りしました。地震学発表の日は、地域の方に毎年かまどベンチを使って炊き出しをしていただいています。
- 13.今年の地震学のテーマは「ひろげる～人、地域、未来～」です。自分たちの学んできたことを地域の人や全国の人たちに広げていきたいと思いこのテーマになりました。
- 14.これは本年度の内容です。今年は10教科のグループにわかれて取り組んでいます。各教科の取り組みを説明します。
- 15.国語班は中学校だけでなく、保護者や小学校、高校から「防災標語」を募集し、その中の優秀な作品を地震学発表会で表彰し、広めていきます。
- 16.これは昨年度の最優秀賞の作品です。一つ目は「地震に用心 備えは肝心 防災用品 そろえて安心」、二つ目は「震災を ミライに伝える ありのままに」です。どちらも防災に関心のある作品です。
- 17.この他にも国語班は美術班と協力して日めくりカレンダーを制作しています。この写真はそこに載せる標語を選んでいるところです。
- 18.社会班の取り組みです。社会班では過去の津波被害の写真の場所を特定し、現在の写真と比べることでいま、必要な防災を考えています。
- 19.資料の写真のように過去の写真と比べています。そして、その場所がどのくらい被害を受けていたか、またその場所から避難場所までかかる時間を実際に歩いて調べています。
- 20.数学班の取り組みです。数学班は昨年度に続き、避難所目印として、また防災の意識向上のために凧を制作しています。
- 21.まだ制作途中ですが、出来上がったら小学校に出前授業に行き、一緒に凧を飛ばす予定です。
- 22.資料の左側の写真は一昨年の凧で、畳10畳の大きさでした。右側の写真の凧は去年の凧で、防災で交流した東京の高校生にデザインしてもらいました。



今年度の地震学の内容

1	国語	防災標語
2	社会	過去と現在の対比
3	数学	凧を使って情報伝達
4	理科	地震と津波のメカニズム
5	英語	英語カルタ
6	美術	新庄地震学カレンダーの制作
7	家庭	非常食・ソーラークッキング
8	技術	ホームページ制作
9	保健・体育	避難所運営
10	音楽	歌とダンスの防災教育



- 23.理科班です。理科班は防災に関連した実験を行い、地震や津波のメカニズムを学びます。また、昨年に引き続き、福島県の「ひまわり里親プロジェクト」に参加します。
- 24.ひまわりの種を植えて育てたり、地震の波が伝わる様子がわかる実験器具などを制作中です。
- 25.英語班の取り組みです。英語班は、防災英語カルタの制作をしています。
- 26.制作したカルタを持って小学校へ行き、英語を学びながら防災について小学生と交流する予定です。
- 27.美術班の取り組みです。美術班は防災カレンダーで地震や津波の危機管理対応や、各班の取り組みを紹介しています。また、今年度は日めくりカレンダーもつくりたいと考えています。
- 28.資料の写真は今までの防災カレンダーです。毎年保護者や地域の方にお配りしています。
- 29.家庭班の取り組みです。家庭班は災害時ライフラインが止まったときの非常食や太陽光を使った調理法を調べています。
- 30.新庄中学校には資料の写真の右下の災害用移動炊飯器のような防災グッズが置いてある倉庫があり、その中のものを活用できるクッキング方法を調べています。
- 31.技術班の取り組みです。今年のテーマが「ひろげる」ということから技術班は、新庄地震学を多くの人たちに知ってもらうため、伝えるためにホームページやラジオ番組の制作をしています。
- 32.ホームページへ各教科の取り組みを載せるため、他の班へ取材をしています。
- 33.保健体育班の取り組みです。保健体育班は、学校が避難所になったときの運営マニュアルなどの見直しをしています。
- 34.その他にも小学生向けの災害クロスロードゲームをつくっています。クロスロードゲームというのは、災害が起こったときにどう対応するかを YES、NO で考える京都大学の先生が考えたゲームです。出来上がったら小学校へ出前授業に行く予定です。
- 35.音楽班の取り組みです。音楽班は前年度に続き、災害用伝言ダイヤル 171 を踊ります。また、創作ダンスを用いて小学校などで出前授業を行う予定です。



36.今年の創作ダンスでは和歌山に関する曲ということで紀南 JA に許可をいただいて紀州うめみかソングで替え歌とダンスを作っています。それぞれの班が、11月の発表会に向けて夏休みにも集まって取り組んでいます。今年地震学発表会は11月22日の予定ですので、お時間がありましたらぜひお越しください。

37.4年前の2011年3月11日東日本大震災の当日、田辺市にも大津波警報が発表され新庄中学校は避難所となり、地域から200名を超える方々が避難して来られました。

38.その中で新庄地震学に取り組んでいた私たちの先輩は、避難してきた方々にお茶や椅子を出したり非常食や毛布を配布するなどの大きな働きをしました。

39.また、生徒会の自主的な呼び掛けで新庄中学校、新庄小学校、新庄第二小学校で合同募金活動を行いました。

40.そして今年は4月25日にネパールで大地震が発生し、大きな被害が出ました。

41.新庄中学校は昨年東京で行われた全国防災会議でネパールの高校生と交流をしたこともあったので、生徒会で募金活動を始めました。

42.まず、校内で2週間募金活動を行い、その後、全校に呼び掛け校区内のグルメシティで行いました。そして翌日、一緒に全国防災会議に参加した高雄中学校、東陽中学校、明洋中学校に呼び掛け4校合同でオーシェイで募金活動を行いました。募金で集まったお金は紀伊民報さんを通じて、日本赤十字社に届けていただきました。

43.昭和南海地震から今年で69年目になり、今後30年のうちに南海トラフ地震が起こる可能性が高いと言われています。新庄地震学に取り組むことで私たちは今以上に防災への意識を高めていきたいと思います。そして、先輩たちがつくってきた新庄地震学をしっかり引き継いでいきたいです。また、今年のテーマにもあるように学んだことを多くの人に広げていきたいと思います。



(2) 話題提供 2 : 新庄中学校 『新庄地震学』 について

谷本 明 (新庄中学校 教諭)

◆本校の防災教育について

1.新庄中学校で現在、防災教育を担当しております谷本です。それでは、防災教育と地域連携ということで発表させていただきます。

3.本校の防災教育は、四つの目標を考えています。まず一つ目が『地域の自然と恵みを学び、これを大切に地域のことを学習する』ことを大切にやっています。二つ目が生徒の発表でもありましたように、『教科と関連付けた防災教育』に取り組んでいます。三つ目がいざというときの実行力を高めということで、『生き抜く力、そのときに行動できるようにする』ことを大切にに取り組んでいます。四つ目が『地域との連携』です。今日のテーマにもなっていますように地域の連携を考えた取り組みを行っています。

1年生では、大きく総合的な学習の時間に地域学習をやりまして、2年生では学年劇をやりまして、3年生で防災の新庄地震学をやっています。これ以外に定期的な避難訓練や、他の学校との交流活動や、田辺市のハザードマップを用いた授業などを行っています。また、田辺市の取り組みで午前中発表がありましたように、3年間の防災学習の指導案をつくっているのです、それを実施・実行していこうと思っています。

4.防災教育は、例えば災害が起こったときの対応など、マイナスの状況に対処する力を学ぶことがメインになると思います。勉強すればするほど、自分たちの町が危険だなというふうに感じてしまいがちになってくると思います。そうならないように、防災学習をやる前に地域の自然とか恵みとか文化とか伝統をしっかりと学習してふるさとの愛着や、誇りというのを高めていくことが大切と考えています。

5.1年生では地域学習をやっています。資料は今年度取り組む地域学習の内容になっています。今年度は七つのグループで取り組んでいます。新庄地域が狭い範囲なのですが、天然記念物が三つありまして、かなり自然にも恵まれた地域になっています。そこでそれをしっかりと1年生のうちに学ぶことをグループ活動でやっています。

6.例えば「奥山の甌穴」と言いまして、天然記念物になって



谷本 明先生

防災教育の目的

- ・地域の自然や恵みを学び、時に起こる災害に対して日頃から備えることの大切さを学ぶ。
- ・教科と関連づけて地震や津波についての正しい知識を学習する。
- ・いざという時の実行力を高め、生き抜く力を育む。
- ・防災学習を通して地域との連携を深める。

1年生 地域学習

2年生 学年劇

3年生 新庄地震学

- ・定期的な避難訓練
- ・他の学校との交流活動
- ・田辺市のハザードマップを活用した授業
- ・全校学期に1回、3年間の計画的な防災授業

防災教育とは…

危険回避行動・非常時の対応

→負の状況への対処

→自分たちの住む町が**危険**

↓

地域の自然の恵み、文化や伝統を学習して、ふるさとへの愛着や誇りを高めていくことが大切

平成27年度1年生 地域学習

1	天然記念物「奥山の甌穴」
2	天然記念物「鳥の巢泥岩岩脈」
3	天然記念物「神島」と南方熊楠
4	大湯神社と祇園さん
5	新庄の漁業
6	新庄杜氏唄
7	新庄地質学



います。山の中の小さな川があるんですが、そこに大きな穴があいています。その穴は何万年かかけても小石がグルグル回ることによってできたものだそうです。僕自身も知らなくて、調べて初めて知ったような状況だったんですけど、こういったものも、生徒と一緒に公民館の方に協力してもらいながら、夏休みの間に実際に現地に行って調べて、それを発表しています。

7.資料の写真は地域にある大湊神社です。そこに行き、神主に話を聞いたり、7月には「祇園さん」というお祭りが行われているんですが、そのルーツを調べたり、実際にお祭りに参加したりしています。

8.今年度新しく始めた取り組みです。南紀熊野が日本ジオパークに認定されたので、地質学を勉強してみようということで、地域の方に来てもらって地質学を勉強しています。資料の右下の写真は学校のテニスコートの横です。その石を見るのですが、ジオパークガイドさんに、「この石は和歌山市の上の方の貴志川の方から流れ着いた石だよ」と教えてもらったり、海岸に行ったら「ここにはエビが住んでいた化石があるんだよ」と生痕化石なども教えてもらいました。私自身理科の教師ですが、知らないことがたくさんあり、すごく楽しく勉強させてもらっています。

9.大湊神社にのぼるまで階段です。その階段の下部分と上の部分に石碑が建っています。この石碑は、階段の下の方が「安政の津波の碑」、階段の上の方は「宝永の津波の碑」で、地震のときの津波がここまで来た痕跡を示しています。実際、石碑の裏を見ても、ここまで波が来ましたという線が引いてあります。このように地域学習が防災につながって勉強できています。この神社は高いところにあるので、階段の上の方までのぼってみると地域の家がよく見えます。屋根よりも高い場所にありますので、実際は津波がここまで来たことが実感できます。

10.学校の裏にも石碑があります。写真は地質学の学習のときに撮影したのですが、石碑を見ても「宝永の津波の潮位 12m 79cm」と記されています。この場所は山になっている坂道なのですが、宝永の地震があったときに、両側から津波が来て真ん中で津波同士がぶつかり合って大きな音がしたということで「どんの坂」と呼ばれているそうです。地質学を勉強するときにこういったことを勉強したりしています。



11.学校の裏にお寺があり、そこには写真のような碑が建っています。この石碑は、下に昭和南海地震で被害に遭った方の名前があり、その慰霊碑です。登校時にお寺を抜けてくるルートを通る生徒もたくさんいます。普段は何気なく通っているのですが、気づいていないことが多いです。このように地質学を勉強しながら防災のことも勉強しています。1年生では地域のことをしっかり勉強しまして、2年生では学年劇に取り組んでいます。

12.平成 25 年度は「稲むらの火」といしまして、和歌山県の濱口梧陵さんの物語を取り組みました。去年は串本の「エルトゥールル号」に取り組み、ここ何年かはその地域を題材にした物語をやっています。

13.一昨年の「稲むらの火」の劇をやったときに NHK 和歌山にて放送していただきました。

14.今年度ですが、新庄の物語を何か作れないかということで、いま実際に制作中です。2年生が6月に神戸の「人と防災未来センター」へ行き、いろいろなことを調べてきて、それをもとに新庄の物語を制作中です。脚本を書いたり、今から動き始めようとしています。

15.また、地震学発表会の午前中が文化祭になっており、午前中に演劇を予定しています。3年生では防災学習を行うというこういう大きな流れでやっています。

16.防災教育というのは、ふるさと学習の一環だと捉えてやっています。地域には自然や恵みもたくさんある。ときには災害も起こるといふことで怖がるのではなくて、備えることが大切だといふふうに考えて防災教育に取り組んでいます。

◆ 防災教育を継続するために

18.一つ目ですが、『毎週1時間カリキュラムに組み込まれている』ことです。3年生になりますと、週1時間の総合的な学習で地震学をやると決めています。初めてきた先生でもやらざるを得ない、やるように組み込まれています。

19.二つ目ですが、『学年をこえた運営組織』です。新庄中学校では、5年前に国の研究指定を受け、公民館と地域と学校が連携した共育コミュニティを組織し、その中に、“学び合いの里”“ふれ合いの里”“防災の里”の三つの部会をつくりました。そして、各学年の先生がそれぞれの部会に一人ずつ所属しています。防災担当も私一人ではなく、各

2年生 学年劇



H 2 5 年度
「稲むらの火」



H 2 6 年度
「エルトゥールル号」

12

3年生 新庄地震学



15

防災教育

→ **ふるさと学習の一環**

- ・ 自然や恵みが多い
- ・ 時には災害も起こる

怖がるのではなく、**備えること** (=防災教育) が大切

16

① 毎週1時間カリキュラムに組み込まれている

(3年生の総合的な学習の時間)

18

② 学年をこえた運営組織

中学校と公民館が連携して子どもを育てる取り組み
「新庄地域共育コミュニティ」
3つの里づくり



各学年から1名、それぞれの部会に所属

19

学年に一人ずつ防災担当者をおり、部会を開いて取り組みを進めています。このようにすることで、誰かが転任しても続いていく体制をとっています。

20.三つ目は、『教科と関連した防災学習』です。生徒の発表にもありましたように、9教科と関連付けた防災学習を行っています。

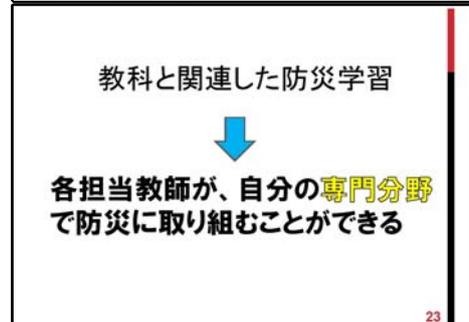
21.例えば英語班ですと、英語の防災カルタをつくったり、英語の劇をつくったりしています。右下の写真は去年の取り組みで、青いこいのぼりプロジェクトというものです。後付け感もありますが、震災で家族を亡くした大学生が始めたこいのぼりを募集しているという取り組みがありまして、ぜひそれに参加しようということでした。英語と防災の組み合わせはなかなか難しい部分もあります。そこで「英語で鱗にメッセージを書いて、そしてそれを自分たちでつくって送ったらどうか」、さらに「それを小学生に教えたらどうか」といろいろアイデアをだし、『小学校に出前授業に行って、英語を教えながらメッセージを書いて、こいのぼりをつくる』という取り組みを考えました。これも英語の先生が担当していましたので、実際には自分の専門分野で取り組んだこととなります。

22.理科班の取り組みです。私は理科の教師ということで、ひまわりの栽培や、緊急地震速報の仕組み、中学1年生で地震のことを勉強しますので、P波とかS波とか、そういったことも勉強して、それが緊急地震速報につながっているんだよという話もします。また、写真の左下は液状化の実験です。津波の実験や、理科の実験をして、理科と防災を絡めたことをやっています。

23.教科と関連した防災学習をすることによって、各担当の教師が自分の専門分野で防災に取り組むことができることも、継続のための一つの要因だと思います。

24.四つ目が『楽しんで取り組める防災学習』です。防災を楽しいというと、ちょっと違和感がある方もいらっしゃるかもしれませんが、私が前任の防災担当から引き継ぎのときに強く言われたことで、「防災も何か取り組みを楽しんでやらないと続かない」ということを強く言われました。

25.例えば凧をつくったり、横断幕をつくったり、かまどベンチや防災マップなど、“何かものづくりをする”ことは楽しみながら生徒は取り組みます。



26.カルタや紙芝居、キャラクター作成、歌とダンスといった創作物、“何か考えながらつくる”ということも生徒は楽しみながらやっています。

27.炊き出しや空き缶で炊飯、ソーラークッキングなど、“食べる”ということも生徒は楽しんで喜んでやります。避難所体験ということもやっています。夏休みの間に1泊、体育館に寝泊まりします。もちろん避難所体験なので、楽しんでやるということはおかしいかもしれませんが、学校で寝るといことは、生徒はちょっと楽しみにしてしまいます。こういった取り組みをやってきました。

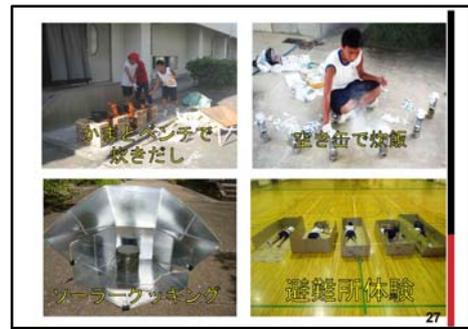
28.防災というのは、怖い、悲しいとかいうイメージが強いですが、ものをつくる楽しさや共同作業する楽しさ、人に何かを伝える楽しさという取り組みをすることによって、生徒たちが自発的に行動していきます。地震学はテーマを決めますが、決まったら生徒主体でどンドン動いていきます。こういうことも生徒自身が考えながら、何か楽しみながら作業するという要素があるんじゃないかなと思っています。

29.五つ目が『誰かの役に立っていると感じる防災教育』です。

30.幼稚園や小学校に出前授業に行っています。何か教えるということは、中学生が授業を自分が受けるのではなく、自分が何かを教えるというときに、その作業を通してすごく変わり、成長することが多いです。小学校に行くと、ほぼ生徒主体でやってもらうのですが、学校では見られない表情や、あまり喋らない子が小学生の前に行ったら一生懸命がんばってやっている姿が見えたりします。幼稚園では、一生懸命ハサミをつかって何かを切ってあげたりとか、そういった作業を見ていると、何か教えられただけじゃなく、自分が教えるという体験を通して、自分が役に立っているんじゃないかなと感じているのではないかなと思います。

31.地域の方に安否札を配布したり、防災頭巾をつくってプレゼントしたり、募金活動など、誰かの役に立っているというような活動を行っています。

32.こういった活動を通して、誰かの役に立っているということが、自分が必要とされているということにつながって、それが自尊感情や自己肯定感の向上など「自分自身の何か役に立っているな」という感情につながっているように思います。



防災→怖い、悲しい

- ・ものを作る楽しさ
- ・共同作業する楽しさ
- ・人に伝える楽しさ



生徒の**自発的な行動**

28



- ・小学生と交流
- ・地域への貢献や募金活動



誰かの役に立っている
自分が必要とされている



自尊感情・自己肯定感の向上

32

33.六つ目は『地域と連携した防災学習』です。今日のテーマにもなっていると思います。地域の方にもたくさん助けをいただいています。

34.過去の災害の伝承ということで、地域の方をお招きして、過去の災害を聞いたり、DVDを制作して後世に伝えていくということも行いました。かまどベンチで毎年炊きだしも行ってもらっています。

35.地震学発表会の日に、地域の方と合同避難訓練を実施しています。地域の方に呼びかけて中学校に避難してきてもらいます。今年は、昨年度いろいろな賞をもらったので、公民館で報告会を開きました。

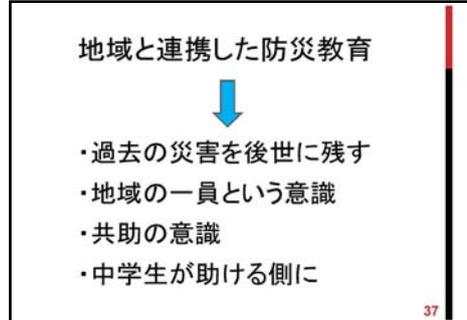
36.地域の方を招いて、防災の講演会も行ったりしました。防潮林の植樹も地域の方と協力して行いました。

37.こういった地域と連携した防災教育を行うことで、過去の災害を後世に残すということはもちろん大事だと思いますが、それ以外に地域の一員という意識、生徒自身、自分が地域の一員であるという意識が高くなったり、共助の意識、まとまり助け合う意識、中学生が助ける側という意識が育ちました。先日、新聞の取材があったのですが、その取材の中で、「助けるとき何が大事ですか」という質問に、普段はそんなこと言わなそうな生徒が「地域の人に声をかけてそこから逃げていくことが大事」ということを言っていました。取り組みを続けてきた成果を感じました。

38.七つ目は『自分たちの取組を発信、交流する場をつくる』ことです。いろいろな交流の場をつくっています。

39. 2年前、田辺市津波防災シンポジウムが開かれまして、そこで発表する機会をいただきました。

40.資料の写真はシンサイミライ学校交流会の様子です。宮城県の石巻西高校が主催で、2泊3日で活動しました。私も初めて東北に行っただけですけど、高校生がたくさんいて、その中にいらしてもらいました。石巻西高校は、実際に避難所になった学校です。この取り組み自体も避難所と同じ生活をしてもらうことでスタートしました。生徒たちは行った初日にお昼ごはんを配ってもらったのですが、食べるのを待っていました。そしたら、当時の校長先生が「お前ら何してるんだ」「避難所で待っている時間なんてないぞ」と普段の生活との違いや現実を教えてもらいました。そういったことを通して生徒たちが変わってきます。その2泊3日は、ほとんど教師はノータッチで、自分たちだけ



で行動するんですが、高校生の姿を見たりして、一日目と三日目では全然生徒の行動が違ってきていました。

41.全国防災会議にも参加させていただきました。これも全国からたくさん中学生や高校生が集まったんですけど、その中でいろいろな取り組みがあり、各グループに分かれてグループから自分のところへ帰ったら必ずこれだけはやろうというアクションプランの文書をつくるという作業がメインでした。

42.実際にそれを生徒たちだけでつくっていきます。最終日の会議ではまとめる作業にもいれてもらい、深夜の1時からいまで会議をしてつくりあげました。こういう活動を通して、すごくしんどかったとは言っていますが、帰ってきてから、「もう一度やりたい」「こういう活動もっと他になにか」ということも言っています、成長してくれていると感じました。

43.後日、文科省へ提出に行って来ました。

44.兵庫県の舞子高校に呼んでもらい、パネルディスカッションとか発表をさせていただきました。

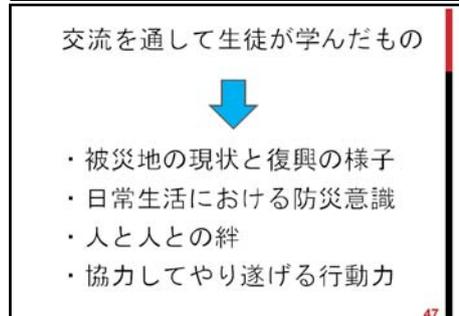
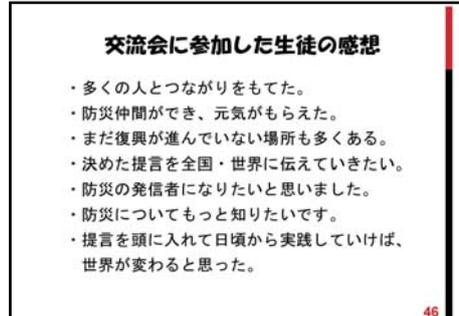
45.12月には淡路島でジュニアリーダー育成合宿というものがあり、3年生が参加させていただきました。

46.交流会に参加した生徒の感想です。多くの人とつながりがもてた、元気がもえた、まだ復興が進んでない場所もあるなど被災地のことがわかったり、提言を全国・世界に伝えていきたい、発信者になりたい、防災をもっと知りたい、世界が変わるといような感想を書いています。

47.交流会に参加した生徒だけではなく、参加してからその後学校へ帰ってきて、全校集会を開いて学校でその都度発表しています。それで、参加していない生徒を含め、後輩たちもそういう意識が芽生えてきていると思います。交流を通して生徒が学んだものとして、被災地の現状や復興の様子、日常生活における防災の意識、人と人との絆とか、協力してやり遂げる行動力など多くのことを学んでいます。

48.八つ目は『他者から評価される機会を得る』ことです。自分たちの活動を他の人から評価してもらい機会をもつことも、生徒たちが次の段階につながっていくと思います。

49.去年はぼうさい甲子園で、グランプリをもらいました。そこでまた神戸に行きいろんな学校と交流する場面をいただきました。



50.また、レジリエンス・アワードでもグランプリをいただきました。仙台へ急遽行くことになったんですが、そこでもたくさんの方に声をかけてもらいました。サッカーのなでしこジャパンの佐々木監督に声をかけてもらったりしてとても貴重な体験をさせてもらいました。

51.これ以外にいろんな新聞にとりあげてもらったり、ラジオに出させてもらったり、テレビに出させてもらったりしました。こういったことも、ラジオをお昼休みに流したり、新聞を大きく掲示したりすることによって、他の生徒たちや下級生も意識があがってくる効果もでてきています。来年度から公民の教科書にも載せてもらうということが、決まったそうです。

52.他の方から評価してもらったということでは、昨年度は「新聞を見た」というお便りを何通かいただきました。例えば、新聞に載っていたということで東京とつくば市にいる卒業生の方からいただきました。第4期というかなり高齢の方からお手紙をいただき、「東京に住んでいて新庄という文字を見てビックリした」ということでした。お二人とも昭和南海を経験されたという方で、「当時の昭和南海地震のことをすごく鮮明に思い出しました」というお手紙をいただきました。「遠く離れて帰っていないけれど、そういう記事を見つけてすごく感激しました」というお手紙でした。こういったお手紙も生徒に紹介して、「こんなお手紙が届いたよ」「きみたちの活動がいろんなところに広がっているよ」という話もしています。

53.いろんな人から評価していただくことで、自分たちの活動の振り返りになっているのではないかと思います。それが達成感や自己肯定感の向上につながっているのではないかと思います。そして下級生の意識の向上や、「先輩たちがあんなに頑張っているのだから、自分たちももっと頑張ろう」「受け継いでいこう」という気持ちになっていっていると思います。

54.防災教育を継続していくために、こういうことが大事なのではないかと自分なりにまとめてみました。



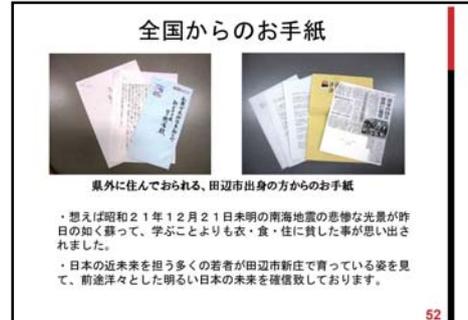
宮城県仙台市 平成27年5月14～15日

50



公民の教科書

51



風外に住んでおられる、田辺市出身の方からのお手紙

- ・ 想えば昭和21年12月21日未明の南海地震の悲惨な光景が昨日の如く蘇って、学ぶことよりも衣・食・住に費した事が思い出されました。
- ・ 日本の近未来を担う多くの若者が田辺市新庄で育っている姿を見て、前途洋々とした明るい日本の未来を確信致しております。

52

他者から評価をしてもらうことで

- ・ 自分たちの活動の振り返り
- ・ 達成感、自己肯定感の向上
- ・ 下級生の意識向上、次年度への動機付け

53

防災教育を継続していくために

- ・ カリキュラムに防災教育
- ・ 組織づくり（複数の防災担当）
- ・ 生徒が楽しめる内容
- ・ 地域との連携（協力を求める）
- ・ 生徒が発信・交流できる場をつくる
- ・ 活動を他者に評価される機会

54

◆防災教育のめざしていくところ

56.防災教育というのは、“行動スキルを高める”という実際に津波が来たときにどう逃げるなどのスキル・技術を高める部分と、意識を高める部分の大きく二つに分かれると思います。どちらかといえば、新庄地震学は、防災の意識を高める部分が多いと思います。小学生に教えたり、凧をつくったりなど、防災を頑張っていこうという取り組みがメインになってきます。実際に地震が来たら、津波が来たら、本当に逃げ切れるのかという心配もあります。今後実践的な行動スキルを高めるような防災教育ももっとやっていかないといけないと考えています。

57.その一つがハザードマップを使った授業です。田辺市では、クリックするだけである場所から最寄りの避難場所までの避難経路がサッとでてくるシステムがインターネット上で公開されています。これを使って「田辺市内のどこかに遊びに行ったときに地震が起きたら」という想定で授業をしてみました。学校以外の場所へ行ったらどこへ避難するかを確認し、登下校中の避難訓練を行いました。その際、新庄中学校は避難場所になっているのですが、あえて中学校以外の場所で考えてさせました。また自宅が高台にある場合は、自宅が倒壊してしまった場合として、別の避難場所を考えさせました。新庄地域の中には避難場所はたくさんあるのですが、教員も全部まわったことはもちろんなく、ほとんど知らず、実際にこういう活動をしてみて、初めてその避難場所へ行き方がわかったこともたくさんありました。

58.今後、おこなっていききたいことですが、これまでの活動の継続は大事だと思います。また今言ったように、スキルを高める教育、田辺市でつくっている防災授業案もおこなっていききたいです。それから、教職員の災害時の行動の確認も、教職員の申し合わせがまだ足りていないと思うので、やっていきたいと思います。“命と向き合う防災学習”と書きましたが、これについては先ほどの石巻西高校の校長先生からお言葉をいただきました。「新庄中学校は確かに防災教育をやっているけれど、実際にそこまで踏み込んでやっているのか、次の段階として命と向き合う防災学習が必要だな」と言われました。確かに防災は大事だと言っていますが、生徒たちも実際どこまでわかっているか、自分のこととして、どれだけ考えているかというのがまだまだ

防災教育

<p style="text-align: center;">行動スキルを高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・的確な判断力 ・災害についての知識 ・行動技術や運動能力 ・訓練での経験 ・相互救助 	<p style="text-align: center;">防災意識を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・危険の認知 ・人と人のつながり ・コミュニケーション力 ・他者へのいたわり
---	--

自己啓発の高揚とスキルの上向
学校における防災教育は集団での学習で身につける。

56

「田辺市ハザードマップWEB版」を用いた避難訓練シミュレーション授業



登下校中の避難訓練（学校以外に避難）



57

今後おこなっていききたいこと

- ・これまでの活動の継続
- ・行動スキルを高める防災学習
- ・3年間での、生徒の意識の変化
- ・教職員の災害時の行動の確認
- ・命と向き合う防災学習

58

新庄地震学の感想

- ・避難場所や地震が起きたときどうするかなどを家族で話そうと思いました。
- ・完成したときの達成感や協力し合うことの大切さを学ぶことが出来ました。
- ・カレンダーを通してつながりの輪がどんどん広がることを願っています。
- ・防災への感心が高まり、地域の人々とのつながりを深めることができました。
- ・お互いに得意な分野で助け合えば何かできることがあること、お金をかけなくても工夫すれば、すばらしいものが出来ると思いました。

59

防災教育を通して…

災害時の力だけでなく

- ・正しく判断する力
- ・主体的に行動する力
- ・コミュニケーションをとり協力する力

などたくさん力を身につけることができる

60

足りていないと思います。そこが一番大事だと思いますので、そこをもうちょっとやっていきたいな
と思っています。

59.新庄地震学の生徒の感想です。「家族と話そうと思いました」「達成感や協力し合うことの大切さを学
びました」「つながりの輪が広がることを感じた」「助け合えば何とかなる」などそういった感想を書
いてくれています。

60.防災教育を通して、災害時に生き抜くということは大事だと思いますが、それ以外の普段の生活にお
いて、“正しく判断する力”や“主体的に行動する力”、“コミュニケーションをとり協力する力”も
ついてきているんじゃないかと感じています。

61.新庄地震学は今年で15年になります。最初に学習した生徒が中学校3年生で15歳でしたので、今
年で30歳になります。どんどん成長して、やがて子どもが産まれている生徒もいると思います。続
けていくことによって、どんどん地域自体が防災に強い町になっていっていると思います。新庄をも
し離れても、これからも続けていくことで、やがて全員が防災学習を学んだ町になってくれたらいい
なという思いで、これからも続けていきたいと思っています。

(3) 討論「『新庄地震学』にみる地域と連携した防災教育とその継続」

パネリスト 川口 幸三 (新庄公民館 館長)
谷本 明 (新庄中学校 教諭)
榎谷 節生 (衣笠中学校 教諭)
小川 正 (石川県輪島中学校 校長)
金井 昌信 (群馬大学)
コーディネーター 川東 英治 (群馬大学 協力研究員)

以下略



川東 新庄中学校の生徒の皆さんから、新庄地震学でこれまでどんなことをやってきて、これからどんなことをするのかという話をいただきました。そのあと谷本先生から、地域の連携した防災教育とその継続という観点で、新庄地震学の内容を具体的に、また先生側からどのような視点でおこなってきたのかということも含めて話していただきました。話を聞いて皆さんお気づきかと思いますが、15年するとこれだけいろいろなことをやってきているのかと感じたかと思います。それだけの積み上げがあつて、今日に至っているということです。谷本先生の話にありましたように、新庄地震学は15年目になり、一期生は地域を担う存在になってきているという継続の力というものも感じられたのではないかと思います。「『新庄地震学』にみる地域と連携した防災教育とその継続」とありますが、この中にいくつかテーマがあります。一つは15年間継続してきたという効果、継続するためにはどうしたら良いかという仕組みづくりという視点です。もう一つは地域と連携するきっかけや、学校と地域の双方が連携するメリットなどを含め、地域と連携するにはどうしたら良いかという視点です。さらに、連携をしていくことにより、防災教育が防災教育の本質的な効果をこえて、教育そのものに迫る本質的な効果があるのではないかとこのことを中心に討論を進めていきたいと思います。

川口 田辺市新庄公民館の川口と申します。私は公民館長になって5年目を迎えます。ちょうど新庄地震学の転機をむかえたときなのでしょうか。5年前に田辺市共育コミュニティ運動というのがあり、国・県・市の指定を受けました。その一つに新庄中学校と新庄公民館がタイアップして地域づくりをする、地域で寄ってたかって子どもを見守る運動が始まりました。そのあたりから学校と地域が相当うまくいきましたと伺っています。新庄のことを申し上げますと、新庄地区はおよそ人口6千人、一つの幼稚園、一つの保育所、二つの小学校、一つの中学校という

地域です。九つの町内会からなっており、相当広い地域です。中学校の校区と公民館の館区がまったく同じ地域でもあります。

谷本 先ほど発表させていただきましたが、防災担当になってまだ3年目です。私自身、新庄中学校に異動してくる前は京都市の学校に赴任していて、5年前に戻ってきました。京都では防災教育という言葉すら聞いたことがなく、震災があった4月に新庄中学校に着任したのですが、「新庄中学校は防災教育をやっている」ということで、何もわからないまま榎谷先生に教えてもらいながらやっていました。そして2年前にいきなり担当となりました。まだ新米なので私自身わかっていないことも多いと思います。今回、いろいろな学校の先生が集まっておりますので、いろいろな取り組みを勉強させていただきたいと思っています。

榎谷 衣笠中学校の榎谷です。3年目になります。前任校の新庄中学校には11年間おりました。先ほどから新庄中学校の生徒だったり、谷本先生が発表してくれて、良い話ばかりだったので、失敗談も話したいと思います。三つほどさせていただきます。11年も経つと、いろんな成功事例もあれば失敗事例もあります。一つは水道水が止まったら水が飲めないということで、ある理科の先生が10のペットボトルを裏返して、この中に石や小石や砂、木の葉っぱや根っこをたくさん詰め込んで、これを飲めるかどうか実験をしました。近くを流れている川の油が浮いたような水を入れて生徒に飲ませました。生徒は口を近づけて「飲めない」と言うので、先生が「なんでだ」と聞くと「油の匂いがする」ということで失敗しました。もう一つはあるグループが避難場所まで走ったら何分で着けるかということをやりました。ただ、背中にリュックを背負い、中に20のペットボトルに水を入れたものを10本ほど入れまして走りました。5分したらリュックの底が抜けました。もう一つは先ほど紹介していた宿泊体験のことです。参加者のほとんどは男子なのですが、ある学年で3名の女子がやりたいと手を挙げました。また体育館ではなく、テントを張って、自分たちで飯盒炊飯したいとのことでした。その年は教師3人ほど、横で女性の先生2人にも来てもらい、一緒にやってもらった記憶があります。男子ですと一人の先生と一緒に横に寝ていれば安心なんですけれど、女子でしたので気をつけました。そういったいろいろなことを繰り返しながら、やってきています。いまは新しい学校に変わりましたが、防災を広めていきたいと考えております。

小川 石川県の能登半島の輪島からまいりました。東日本大震災の年の4月に、校長として小木中学校に赴任しました。その当時の小木中学校は石川県内の3本の指に入る生徒指導困難校と言わ



川口 幸三さん



榎谷 節生先生



小川 正先生

れていました。現在赴任した学校は、輪島市内の学校ですが、3校再編しまして新しく輪島中学校となりました。ここもかつて3本の指の一つに入る生徒指導困難校です。そういった中で、小木中学校に赴任したときに、学校の高台から見渡したら、湾の中に集落がある、東北のリアス式の海岸とまったく同じような風景が広がっている。そこで、防災についての取り組みをやらうと思った矢先に、片田先生が番組で釜石のときの様子を話されました。講演会でいろいろ話を聞く中で、「これはひょっとして」という何かピンときたものがありました。それから片田先生を追いかけながら、本校でも取り組んでいきたいなという流れで始めました。すでに異動してしまっていますが、昨年、小木中学校はぼうさい甲子園で奨励賞をもらいました。グランプリが新庄中学校です。先ほどの発表を聞いて、「なるほど、新庄中学校がグランプリをとる理由がここにあるのか」と思いました。やっていた内容はまったく知らなかったのですが、小木中学校が取り組んできたことと、ダブるところがほとんどです。それをバージョンアップしたものが、新庄中学校です。さすが15年の伝統校です。小木中学校が取り組んできたのは3年～5年です。新庄中学校と小木中学校・能登中学校と交流させていただきたいなという気持ちを持ちながら、勉強させていただきたいと思います。

川東 それでは討論に入っていきたいと思います。まずは、多くの皆さんが「15年もよく続いたな」と感じられたかと思います。最初に榊谷先生にそのあたりを率直に伺いたいと思います。15年も新庄地震学を継続することができた理由は何なのか。また、続けようという意識で何か続けるために注意した点等ありましたらお話しください。

榊谷 私が新庄中学校に赴任したときは、地震学は第二期目でした。第一期目というのは、実は総合学習の試行があり、新庄中学校がその試行を受けまして、地域の課題は何かないかということになりました。当時、元市会議員で新庄公民館館長だった柏木さんが小学校で津波の語り部をしていました。そういったことで、地域の課題として津波災害を取り上げ、総合学習では津波の災害について学ぶこととなりました。私はその学習の2年目に赴任したときには、選択教科の一つとして週に1時間のカリキュラムに取り入れられていたのが始まりです。正直、それまでは防災の“ぼ”の字も知りませんでした。他の学校で生徒指導を5年ほどやっていましたが、正直こんなにしないといけないのかと思いました。主に3年生がやるので、2年間見させてもらって3年生になったら、がんばってやろうということでした。今は、あんなに立派ですが、最初の1年目2年目は、率直に言いますと、悪く言えば学習発表会みたいな感じでした。自分たちで地震や津波について調べたことを発表するという感じでやっていたかと思います。

たまたま大きな転機があったのが、私が1.2.3年生と受けもった学年が3年生になるときに、当時の市長さんから「防災教育チャレンジプランという取り組みの第一回で募集しているので、田辺市でこういう学校はないのか」という問い合わせがあると、教育委員会から学校へ連絡がありました。ちょうど発表の時期が3年生の入試の時期にかぶるときだったので、一度はできませんと断りました。しかし、再度依頼がきまして受けることになりました。いま、9教科ありますけれども、当時は8教科でした。音楽はありませんでした。「音楽と防災、何が関係あるの？」という考えもありまして、8教科でやっていました。その後いろいろ先生方と話していく中で、「なぜ音楽をいれないのか」という注文がつかまして、音楽を取り入れました。最初は歌を歌ったり、癒しの効果で、という意味でということでした。こうして9教科やりまし

て、その結果、防災教育チャレンジプランで大賞をいただきました。新庄地震学が外部の機関ではじめて賞をもらいました。

それから大きく流れが変わりました。やっぱり外へ出て行かないとダメだということです。もちろん小学校や幼稚園に出て行こう、情報を発信しようということもやりました。毎年3年生で卒業しますので、次の3年生では何をするのか、同じことをしては、子どもたちは飽きてしまいますので、新しいネタを求めていきました。私はそれから年1回か2回東京へ行き、いろいろな会で名刺交換もして、ネタをもらってきたりしていました。例えば、かまどベンチは滋賀県の彦根工業高校の作品です。先ほどの171ダンスも東京のNPOの団体の作品です。自分が3年生の受けもちを外れたら、違う学年に「こんなネタがありますよ」「このなつくってくださいよ」とやってきました。いろんな外の機関に出て行って情報を調べるということも大事なかなというふうに思いました。

そしていちばん思ったのは、子どもたちが楽しく取り組まないと続かない。どうしても、津波の映像を見せて怖いというような授業だともちませんから、子どもたちが主体的に取り組んで楽しくできること、逆にいえば、教師も楽しんでできます。そして、先ほどもありましたけれど、地震学には指導案はありません。一切ありません。年間計画は作りますけれど、指導案はなくて、グループの子どもたちと担当の先生との相談でやることを決めていきます。もちろん、大きな方向はありますけれど、そういうかたちで子どもたちが主体的になって楽しんでやるというのが特徴だと思います。そういったかたちで11年間私が関わってきました。

川東 いまのお話の中で、きっかけとしては防災教育チャレンジプランで賞をとったということで、その中で教科数も8~9教科のほぼすべての教科で担当するということでした。さらに継続していくには、生徒の興味を持たせるという部分で新しいネタづくりをしたり、生徒も教師も楽しく防災教育をやっていくという視点が継続に大きく関わってくるのではないかという話をいただきました。

谷本先生にお伺いしたいのですが、榊谷先生が11年ほどされていた活動を引き継ぐことになって、現在感じているメリットや課題等ありましたらお話しください。

谷本 メリットは、土台をしっかりつくってくれていたことです。11年間続けてきていましたので、そのときの下級生もどういうことをやるか知っていましたし、1年間通して、どういう流れですすめていくのかを榊谷先生がつくってくれていました。例えば地震学の中でも、毎年同じテーマというものもあります。カレンダーづくりや歌、171の災害用伝言ダイヤルのダンスにプラスして自分たちで替え歌をつくるという取り組みは毎年やっています。防災標語やカルタ、小学校幼稚園への出前授業も毎年取り組んでいるテーマになっています。ある程度内容がかたまっているテーマがありましたので、そういった部分では引き継ぎに混乱はなかったように思います。宮城県に行ったり、東京へ行ったりして交流させてもらう機会も榊谷先生が人脈をつくってくれて、土台をつくってくれていたから自分たちも呼んでもらえました。引き継ぐときには、榊谷先生に東京へ一緒に連れて行ってもらいまして紹介してもらい、そこから私に引き継がせてもらいました。そういった意味で、本当に榊谷先生が大きな物腰でいてくれたのが大きいんじゃないかなと思います。

難しかった面は、これもたくさんありますが、一つは榊谷先生自身が結構一人でやっていた部分が大きくありましたので、抜けられると他の人が誰もわかっていないことが多かったです。

防災担当を一人でやっていくと、他の先生が代わったときにつながりがなくなってしまうことも多いと思います。そのことから防災担当を各学年から一人ずつだすことも始めました。あとは、生徒たち自身が慣れてしまって「自分たちはグランプリもらったんだ」とまではなっていないと思いますが、「防災ってこんな感じだろう」という様子で、パネルディスカッション 1 での議論にあったように、「本当にそこまで考えられているのか」、「命と向き合っているのか」というのは課題です。私自身もそうなんですけれど、「ダンス踊っておけばいいのでは」というように、「もうこれでいいのではないか」という意識がどこかにあるんじゃないかなと思います。ですので、私を含め自分たちは実際に体験していないので、本当に震災の怖さもわかっていないので、慣れてしまうという怖さがあると思います。

金井 谷本先生のおっしゃっていたように、担当者に一人強力な方がいると、確かにその方がいる期間は進むとよく聞きます。しかし、何年か経って、「あの学校どうなったかな」と思うと、「担当者が異動してしまって、何も知りません」ということはたくさんある事例です。新庄中学校がそうならず続いたのは、梶谷先生が 11 年も居続けられたことが、大きかったと思います。そう考えると、田辺市教育委員会よくやったのかなという気もします。それはさておき、新庄中学校のお話を聞いていて、長く続いた理由を客観的に考えてみると、かなりきっちりとした仕組みが出来上がっていることがありますよね。「1 年生でこれやって、2 年生でこれやって、最後 3 年生には、教科に全部割り振って週に 1 回必ずやる」というかなりしっかりした仕組みが出来上がっているのは続けるうえで一番重要なんだなと思いました。ただ、きっちりした仕組みをつくと、先生方すごくまじめなので次に求めるのは、きっちりした効果や成果を求めたくなるんですよね。そうすると、「去年ここまでのことをやれたんだから、今年はもっと良いことやろう」「もっと良いことできたんだから、もっともっと良いことやろう」と。実施される先生方がどんどんハードルを勝手に高くして行って、そのうち苦しくなって、厳しくなって、アップアップになってしまうという悪循環に入ってしまう。そこを新庄中学校は、良い意味ですごく割り切っているなという感じがしました。それは、狭い意味での防災教育としての効果を重視していないという言い方をしてもいいのかもしれない。“防災に携わる活動を通じて、人間力を高める”といいますが、知識が広がるだけではなく、“そういう活動を通じて人のために役に立つ”など、そういう防災とは別のところでの効果にも目を広げて考えると大きな成果をあげられている。“防災上”という狭い範囲だけで効果を追求して、先生方があれやこれやと手をいれなくて、生徒が主体的にやりたいことを自由にテーマを決める部分を残しているというのは、ある意味割り切りがいいと思います。それがマンネリせず、続けられていることにもつながっていたのかなって聞いていて思いました。

川東 まさにおっしゃっていただいたとおり、新庄中学校では梶谷先生が仕組みという部分でかなりのことをされてこられたこと、これがやはり継続の一つの重要なポイントになっているのかなと思います。さらにそのうえで、改善できるところは改善する。一方でそうではなくて、ちゃんと続けていくという部分もしっかり割り切ったうえで続けて来られたのかなと思います。

ここからは地域との連携という部分で、川口館長にお伺いしたいことがあります。こういったかたちで新庄中学校では、今年で新庄地震学が 15 年目に入っています。館長が来られる少し前から地域との連携がより高まってきたという話がありました。地域が学校と連携することは、ここにいる皆さんが大事だと思っていらっしゃると思うのですが、実際に地域の側から見

て、学校と連携することの地域側のメリットというのはどういったことがあるのかお伺いしたいです。

川口 メリットはいろいろあるかとは思いますが、まず中学生たちが地域に出てきてくれますから地域が賑やかになります。新庄地区というのは、何回も津波に襲われている地域です。そういう地域なので、住んでいる人はそれなりに鋭い感覚をもっていたりするんです。しかし、やっぱり長い時間過ごしているうちにその感覚や危機感が薄れてきてしまいます。風化していきます。それを少しでも防いでくれるのが、年に一回行っている新庄地震学の発表会です。これには結構な数の地域の方々が楽しみに来ています。その中で避難訓練をしたり、劇を見たり、171の歌を聞いたりします。個人的になんですが、この171は非常にびっくりしました。この仕事に就くまで全然別の仕事をしていまして、公民館長になって初めて新庄地震学を見たときに171の歌を壇上で女の子たちが踊っているんですね。その壇上の下で武骨な男の子が並んで、一生懸命171とやりながら真剣になって踊っているんです。思春期の恥ずかしがりな子どもたちが、一生懸命にやっているのを見て、すごい驚きました。実は171という災害伝言ダイヤルの歌はそれまで知らなかったんですが、それでいっぺんに覚えました。きっと、地域の人もそういう刺激を毎回受けているんだなと思っています。

川東 地域に児童、生徒が入ってくることによって、地域が元気になると賑やかになる、さらに一生懸命子どもたちが伝えている姿が、大人にも伝わるということなのかと思います。

谷本先生にお伺いしたいのですが、生徒たちはなんでそんなに真剣にできるのでしょうか。

谷本 1年生で入ったときから先輩たちの姿を見ているんです。自分たちが憧れている先輩が踊っているんです。じゃあ、自分たちの番になったらやるものだなと、それが伝統というか、それをやるのがカッコいいというふうに感じている部分もあるんじゃないかなと思います。

川東 継続していることで、あまり恥ずかしがらずに、この地域で行うべきことということで身につけているということでしょうか。

地域との連携という部分で榎谷先生にお伺いしたいのですが、地域との連携は、当初はそれほどでもなかったとのことですが、地域と深く連携していくきっかけや、地域との連携での学校側のメリットについてはどうですか。

榎谷 地域との連携ですが、最初の方はほとんどなかったです。幼稚園、小学校で出前授業をする程度でした。少しずつ地域に出て行く中で、いろんな方を招いて話を聞いたり、語り部のDVDをつくったり、少しずつしていきました。一つ大きな転機を迎えたのが東日本大震災です。その頃から注目度が高まってきました。中学校から発信することについては、地域の方も耳を傾けるようになりました。私は担当していたので、正直に本音を言わせてもらおうと、それまでは「子どもたちがこうやって頑張っているのに、なぜ地域の反応が低いのか」という思いもありました。しかし、東日本大震災後については、手のひらを反したように変わったのを覚えています。新庄地域のコミュニティで公民館を窓口にして、地域と連携するというかたちが見えてきたと感じています。そういう中で子どもたちは、学校では見せない顔を大人の方たちに見せるようになりました。喋らない子が大人の方と一生懸命喋って、何とかわかってもらおうと説明している姿も見られました。生徒たちも「地域のためにやっているんだ」と胸を張れる、なかなか生徒にとって胸を張れるということはありません。自分たちのやっていることが地域のためになっているんだということを、子どもたちなりにわかっているのかと思います。ですの

で、いま思い返してみると、地域に出ることでいろいろと返ってきたことがあったかと思いません。子どもたちの方から、「こんなことを地域に行ってやりたいんだ」とか、「こんなことをやっているなんて場所を訪問したいんだ」とか、いろんなことが出てきました。東日本大震災前は「高齢者のおうちどこですか」と聞くことは、個人情報の問題もあり聞けなかったのですが、東日本大震災後には、老人会と相談した結果、許可がとれましたので、お宅に訪問して安否札等を配った覚えがあります。それもすべて子どもたちが説明してまわってくれました。

川東 川口館長のお話で地域としても、学校と協力することには非常にメリットがある。一方で、学校は学校側で、地域と協力することによって、地域に出向くことによって、子どもたちが学校では見せない顔を見せる、そこから新たなつながりが生まれる。学校・地域と連携することで、単に防災教育を行うということを超える効果があるのではないかという話を伺えました。

小川先生は小木中学校にいらっしゃった当時から、片田先生の防災を追いかけて、地域と学校が連携してやることで地域をどんどん変えていく、生徒をどんどん変えていくというところを念頭に置きながら、防災教育を始められたかと思えます。そういった視点で、地域と学校が連携するメリットという点で何かございましたらお願いします。

小川 ほとんど新庄中学校の先生方がお話してくださったんですが、私の地域は、逆に地域が防災に関する意識というのが本当に低い。災害もほとんど遭っていない。そういうところでまったくゼロからのスタート。そして最初は、私は防災教育とは考えませんでした。“防災への取り組み”という程度の意識から始めました。防災の取り組みをするには、最初から学校だけでは無理だろうと、逃げる時は学校も地域も小学校も中学校もみんな一緒だから、『避難訓練＝地域と一緒にやる』にはどうしたら良いか。そこが最初のスタートでした。約 2,000 人の地区なんですけど、いろんなことを進めていくと、当時の公民館長や町内会 23 町会が、「学校が頑張ってくれるなら応援するぞ」という感覚です。言い方を変えると、「学校頼み」、その代わり邪魔はしないし、応援はしてくれる。だったら逆に学校が思いきって、最初からその方々と一緒にやっていこうという発想でやってきました。その内容は新庄中学校とほとんど同じです。

皆さんのところは町内会に自主防災組織ってありますか？実は 23 町会に自主防災組織はまったくなかったんです。立ち上げるようにはたらきかけたら、役場の方から「自主防災組織はない」、区長さんも「無理だ」「学校で何とかしてくれ」と言われたので、学校が本部となって、23 町会一斉に自主防災組織の連合体みたいにして立ち上げました。事務局の中に生徒会もいれています。自主防災組織の中に、最初から小学校の児童会と中学校の生徒会を大人と対等の位置に加えてもらいました。小木の場合は、そこから学校と地域が一体となって自主防災活動に取り組むようになりました。そのような中で、2 年目あたりから少し意識が変わってきました。

金井 いまの小川先生の話を知ると、地域によって全然アプローチは違うんだなと感じます。いまみたいに、地域の方は自主防災組織も立ち上がってなくて、「学校がやってくれるんだったら、邪魔しないで協力するよ」と言ってくれるところもあれば、よく聞くのはまったく逆の地域も紀伊半島のあたりにはあります。地域の意識がすごく高く、「学校で防災教育やります」というと、「中途半端なことをしてくれるなよ」と地域から言われる。地域の方が学校の方に釘を刺して、「中途半端にやるくらいならやらない方がいいんだから、やるなよ」みたいなことを言う地域もあつたりします。

今日、釜石の方にも来ていただいておりますが、震災前に釜石東中学校で取り組みをしているときに、鶴住居という地域で「こども津波ひなんの家」という仕組みをつくる取り組みを、学校の先生たちと協力して始めようとなりました。内容は、登下校時に地震があったとき、小中学生が一人で逃げられない子がいた場合に、シールが貼ってあるところに駆け込めばそのうちの人と一緒に逃げてくれるという、「防犯 110 番の家」とまったく同じ仕組みです。「防犯」は駆け込んだら中で匿ってくれるだけですけど、「ひなんの家」は駆け込まれたおうちの人と一緒に逃げる、という仕組みです。この取り組みの目的は、実は釜石で防災教育を始めたきっかけとまったく一緒に、目指していたのは子どもの安全ではなく、それで地域の人を守ろうとしました。子どもはそんなことしなくても登下校中に地震があれば走って逃げます。それくらいしっかり学校で教育してくれていました。しかし、地域はそれに付いていってなかったんです。なので、この仕組みをいれることで、地域住民の避難を促すことにつながると考えていました。他所様の大事な子どもが自分の家に駆けこんできて、「一緒に逃げてください」と言われたら、駆け込まれた家の人には逃げざるを得ないですよ。そして、駆けこんできたときに「逃げない」と言わないことを引き受けてもらうための条件にしました。子どもは、学校で「揺れたら逃げる」という行動をちゃんと習慣化しようとしている。にもかかわらず、大人で感覚で「これは津波来ない」「逃げなくて大丈夫」と言われてしまうと、学校の防災教育の意味がなくなってしまう。そのため、子どもに駆け込まれたら、ちゃんと一緒に逃げてあげることを条件にしました。そして、そういう仕組みをつくろうと、地域の方に集まってもらって募集のお願いをする会をもちました。でも失敗しました。あまり地域の方に協力を得られませんでした。「そんなことしなくても、うちらは逃げる。群馬から来て、海もないところで生きているあんたらにはわからないかもしれないけれど、わしらには津波が来るときはわかるんだ」とはっきり言われました。震災の前のことです。それまで何年か連続で海沿いで津波注意報がでたりしても全然逃げない地域の方々に、そうはっきり言われました。「津波が来ないとわかっていたから逃げなかった、来るときはわかるんだから絶対逃げる」とはっきり言われました。このようになかなかうまくいかないってことがありました。

いま、こんなに熱心に防災教育をたくさん地域の学校でやっていただいております。本日、三重県尾鷲市、徳島県牟岐町からも来ていただいておりますが、この 2 市町についての話も紹介します。釜石でつくっていた防災教育の手引きが震災前の H21 年度末に完成しました。そこで、お付き合いのあるその 2 市町に「釜石でこんなものをつくったので、同じようなことを尾鷲市、牟岐町でもやりませんか」と持って行きました。しかし、ダメでした。教育委員会の担当者を口説き落とせませんでした。でも、さきほど榊谷先生がおっしゃったように震災後はコロッと手のひらを反して、みんなやりだしたという状況です。

別にその 2 市町が良いとか悪いとかではなく、また釜石のおっちゃんたちに恨みがあるわけではなく、地域と連携するときにすごく大事だと思っていることとして、先ほど自分の失敗だとはっきり申し上げたのは、「どこまで思いを共有できていたのかな」というところで自分の反省があったんです。僕は自分の価値観や職務に対する倫理の中で、牟岐なら牟岐も、尾鷲なら尾鷲も近い将来津波が来るかもしれないと思って、同じことでも始めて、一歩防災を進めないとまずいんじゃないかなと思って、ご説明にあがったんですけど、残念ながらその思いが通じてなかったのかなと。各学校で地域と連携したり、保護者と連携して取り組みをすること

の重要性は、みんな誰でもわかっています。でも、なかなかうまくいかない経験が積み重なって、二の足踏んでいらっしゃる先生もやっぱり現場の中にはいらっしゃる。そうなったときに、もう一步背中を押せるのは“何をやれ”とか“こんなにいいことなんだ”というよりも、“地域をどうしたいか”“子どもたちをどうしたいんか”という思いの部分なんじゃないかなと思うんです。最初にその部分を共有できないと、どんなにいいことを言ってもその後はなかなか難しいと感じました。「連携大事ですよ」という前に、なぜ連携したいか、連携しようとしている学校側で、思い・目的・目標を共有するところが、まずは話を持って行くときに注意が必要なんだなというのを私個人としては実感しました。

それから、もう一点は、地域側のメリットっていう話をさせていただいたときに、川口館長さんが「年に一回新庄地震学の発表会があるので、あれで地域が引き締まる」というお話をいただきました。まさにその通りだなと思います。学校が連携できる地域の人は、保護者を含めて一部です。ごく一部なんです。学校とつながりがない地域の住民の方ってたくさんいらっしゃるんですけど、そういう人は防災に興味がないと、本当に何もきっかけがありません。地域で防災講演会をやったって参加するわけがないので。新庄もそうだったので嬉しいなと思ったんですけど、他の地域でも長く取り組みを継続しているところは、毎年同じことを同じ時期に地域を巻き込んでやっています。具体的な名前を出してしまって恐縮ですが、徳島市の津田中学校という、ぼうさい甲子園の常連校です。今日の会議にも「来てください」と担当の先生をお誘いしたんですが、「この時期は絶対ダメです」と簡単に断られました。理由は、毎年ちょうどこの時期に、津田地区の全住民に生徒が防災の聞き取り調査をしているそうなんです。先ほどの川口館長さんの話と同じように、地域の人は毎年お盆明けに、中学生が防災のことを聞き取りに来てくれると、「やっぱり注意しないといけないな」と思うわけです。学校の防災に関する行事が一年に一回の地域のイベントになっている、こういう連携の仕方もあるんじゃないかなと感じました。

川東 地域との連携を始めるという部分で、榊谷先生から震災が一つ大きな契機となったとのお話がありました。4年ほど経ちましたが、まだまだきっかけとしては可能性があるのではないかと思います。一方で、「じゃあ、やりましょう」と言って、必ずしもみんなが「うん」と言うてくれるわけではない。「地域を、子どもをどうしたいのか」そういう思いをどこまで共有して、「これがやりたいんです」ではなく、「どうしていききたいのか」という思いをどこまで共有できるかっていうところが地域との連携を始める一つのポイントではないかという話をいただきました。地域と学校が協力するメリットは、川口館長のお話にもあったように、「地域が子どもたちを待っている」という部分で、一年に一回であれ、そういったことが非常に重要なのではないかということでした。

地域との連携という話でパネリストの方からも話していただいているんですけど、参加されている皆さんの中からも地域との連携や協力というところできくつかお話を伺いたいと思います。新潟県見附市は内陸なので、津波ではなく、洪水の心配がある地域ですが、地域と協力した避難訓練を実施しているとのこと。取り組みの経緯やどのようなかたちで地域と連携したのかという部分について、見附市教育委員会から参加されている松井先生に伺いたいと思います。

松井 新潟県見附市教育委員会の松井です。もともとは小学校籍の教員です。勤めていた学校が中越地震でやられ、転勤したら今度は中越沖地震でやられてと、というような経験の中で、いまは行政の3年目です。いくつか取り組んでいることを報告させていただきます。



松井 謙太先生

一つ目は平成24年から文科省の指定を受けて、防災キャンプ事業というものを始めました。これは、財源確保ができたということが大きかったです。それから行政市長部局の応援の中で取り組んでいて、学校の方にやってくれとお願いしているような取り組みでして、24、25、26、27日と小中学校合わせて5学校でこの夏は実施しています。延べ10日間、学校に泊まってキャンプをしています。その中で2点頑張ったことは、一つはどのような学習プログラムが可能かという開発、もう一つはいろいろな学校外の人間とのつながり、コネをつくるということでした。地域住民や保護者はもちろんなんですが、行政も防災担当部局、教育委員会、消防、県や市の専門機関、有識者と言われるような人たち等々との関係性をつくって、今日拡大をしているというところでもあります。いずれマンネリ化すると思いますので、新鮮な継続ができるような知恵をいろいろな人たちから教えていただきたいと思っています。

二つ目は避難訓練です。それぞれの地域でも防災訓練は実施しているのではないかと思います。中学生はボランティアで自主的にこれに参加するという建前でやっています。10年前までは4~5人しか参加しない、何かの間違いで中学生も参加してしまった、というような数だったんですが、年々、参加率が向上しています。小学校でやっている防災教育の影響であれば一つの成果かなとも思います。東日本大震災をまたいで数が増えていますので、世の中の動きも関係しているのかなと思います。去年70%を超えて、これ以上参加率が増えたらどうしようかなと。いずれ下がると思っていたら、今年83%になりました。それらの子どもたちが、それぞれの町内の訓練、全体の訓練に参加して、真顔で訓練している大人たちの姿を見て、自分も何かの役割を振っていただいて、その中で活動しています。冒頭、市長さんが人口減少の話に少し触れられましたけれど、2040年くらいになるとうちの町もかなり減りまして、1万人くらい減る見込みがあります。しかも高齢化してきます。賢くてタフで地域を愛する担い手として、中学生がしっかり育ってもらいたいというのは、みんなの願いだと思っています。完全に参加するメンバーの思いが共有化されているかわかりませんが、まずは型を求めて、型からでるところなのかなと思います。

三つ目は、見附市はコミュニティスクール、学校運営協議会を全ての学校に置いているんですけど、その中で学校安全部会などを設けている学校もあります。それは登下校の生活安全だけではなく、子どもたちの防災教育をサポートするメンバーというかたちで学校の教育課程の中でレギュラーな人たちでお願いしています。これまでの教育コーディネーターだとか、学校支援地域本部事業だとか、そういったもので、長年取り組んできて、ソーシャルキャピタルがかなり高まってきているという背景があるのかなと思っています。協力的な人もそうでない人もいるわけですが、つながれるところからつながってお力をいただいているという状況です。

川東 ここまでは、防災教育を継続するために、学校としてそういった仕組みが必要であろうという話、さらにはその効果を高めるということを含めて地域と協力する、地域と連携していくといった話を続けてきました。

ここで、学校として仕組みをつくり、地域と連携して防災教育としての効果を高めていくことで、児童・生徒に対する教育効果は防災上だけのものではなく、やはりさらなる相乗効果があるのではないかと思います。これまでの話の中でもいくつか出てきておりますが、そういった点についてもお伺いしていきたいと思います。最初に小川先生にお伺いしたいのですが、小木中学校の実践を通じて、生徒たちの成長を実感された瞬間はどんなことでしたか。

小川 私が感じた成長として、生徒たちに例えばマイク一つ向けても堂々と喋れるようになっている。それから、「自分たちのやっていることが、社会の皆さん、地域の皆さんから受け入れられている」という手ごたえ感を感じている生徒たちは、主体的に考えたり、行動するような兆しが見えてきている。そういったことを通じて、自分たちがその地域に元気を与えている、その一翼を担っているということを肌で感じられるようになってきているのかなと。そのことが特に過疎地域では、単なる防災教育ということではなくて、防災という取り組みを通して、地域の活性化に多大な貢献をするのではないかなと感じています。実は、新庄中学校での取り組みをまったく知らずに、小木中学校もカルタ、ダンス、このあたりをやっています。「せっかくやるなら歌と振付け作れ」と始めたことが、少し発展して防災体操となりました。それから社会科の教員が発案したカルタが、地域の社会福祉協議会の皆さんに見ていただきまして、地域に配布することになりました。実際に担当した教員が会議に来ておりますので話を振ります。

廣澤 子どもたちの変化・変容というところで、防災以外にいちばん大きいのは、子どもたちにコミュニケーション能力を育てたいというのが、私たち教員の一番の思いです。防災教育として、「避難訓練をする」ことを学校の一番の目標にしていました。なるべくたくさんの人に避難訓練に参加してもらいたい。そのためにはどんなことが必要かということから、学校でできることを考えていった、というのが小木中学校の流れです。その中で、ちっちゃい町なので、お年寄りが地域の中に日中はおいでになる。それから保育園児。そういう人たちと親しくなっていけば、避難訓練にたくさん人が来てくれるんじゃないかと考えていったんです。そうすると、必要なのは、普段からいろいろ一緒に活動したり、仲良くなったりする活動です。その中で、防災体操や、カルタづくりをやったりすると、お年寄りとも保育園児ともコミュニケーションとれる。次に防災体操を考えるときに自分たちだけじゃ難しいので、何かアドバイスしてくれる人がいないかなと考えたときに、ボランティア活動をしている大学生を紹介してもらい、大学生と一緒に防災体操というものを考えていきました。防災体操というのは、お年寄りの人たちが防災の歌を歌いながら体操していくと自然と防災のいろんなものが身に付くというもの



廣澤 孝俊先生



大句 わか子先生

です。そういうものをつくることによって、大学生ともコミュニケーションがとれるようになる。このように、この防災の活動を通していちばん大きかったことは、いろんな年代の人たちとコミュニケーションをとる機会があり、なおかつコミュニケーションがとれる力を子どもたちがつけていったというところをすごく手ごたえとして感じています。

大句 現小木中学校の校長の大句といいます。パネリストとして喋っている小川校長は隣の市へ異動しました。いま、喋っていた廣澤先生は学校をけん引してくれていましたが、これまた一つ隣の町に異動しました。わたしは、元は教頭として小木中学校にいたのですが、昨年戻ってくるという縁をいただきまして、いま小木中学校の校長をしています。私になってからは、自分たちからもやっていきたいのはやまやまなんですけど、けん引していた者たちがいなくなったことにより、どうつないでいくかが私の役目だなと感じていました。しかし、まわりの方からオファーがくることがあります。先ほどの廣澤先生が大型紙芝居をつくったんですけれど、それをご覧になった町の社協の方が「防災カルタを作成したい」と言ってきました。私がお願いしたのではなく、「200組つくって、地域のコミュニティ広場とか、お年寄りが集まる場所、保育園などに配って、そこで使ってもらって防災意識を高めればいいんじゃないか」と社協の方がおっしゃいました。また、子どもたちに、石川県七尾市の方から、「どうして小木中学校が防災教育が始めて、どんな効果があったのは話してほしい」「防災体操をやってくれ」「大型紙芝居をやってくれ」というオファーが来ました。そこで子どもたちに「校長と一緒に夏休みだけど、土曜日だけ行ってくれる人」と言うと、15人ほど「一緒に行っていよいよ」と言ってくれます。「そこへ行って発表しなければいけないんだよ、体操するんだよ」と言うと、「わかったよ」という感じで、私は子どもたちに助けられています。子どもたちはちょっと練習するだけで、「ここはこうしよう」ということが出来ますし、急なことが入っても、「わかりました」の一言で了解してくれます。最後に自分の発表が終わりますと、原稿を閉じてみんなの方を見て、「ご清聴ありがとうございました」と言える中学生になっていて、自分は途中2年間抜けているんですけれど、びっくりしています。小木中学校の防災教育の取り組みは5年目なのですが、「防災ばっかりして、何をしている学校なんだ」と言われました。わたしも他の中学校にいるときは、「そうかな」と思っていたんですが、離れてみて、「子どもたちが生き生きしている」、「子どもたちが人前へ出てもおどおどしない」、そして、「講演会で話をしてもらっている人を見ている他の中学生の態度が悪い」とか「あの人が寝ていて失礼です」と私に怒ってくるんです。けれど、「じゃあ、あなたそれだけちゃんとやれるの?」と思うと、自分たちは姿勢を正し、講演を聞きいていました。そして不思議なことに、家庭の学習時間も延びています。私は戻ってきて、いいところをいただいていると感じています。そういうふうになり自己達成感というか、子どもたち自身も「自分もちゃんとしなきゃ」というふうになってきていて、効果のほどを目の当たりにしています。ただ、反対に教員の方で、ちょっとだらしないというか、あまり熱心じゃなかったりするとすぐに見抜かれてしまうという怖さが出てきております。他の教職員も子どもたちに負けずにやっていかなければいけない、アンテナ張らなければいけない、というところが課題かなと思っています。

避難訓練も最初は300名、私が出てしまっただけからは800名、700名、650名と地域の皆さんが集まってきてくださいます。そこで、中学生が体操なり、カルタなり、他の取り組みを紹介させてもらう場を設けさせていただいています。今年は9月27日に、町の総合防災訓練の会

場に本校がなります。町には四つの中学校があるんですけど、何とか他校とも少しずつ連携しながらできないかなと思っています。これはまだ取り掛かりなんですけど、そういう状況になってきて、協力の大きさもいま、非常に感じているところです。

川東 廣澤先生からは、防災教育を通して地域と連携することによって生徒たちが生き生きとコミュニケーションをとれるようになってきているというお話でした。大句先生の方からは、そういった流れが出来ていく中で、ご自身も頑張ろうとされたんだと思いますが、頑張らなくてもまわりからオファーが来て、頑張ってもやらなくてもできるような体制ができてきている。それが良い相乗効果を生みつつも、今度新たな問題として、生徒はいいけれど、学校の先生がという悩ましい問題が出てきているというような話をいただきました。

榑谷先生は、新庄地震学を通じて実際生徒たちの成長を実感された瞬間、もうすでにお話している部分もあるかと思いますが、他に何かありましたらご紹介いただければと思います。

榑谷 「学力向上」と、谷本先生も私も言いたいんですけど、頑張る子は頑張ってくれるんですけど、正直言いまして、なかなかもうひとつです。防災授業をやっているときは、喜んでやってくれるんですけど、そういうときになったら難しい顔をして座っています。先ほども言いましたけれど、格好いい言い方をすれば、大人の方と堂々と話し合える、中学生にしてはすごいなという、人間力が高まるというかそういったのは感じています。

谷本 挨拶とかはしっかり出来るようになってきたんじゃないかなと思います。学校自体が地域の方の通り道というか、抜け道になっているんですね。それなので、地域の方がよく通るんですけど、「挨拶をよくしてくれる」、「生徒の方から声かけてくれる」という声が徐々に増えてきたんじゃないかなという気持ちがあります。防災のところでは、私は陸上部の顧問をしているんですけど、陸上の大会に行ったりしたら、「先生、ここでもし津波が来たらどこへ逃げたらいいんだろう」や遠足や校外学習へ行くバスの中で「ここで地震が来たら、先生、あそこだったらあかん」ということをちらほら言ってきたりします。また、去年の卒業生ですけど、地震学をやってきて、「助けられる側より私は助ける側になりたい」と言って、「将来私は救命救急士を目指したい」と言ってくれた子もいました。

川東 川口館長にもお伺いしたいのですが、逆に生徒と交流する中で、まさに地域の一員として見たときに生徒たちの成長を感じたことって何かありますか。

川口 私はしょっちゅう子どもたちを見ているわけではないんですが、今日の発表してくれている生徒さんたちを見ていると、「しっかりしてきたな」と思います。つねに見ていないから余計にわかるのかもしれませんが、同じ子が1.2.3年と育っていくのが、主にこういう発表の場ですが、かなりよく実感できます。

川東 パネリストの皆さんから、実際地域と連携することで防災教育上の効果だけではなく、その他の効果もあるのではないのかということでお話いただきました。フロアの方からもご経験やご意見もらえればと思います。高知県の城西中学校の三浦先生は前任校の潮江中学校、昔の小木中学校のようだと聞いております。そこで様々な取り組みをされていたようですが、地域の連携と効果についてお伺いしたいです。

三浦 高知県から来ました三浦と申します。今年は落ち着いた学校に行かせてもらって、その前までは9年間、高知県で一番しんどい学校に赴任させていただきました。東日本大震災が起こったあと校長先生が代わられて本格的に防災教育を目指していきました。その中で、4年間勉強させ

てもらい、また僕なりに大学院でも研究したんですけど、防災というのは学校と地域をつなぐテーマだと考えています。日本は災害の多い国であって、どこにあっても防災というのは、地域とつないでくれる共通のテーマだと考えています。学校における防災教育で、生徒や子供がしっかりした知識や行動力を身につけることによって防災力があがる。そのことが今後、南海地震とかにいかされていくと考えています。



三浦 洋志先生

地域とどのように学校をつないでいくかというので、僕が実践したのは、生徒を地域にどんどん出していく、地域の行事にどんどん参加していくことを繰り返しやってきました。年間を通して、小学校・保育園の交流を中学生が主体になって出かけていきました。その結果、10年前は苦情しか来なかった学校の中学生に「参加してください」や、小学校が3校あるんですけど、「中学生と先生と一緒に授業に来てください」という依頼がくるようになりました。賞をもらうためにやっているわけではないですけど、まちづくり防災大賞とかで総務大臣賞とかをもらうことができました。やはり東日本大震災を経験した学校で学ぶことが一番良いだろうということで、東北へ視察にも行きました。コミュニティスクールの存在によって、地域と学校が一緒になって学校運営をしていくこと、最終的にはそのかたちがいまの教育にいいんじゃないかなと思っています。災害時、学校があるときには教員がしっかり守っていくんですけど、学校がないときにはやはり地域の人たちが中心になってやる。そういう勉強をしてきました。

今日はいろんな地域の取り組みを知り、また新庄中学校が15年間継続してきたことがいいことだと思います。南海地震までそれを継続していくことが、これからの課題であると思います。いま、東北の方では検証にあたっていると思います。いままでの東北の防災教育が本当に良かったのか、悪かった点がどうなのかを検証していつている時期であって、西日本では次の南海地震までは防災教育を継続していくことが大切だと思っています。そこで、次の南海地震が起こったあと、どのように検証していくかが今後の日本の防災教育かなと思っています。

金井

前回、釜石で会議をしたときにも、ちょっと紹介させてもらったかと思うんですけど、片田先生と一緒に、全国の小中学校を対象に防災教育の実施状況を調査させてもらいました。ざっくりばらんに言うならば、よくやるようになりました、すべての地域で避難訓練を。たくさんやるようになっています。授業も防災でよく言われるような知識を与える、防災の基礎的な知識を教える授業というの、たくさん地域でやるようになっていることが明確に見えてきたんです。それはそうだと思うんです。いろんな地域に行ってお話きいてきた肌感覚としても、全然間違っていないと思っていたんです。その中で僕らが調査する中で一番注目していたのは、「防災教育をやっていて、子どもたちにどんな変化がありましたか」という広い意味での防災教育の実施効果に関する質問の回答です。多くの学校で「防災意識が高まりました」「いざというときには逃げるといふ姿勢が身に付きました」という効果は見られた回答していましたが、これは防災教育をしていて、そのような効果が感じられなかったらむしろ問題ですよ。それ以外のところで、先ほど何度もお話していただいているような「主体的に物事を考えるように

なった」「コミュニケーション能力が高くなった」、小木中学校のように「学力があがってきた」なんて事例も挙げてくれる学校もいくつか出てきていました。またアンケートの中にフリーアンサーで「具体的にどんなことが効果でありましたか」と聞くと、すごく良いことが書いてある学校がいくつかあったんです。その中の一つが先ほどご発言いただいた高知市の潮江中学校でした。なので、ぜひともということで異動されているのですが、担当者だった三浦先生に参加のお願いをしました。

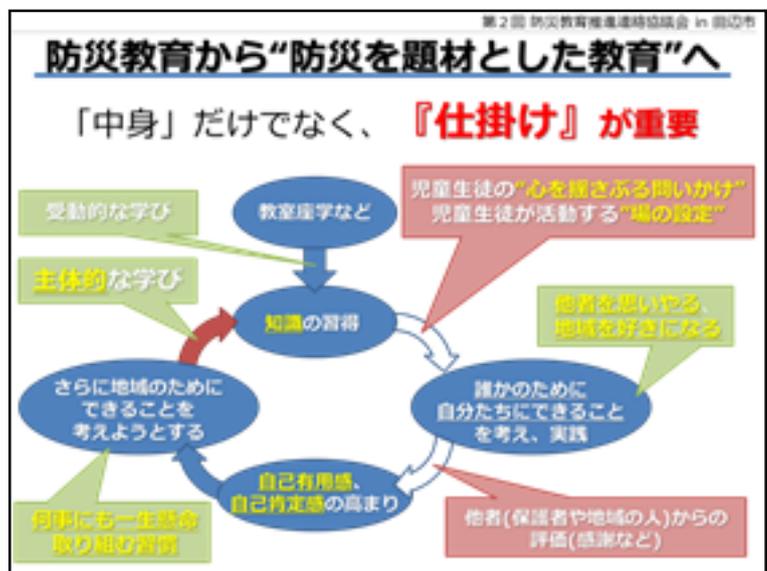
小木中学校や新庄中学校のように、いくつかのすごく熱心に頑張っているいろいろな成果をあげていらっしゃる学校見ていると、防災教育の効果を広く捉えているなど感じます。「他者のことを思いやる」とか、自分だったり家族だったり、地域の人の「命を大切にする気持ち」とか、防災は地域の問題ですので、「地域を愛する気持ち」も高まります。「郷土愛」などは調べ学習の時間等でテーマにすることが多いと思います。防災をやっているだけでも、それと同じくらいそういう気持ちも高まって、成果がでてきたりしていると思います。

それを絵にしてみました。新庄の取り組みの紹介で、谷本先生に「防災教育を継続するための8つのポイント」を挙げていただきましたが、事前に資料を見させていただいて、明確に二つに分かれるなと思いました。①毎週1時間のカリキュラムに組み込まれている、②学年をこえた運営組織、③教科と関連した防災学習、この三つは“仕組み”です。学校でうまくまわすために仕組みをつくりましょうという組織論の話かと思います。④楽しんで取り組める防災学習、⑤「誰かの役に立っている」と感じる防災学習、⑥地域と連携した防災学習、⑦自分たちの取組を発信、交流する場をつくる、⑧他者から評価される機会を得る、この五つは一つひとつの実践を行うときに、担当の先生方が注意して仕込むべき“仕掛け”です。楽しんでやらないと生徒の自由な発想、主体的な行動は出てこないというのはまったくその通りだと思います。誰かの役に立っていると感じられるからこそ、自分の存在価値に気づき、自己肯定感が高まる。それを感じるために重要なのは、自分たちがやっていることを発信する場、この場合でいうと

第2回 防災教育推進連絡協議会 in 高知市

防災教育を継続するために・・・【新庄中学校話題提供より】

- ①毎週1時間カリキュラムに組み込まれている
- ②学年をこえた運営組織
- ③教科と関連した防災学習
- ④楽しんで取り組める防災学習
⇒【生徒の自発的な行動】
- ⑤「誰かの役に立っている」と感じる防災学習
⇒【自尊感情・自己肯定感の向上】
- ⑥地域と連携した防災学習
⇒【地域の一員という意識/共助の意識/中学生が助ける例に】
- ⑦自分たちの取組を発信、交流する場をつくる
⇒【人と人との絆/協力してやり遂げる行動力】
- ⑧他者から評価される機会を得る
⇒【達成感、自己肯定感の向上/下級生の意識向上、次年度への動機付け】



⑦です。そういうものを仕掛けとしてつくってあげないとなかなかそれを感じることができない。新庄中学校の場合はそれを発表会というかたちで仕組みにしていたんだと思います。そういう場を通して、他者から評価してもらえる。評価についても発表会をするだけではダメで、そこに参加した地域の方だったり、保護者の方が「お前らいいことやった」「がんばったな」と褒めてもらう。ただ発表するだけではなくて、その一言を言ってもらえるかどうか、地域からのポジティブな反応を引き出してもらうためにも、地域・家庭との連携というのは重要なかなと思います。こうやって谷本先生の資料をみていくと、地域と連携してうまく取り組みをまわしていったときに、その効果を最大限発揮し、良いとこどりできるようなポイントがここに集約されているのではないかなと思いました。

パネルディスカッション 1 でも、「知識を与えるだけではなくて、いざというときに、自分で判断して行動できる子どもにするためにはどうしたらいいか。そのための教える側、教員側のコミュニケーションの素質ってどういうものが必要か」という話をさせてもらいました。それも合わせて、継続するためには、防災教育をやっていて「これはやっていて意味あるな」、「やることに効果があるな」と実感する成功体験がないと、なかなか続かないと思います。その意味でも、一つひとつの実践について、効果を最大限発揮するための“仕掛け”が重要なのでは、と皆さんの話を聞いて感じました。

川口 学校の外から学校を見ていますと、ちょっと面白いことが見えてきます。授業参観なんかは保護者の参加率もいまひとつだということを知りますが、新庄中学校の場合は、他所の学校をたくさん知っているわけではないですが、体育祭に保護者や大人が結構多いです。それはなんでだろうかと思うことがあったんです。やはり子どもと地域がつながっているんです。例えば中学生が地域のお祭りに出しものをだしてくれます。それだけでなく、あとの掃除までしてくれる。そんな子どもたちに親しみを感じるのは当たり前ですね。それから地域側も公民館を始め、年間、相当たくさん学校へ入っていきます。獅子舞を教えにいたり、ジオパークの会員は地域の学校の近くの地層を教えてまわったりしているんですね。相当いろんなことの交流の結果が体育祭にあらわれているのかなと感じました。

川東 まさにいまのお話でもそうで、体育祭などのイベントを通して交流する仕組みがあることで地域と子どもたちを含めた連携が生まれているのかと思います。金井先生の話もつまるころ、学校の中の防災教育という“仕組み”も重要ですし、地域とつながるという意味での何らかの“仕組み”も必要です。ただ、“仕組み”だけあってもダメで、そこから教育上の効果をあげるためには“仕掛け”が必要であり、さらには我々全員がその効果を実感できることが必要になります。その結果として、実践が継続していき、地域との連携が効果をうむということにつながるのではないのでしょうか。

以上

4. 新庄地区視察

(1) 「新庄地震学」の授業見学



社会「過去と現在の対比」

理科「火山噴火」



国語「防災標語」

理科「地震の揺れ」



技術「ホームページ作成」

音楽「歌とダンスの防災教育」



保険・体育「避難所運営」



数学「凧を使って情報伝達」



家庭「非常食・ソーラークッキング」



かまどベンチ



(2) 「新庄地震学」の講評

片田 敏孝 (群馬大学大学院 教授)

みなさんこんにちは。今日は新庄地震学の取り組み、皆さんの活動を見せていただきました。僕は海のない県で津波防災の研究をしています。今日、後ろの方にお集りの先生方も釜石だとか全国の津波の防災教育を一生懸命やっておられる先生方に集まっていただいて、みんなが行っている新庄の防災の勉強の仕方を勉強しに来ました。今日は、10教科のグループに分かれた新庄地震学の授業をいろいろ見せてい



ただきました。本当に素直な感想を言いますと「いいな」という感じをもちました。僕は前々から新庄中学校のみんなが、15年前から『新庄地震学』という防災に対する取り組みを、先輩から引き継いで実施していることは知っていました。そして、全国でも有名な新庄中学校の取り組みですので、どんなことをしているのだろうと、今日は楽しみにきてきました。

まず感想として思うことは、みんなが防災を、あまり暗く考えていないなということです。とかく防災というと、「津波の厳しいところ」、「津波が襲ってくる」、「どこに逃げようか」、「おじいちゃん逃げられるだろうか」、「たくさん犠牲者が出ちゃうんじゃないか」など焦るような気持ちで、ちょっと怖がりながら避難訓練をやったり、緊迫した中で勉強していかないといけないような、なんとなく暗いイメージがつきまといまいます。けれど、みんなの防災を見ていると、例えば歌やダンス、おいしそうなパウンドケーキをつくっているグループの様子、英語でカルタ、凧をつくったりなど、それぞれのグループがいろいろなかたちで楽しく防災を学んでいます。これまでの防災は暗いですよ。『津波が来る』、「昔は大きな被害があった」、そんなことばかり言いながらやる防災とはちょっと違ってきます。玄関の入口のところで標語を見つけました。『同じやるなら精一杯やって楽しもう』。あれを見て、まさしくそんな活動をみんなはやっていてくれるなというそんな実感をもちました。みんなのいる新庄は、確かに過去を見るならば、いろいろ津波の災害があったところです。でも日々の生活の中で怯えたり、怖がったりしていたらやっていられないですよ。現にここに住んでいるんですし。ここに住んで、おいしいものがいっぱいあって、みんなにとっての自慢の故郷なんだから、津波の怖い話ばかりではやっていられない。暮らしを楽しみながら、でも、ずっと住み続けるためには、備えなきゃいけない。それが防災なんだけれど、それを暗く考えるのではなく、ここでの生活を楽しみながら、住み続けるために、防災をやらなきゃいけない。これがこの地に住むお作法なんです。それを15年前から始めて、いま、きみたちが楽しく引き継いでいる状況を見せていただきました。みんなのような防災に対する向かい合い方が、全国に広がるといいなと思いました。ぼうさい甲子園でグランプリをもらうのも納得できます。そんな取り組みを皆さんが続けていることは本当に心強いなと思います。

それからもう一つ感じたことは、みんな防災を通じていろんなことを学んでいるなと思いました。とかく、中学校や小学校は、学校の中だけの世界になりがちです。だけど、歌を歌ってくれた子たち、踊りを教えてくれた子たちは、たぶん地元の幼稚園や小学生、おじいちゃんおばあちゃんのことを考えてやってくれたと思う。みんなの防災の活動は、あきらかに自分のためだけじゃない。自分の勉強のため、自分の防災のため、それだけを考えていなくて、この地域みんなの防災を、きみたち中学生がしっかり考えている。心強いなと思います。そして何よりも、田辺のこの地域の大人たちが幸せだろうなと思

ます。きみたちも5年もすれば20歳になる。10年もすれば25歳、地域の中心になって頑張っていくようになる。そのみんなが中学校にいながら小さな子どもたちやおじいちゃんおばあちゃんのことまで考えてくれる。地域との関わりをしっかりとって、そういう人たちもみんな一緒に暮らしているのが新庄です。そこに津波が来るということに対して、みんなで向かい合わなくちゃいけないということ、それを中学生が考えて、地域との関わりを考えながら防災を続けていく。防災は学校の中だけでやるのではなく、地域のみんなですることなんだと、日頃、僕はそう思っているものだから、まさにみんながそうやっていてくれることにとっても心強く思います。

15年も続いてきた新庄地震学ですが、これからもその伝統をみんなで守ってってもらいたいと思います。今日、私と一緒に全国の一生懸命防災をやっている先生方も一緒に勉強しに来たんですけど、おそらく全国の先生方も勉強になったと思います。僕は防災の専門家なので、いろんな学校の取り組みを見てきましたが、みんなの取り組みは、すごいな、すばらしいなと思っていました。そして、来てみたらやっぱりそうでした。みんなの防災の取り組みが日本中に広がるのが日本の防災力を高めることなんだと、そんな自信をもってもらいたいと思います。そして、これからも全国の模範となるように、いままで通り続けてほしい。いまのままやってくれば、次の2年生にも伝える、1年生にも伝えるというかたちをとっていてくれればと思います。

言いたくないけど、必ずやこの新庄にはいつの日か津波が来ます。でもそのときに、いまのみんなの頑張りの延長に「今回は誰も死ななかったね」と、地域のみんなですべて喜びをわかち合えるだろうと思います。津波は来ない方がいいですけど、来るものです。来るものならば、「誰も死ななかったね」と喜びをわかち合えた方がいい。僕は、そんな取り組みになっているように思います。

今日はみんなの楽しそうにやっている防災を学ぶことができ嬉しかったです。そして、何よりもみんなの肩肘張らない防災、こうじゃなきゃ防災なんて続かないです。みんなのこの防災のやり方を僕自身、全国に紹介していきたいと思っています。今日はいろいろ資料もいただいたし、みんなの活動にこれからも注目し、「防災教育って新庄中学校みたいなこういうやり方あるんだよ」ということを僕自身もあちこちで紹介していきたいなと思っています。

(3) 話題提供「昭和南海地震の様子について」

真砂 勝巳（新庄愛郷会 会長）

新庄愛郷会会長をやらせていただいております、真砂勝巳と申します。わたしは、昭和5年、1930年5月1日生まれですので、満85歳と3ヶ月となります。

それでは、昭和の津波の経験を話させていただきます。昭和21年12月21日午前4時19分、今まで経験したことのないような大きな揺れで目を覚ましました。すぐに父親が私に向かって、「家の前に出て、高雄山の方向を見て、稲妻のような光をしていないか、またドーンというような大きな音はしていないか、確かめなさい」と言いました。高雄山は、私の自宅から東北東にある約606mの山です。私はすぐに着の身着のまま表に飛び出て、その方向を見ますと、本当に稲妻のような光が走っていました。それから、ドーンという音も、4から5回遠くの方から聞こえてきました。すぐに父親にその話をしますと、「お前らすぐ手車を持って家の前の山方に逃げろ。わしもおばあ（77歳の当時の父親の母）を背負って一緒に逃げるから。」と言うので、すぐに出たわけです。それで、私の家族は9人全員が、無事に避難したわけでございます。避難場所で少し落ち着いてから、私は親父に「なんでこの前の山に来たんだ？」と聞いたんです。私の家の後ろに裏山があり、1分か2分くらいで行けるんです。そこを間違ったんじゃないかと話をしたんですけど、父親は「その峠はきれいだし、前の山方は自宅から5,6分かかかる。しかし、ここは昔の新庄村の中山城という城があった高台だ」と。そして「すぐ近くには東光寺という新庄唯一のお寺がある。ここには、水もあるし、食べ物もある。やっぱり逃げるにはそういう所へ逃げるのが1番安全である」と。避難が長くかかるとやっぱり水も食べ物もなかった所は大変なことになります。そういうことを想定して、父親は「逃げるんだったら、時間がかかるけど、前の山方へ行け」と話していました。それから、疑問に思ったので、「地震のときに稲妻とかそのような音がするのは、これは何か関係あるのか？」と聞いたんです。そしたら、父親は「わしはそれは分からん。しかし、昔からそういうふうに言われている」とのことでした。



真砂 勝巳さん

先ほども申しましたように、やっぱり『遠くても、少し時間的に余裕があれば、出来るだけ高いところへ逃げる』というのは当然のことで、昔の人は家庭の中で教えられてきたこととございます。新庄の人達は昔から教えられたことに従って避難したことが、今から考えますと良かったと思います。

もう1つは避難の途中でございますけれども、遠くの方で「津波だぞ」とか「津波が来るぞ」「早く逃げろ」ということを、男の人が大声でみなさんの中に呼びかけていたということがありました。そういうことから、当時は新庄村としてお互いに助け合うということが徹底されていたんだという感じがいたします。それはなぜかと言いますと、この津波は昭和21年ですから、終戦間もない時期でございます。それで、戦時中の隣組という一つの助け合いの地域の仕組みが残っていたことが大きかったのかと思います。

それから、津波の翌日の12月22日ですけれども、私どもの家が床上60cmあまり浸水いたしましたので、その後片付けを家族総出でやっておりました。そこへ、祖母の親元から男の人数人が手助けに来てくれたわけでございます。その男の人は、潮に浸かった米俵が10数俵あったわけですが、これを納屋から持ち出して、新しい米といくらも変わらないということで持ち帰っていただいたということ

もでございます。災害を受けた時、そういうふうな手助けは非常にありがたいなという思いをしました。当時、新庄村で私の家だけでなく、新庄全体の各家庭に周辺市町村からその様な手助けがあったということを知っています。やっぱりその時代の人たちは冒頭に申しあげましたが、「お互いに助け合いをする」という社会的にその様な考え方が非常に強かったと思います。そのことによって、新庄といましては、あれだけの災害を受けながらも犠牲者が 22 名程度ですみました。やっぱりお互いの助け合いの力ではなかったかなと思います。



次、助け合いの関係でございますけれども、私事になりますが、私の祖父が明治大水害の時に富田川で大きな水害があったわけでございます。その時に、私の祖父と 5,6 人が協力して大水害から人命救助に行った経緯がございます。だいたい数分で 26 名の方を助けたという話であります。その証拠として、ここに和歌山県から 26 名の方々を人命救助したという賞状を頂いております。こういうことからいたしましても、当時の人たちは自分の親族だけでなく、その土地に住む近隣の人たちを互いに助け合うような習慣が養われていたんじゃないかと考えられるわけでございます。今、そのようなことが非常に大事ではないかということをつくづく思う次第でございます。そうゆうことで、この地域全体がお互いに助け合いをするということは、その当時のいろんな自然災害を常に念頭において日常生活をしていたということが道しるべになったのじゃないかと思えます。

昭和の津波を経験した上で、私なりに今後どういうふうにするべきかということをし少し申し上げます。やっぱり災害の時には自分の命は自分で守る。人命救助は第一ですから、自分の命は自分で守る。次に、弱い弱者を守る。やっぱり弱い人たちを守る。それからお互いに助け合う。これがやっぱり人命救助の第一義じゃないかなと思います。第 2 点は、地域の実情に即した防災対策をやっぱり樹立する。そのために、地域のいろんな災害の歴史を学び、その上に立って、独自の防災対策を樹立していくことが大事じゃないかと思えます。第 3 点としましては、県、国、市町村というような公共団体につきましては、まず住民の人命・財産を守るということを第一に考えて、その上でそれぞれの立場における防災計画を樹立し、さらにその防災計画を他の公共事業に優先して実施できるような特別措置的な事業計画を樹立すべきではないかと感ずる次第でございます。それがこれからの自然災害やいろんなものに対応すべき国、県、市町村の一つの姿勢じゃないかと感ずるわけでございます。やっぱり災害に対して自分自身がそれに対応しなければいけないけれども、やっぱり社会全体、そしてまた国、県、市町村全体が一丸となって対応した措置を取っていくということが一番大事じゃないかと 85 歳になりまして痛感する次第でございます。これで私の話を終わらせていただきます。

脇本 祥司 （新庄公民館 主事）

真砂会長がお話くださいました南海地震当時の写真になります。こちらが鉄道の線路です。こちらに見えるのは新庄駅の駅舎です。降下しているのがわかると思います。この斜めに走っているのが、国道で、国道を船が遮断しているのがわかると思います。こちらが文里湾といいます。いまの写真をとった高台に避難している人たちです。当日の早朝の写真です。こちらに一人、男性がいるんですが、この方が柏木さんといいます。これが現在の写真です。こちらに新庄駅がありまして、先ほどの高台から写真を撮りました、当時は文里湾入口、ここはまだ海で、現在は埋め立てをしております、文里湾の入り口がだいぶ狭くなって津波に強くなっております。こちらは一時的避難場所として、避難場所となります。こちらの当時避難した場所より少し離れているんですが、いろんな角度から避難して来られる少し高めの高めにつくった避難場所をつくっております。この辺に真砂会長のお宅があります。こちらが津波の水がひいたときの新庄駅付近の写真です。大きな船が流されてきているのがわかります。こちらの写真が名喜里地区といまして、新庄公民館のある近くです。この名喜里の川に漂流物が流れて川を止めている状態です。ここの地区もいまの海拔は1.7~1.9mくらいの高さです。こちらも同じく名喜里地区の旧道です。この道のすぐ横に公民館があります。簡単ではありますが、南海地震の写真でした。

続きまして、新庄地域の防災についてお話します。新庄地域の防災意識の向上に関わられた柏木について少しお話します。柏木さんが平成8年に新庄公民館館長として公民館にいたときに地震の話になりまして、遊びにきていた子どもたちに「地震が来たら高台へ逃げるように」と言ったところ、子どもたちは「津波が来たら、泳いで遊ぶ」と言ったそうです。それを聞いた柏木さんは、子どもたちがあまりにも無関心なので、啓発が必要であると思われたそうです。そこで、過去何度も津波の被害を受けてきた新庄の歴史や、当時のご自身の体験談を子どもたちに話すことによって意識を高めてもらいたいと考えました。そこから柏木さんが小学校へ少し時間をいただけるようお願いしに行き、毎年12月21日の津波のあった日に小学校で震災の話をするを続けて



脇本 祥司さん



いました。その頃に、中学校の地震学が始まり、小学校で柏木さんから話を聞いた経験のある生徒たちが中学生になって、あらためて柏木さんに中学校でも話をしてもらいたいと頼みに行ったそうです。これらの柏木さんの活動は現在でも引き継がれています。本日、午前中に中学校で新庄地震学の授業をご覧になられたと聞いています。テーマごとにわかれて今年度の新庄地震学が行われているかと思います。公民館では地域の方々とともに防災に向けて取り組めるよう数年前、かまどベンチをつくりました。新庄地震学発表のときに、かまどベンチで漁協の女性部の方に協力をいただき、実際に炊き出しをおこなっています。来場者に振る舞うことによって、新庄地域の方々に、新庄地震学に取り組んでいる姿を見てもらい、内容を知っていただくための呼び掛けを行っています。また、新庄地震学発表当日に登校時間に避難訓練を行うようにし、新しくつくられた避難通路を通して避難場所である新庄中学校へ避難していただくなど、地域の方々にも参加していただいています。その後、新庄地震学の発表をご覧いただくなど、地域の方々にも広く意識をもってもらう工夫をおこなっております。

このようなコツコツした取り組みが東日本大震災の大津波警報発表時にあらわれ、田辺市で最も多い200人以上の避難者をかかえました。また、中学生が率先して避難者のお世話をしていたそうです。いままでの取り組みが生徒はもとより地域住民の防災意識を高めていることにつながっていると考えます。今後もこのような取り組みを続けていくことが必要だと思えます。

5. グループディスカッションを踏まえた討論会

(1) グループディスカッション

参加者を5つのグループ（小学校3グループ、中学校2グループ）に分け、パネルディスカッションの議論を踏まえて、以下の2つのテーマについて、議論していただいた。

テーマ1「防災教育のためのコミュニケーション力」

テーマ2「地域と連携した防災教育とその継続」



小学校グループ1



中学校グループ1



小学校グループ2



中学校グループ2



小学校グループ3



会場全体の様子

(2) 議論した内容の発表

片田 第1回は、「顔合わせ会」ということで、釜石市に行って、その地でまずは同じスタートラインに立つことを目指したため、議論する時間があまりありませんでした。逆に今回はまだやるかというくらい皆さんで議論しようと思っています。これまでの議論を踏まえて、これからに向けての方向づけができるといいかなと思います。それと、今日ここで、連絡協議会としての共通認識を図っておきたいと思います。そして、そのうえで、次の黒潮町での議論につなげていきたいと思っています。現段階で、我々の議論はどこまで深まったのか、という共通認識を図るための全体討論という位置づけをしていきたいと思っています。



片田 敏孝教授

皆さんのグループ討論の様子を見ていて思ったことは、防災教育として考えていることに対して、先生方とは共有認識が出来つつあるなと感じました。数年前の自分に立ち返って考えてみてください。その頃の自分の考える防災教育は、やっぱり“災い教育”でしたよね。災害と現象のみを見て、「津波が来るからどう逃げるか」とそれだけが頭の多くを占めていたのではないのでしょうか。津波であったり、洪水であったり、いろいろな災害がありますが、総称するならば、“逃げる逃げる教育”であったんだろうと思います。いま、どうでしょう。様々な議論を通じて、先生方が何となく認識しておられることは、防災教育はもちろん“逃げる逃げる教育”の部分もあるんだけど、それ以上に、防災教育を介して得られる教育効果は、単に「逃げる逃げる」と教えることよりも、大きな枠でその効果が期待できるという認識をお持ちになっていただけたんじゃないでしょうか。「確かにそういう成果はある」という現場からのお声もたくさんいただきました。「防災教育をやっていたら子どもたちの学力があがった」、数年前に聞けば、「本当かよ」と思うような、「風が吹けば桶屋が儲かる」みたいな話まで出てきました。でも、その効果の発現構造を考えると、何となくそうだろうなと納得できるところがあります。いじめの問題など、いわゆる今日の学校問題もいろいろあります。あんなに苦労して、解決しようとしてもなかなかうまくいかなかったことが、防災教育をやって、子どもたちがじいちゃん、ばあちゃんのことを、小さな子どもたちのことを考え、共通の敵である津波に向かい合うことを介して、自分のなすべきことは何なのかということを考えるようになった。その結果、子どもたちに、以前であれば考えもしなかったような“配慮の心”が芽生え、結果的にそれらの問題も解決していた。“命の教育”に及ぶ効果もでてくる、という実感を僕らは得たんじゃないかなという気がします。

いま、あらためて僕たちの考える防災教育を考えてみます。もちろん「その日そのときちゃんと逃げられる子に育む」ことは一義的にはあると思います。しかし、そこからさらに欲張って、防災教育のもつ可能性として、「防災教育を一生懸命やっていくと、こんなにも子どもたちの可能性を伸ばすことができる、引き出すことができる」という情報を、このグループから発信できるようになれば、おそらくこの場にはない全国の先生方、特にこれまで学力の問題やいじめの問題などに頭を悩ませておられた先生の中に、「なるほど、こういう防災教育の枠の

中で、解決の可能性もあるな」と気づき、「防災教育やってみよう」と思う先生がもう少し増えてくるように思います。そういう面で自負しているのは、このグループが一番防災教育の可能性を知っている。一番幅広く捉えているグループだろうと思います。全国に防災研究者はたくさんいるわけですし、僕らも学会なんかを通じて他の大学研究者、防災研究者と議論しますが、彼らとて防災教育は、まだ“逃げろ逃げろ教育”の範疇にあるように思います。「どうやってちゃんと逃げて被害を軽減するか」ということだけで、防災を捉えているように僕は思います。でも、僕らはその領域は脱しているのではないのかなど。僕らは防災教育を介して、子どもたちの人間教育というのか、“生きる姿勢”、“主体的に物事を判断し、自分の判断で自分の足でしっかり歩いていける子どもたちを育てていく”ことができる可能性があることに気づいている。それに気づき、それを効率よく進めるためにはどうしたらいいのかを議論している。そういう意味で、このグループは、おそらく日本で一番防災教育を幅広く捉え、より戦略的に教育という面で活用していこうという非常に積極的に防災教育を捉えている、その最先端にあるグループなんだという自負もあります。

今日のグループディスカッションまでの議論の一つの成果である、新庄中学校の子どもたちは、物怖じせず、僕らの問いかけにもちゃんと答えられていました。どうでしょう、あの学校の子どもたちの振る舞いに成果を感じ取ることができましたよね。おそらくそれは先生方の学校でもそういう効果が確認されつつあるんだろうと思います。そういう枠組みの中で、これまでの議論を総括していきたいなと思います。もちろん「まだまだその域には達していない」という批判も含めて構わないので、これまでの成果について、この場で皆さんと共有認識を図りたいと思います。そのうえで、次回の黒潮町では、その次の議論、もしくは別の角度からの議論に展開していきたい。黒潮町で次のフェーズに入っていけるように、ここまでの総括をしたいと思います。思ったことをいいこと悪いこと含めて全部さらけ出していただき、それを踏まえて、良かれところはさらに伸ばし、改善すべきところはさらに改善していきたいと思っています。

a)小学校グループ1

発表者 濱野 公壽 (尾鷲市立尾鷲小学校 教頭)

濱野 ここから3時間ほど車で走っていただければ、尾鷲に着きます。三重県の東紀州地域といわれています。電車ではなく、ディーゼル機関車が2時間に1本ぐらい走っています。昨年、やっと名古屋方面からの高速道路が尾鷲までつながったので、津市まで2時間程で行けるようになりました。ただ、名古屋まで出て行くのに、ものすごく時間がかかりますので、東京から時間的には一番遠いところといわれています。尾鷲市は、人口が最も多かった頃で35,000人ぐらいでしたが、今はとうとう20,000人を切ってしまいました。



濱野 公壽先生

先ほど片田先生の方からも、「逃げろ逃げろ教育」ではないだろう」という話があったのですが、自分たちもそのような話になりました。効果については、「教育の目的を達成すること」とまとめました。かなり抽象的な言葉になってしまうのですが、「防災教育をすれば、防災の力だけが伸びるわけではない」ということです。その中には今まで盛んに言われている、人権教育であったり、いろんな教育がありますけれども、そういうものが全部含まれているのではないだろうかということです。昨日も「防災教育をしたら、学力はあがったか」と言われても「ちょっと…」と言う話も出ていました。きっとその学力というのは、今盛んに言われている学力学習状況調査の学力だろうと思います。しかし、子どもたちは、それでは評価できない学力もいっぱい持っていると思います。あの調査では評価できない力もどんどん伸びていくと思います。そして、本当に仲間の命を大切にしようと考えていくなかで、きっと子どもたちの学力学習状況調査の学力も伸びていくと、自分たちは信じたいな、きっとそうだって思っています。

“育てる”ために、当然知らないことは教えることも大事ですが、教え込んでいくことは良くないんじゃないのか。やっぱり子供たちが「自分たちで考える」とか「自分たちで課題を見つける」ことが大事になってくるのではなかろうかということです。どうしても教えマンみたいになってしまうのですが、自分たちで「何を教えるんだ」「どこまで教えるんだ」という点をしっかり考えて、“教える”ということよりも、“子供たちに育ててもらおう”という指導力があるのではないだろうかということです。

それから、やっぱり意欲・態度を子供たちに構成しておくことが大事なのではなかろうか、そこにはやっぱり地域も入ってくるんじゃないのかなということです。それで、子供たちに教え込んでいくのではなく、「子供たちが課題を見つける」であったり、「子供たちが自ら体験する」であったり、子供たちの思いや要望にマッチした実践を、如何に組み立てるかが必要になってくるのではないかと。お互いに話をしたり、伝え合ったり、学びあったりすることによって、子供たちの力でお互いに学び合いながら伸びていくというような実践が必要になってくるのではなかろうかなという話をさせていただきました。

テーマ 2 です。「どのような実践が考えられるのか」ということで、「顔と顔が見える実践」とまとめました。これは子ども同士も当然そうですし、子どもと教員の学校の中でもそうだと思うのですが、「地域の方が子どもたちの顔を見る、子どもたちが地域の方の顔を見る」といった実践が大事なんじゃないでしょうか。地域の方々が、荒れた中学生、荒れた中学校の姿を見て、「怖い」という認識を持っていたのが、実際に子どもたちが訪れてくると「違うんだ」という思いを持つ。そして、その子どもたちが、命を守るためにいろんな取り組みをしていることに気付いたときに、地域の方々が、「ほっとする」「勇気付けられる」「元気になる」ということがあった。そのような話もあり、やっぱり、みんなで顔を合わせてというような実践が大事なんじゃないかなろうかという話をさせてもらいました。



それから「地域との障壁を乗り越える」というところです。これは、私たち教員はやっぱり自分の心の中にバリアがあって、「地域に入ると面倒くさいよな」とか「鬱陶しいよな」とかそんな思いがあります。どうしてもバリアを作ってしまうと、「地域の方を入れない」だとか、逆に「自分たちが地域に出て行かない」ということになりがちなんじゃないかなろうかと。そこで、人権教育でもよく言われますが、「心のバリアフリー」がやっぱり大事なんじゃないかなろうかということですね。それから、うちのグループには行政の方もいらしてくれまして、その方も「実は、行政も壁があって、なかなか受け入れられにくい」と話されていました。ただ、その方が言われるには、「やっぱりその一人ひとりの思いですよな」、「バリアは人間によって作られているんだから、人間で外せますよな」という話になりました。

それから、「どのような連携をとったか」というところです。どこも同じような感じで、自治会、町内会、消防団、地域の防災と連携していました。一つ課題としては、自治会に参加しない住民がたくさんいるので、自治会が成立しないんですね。だから、自治会の方に「これちょっとすみません、地域に回してください」とお願いをしても、なかなかそれが地域全体に行

き届いていかないということがあります。そのため、連携するにしてもいろいろ難しいことがいっぱいありますね、というような課題が話されました。

それから、「継続のために取り組んだこと、仕組みのあり方」というところです。うちの小学校では、「命の架け橋」というのが作られました。うちの学校の標高が約 11mなのですが、安全とは言い切れないんですね。そのため、学校の裏にある標高約 45m の中村山が避難地になっております。しかし、登る道が細い道が 3 本くらいあるだけでした。当然、学校周辺の住民もそこをめがけて逃げてきますので、道が渋滞してしまい、とてもじゃないけれども登りきれないだろうと、対応を悩んでいました。そのような状況で、尾鷲市は 3,000 万円かけて、子どもたちのために、学校の教室から直で中村山に行けるように避難のための橋を作ってくれました。私たち教員は「防災教育しなきゃいけないよな」と思うようになりました。この橋が尾鷲小学校の防災教育のシンボルになってくれるのかなと思っております。

あとは、やっぱりよく言われるのが、「地域とどのようにつながっていくか」ということです。尾鷲市の人口は、19,000 人ほどで、少子高齢化がとんでもなく進んでおります。以前は漁業と林業で栄えた町なんですけど、ともに廃れていっております。尾鷲小学校に 503 人の児童がいますが、児童の保護者の中に本当に純粋な林業・漁業にかかわっている保護者は 0 だと思えます。そのような状況をみていくと、下を向かざるを得ないような地域なんですね。釜石で言えば鶴住居のような地区になると思いますが、周辺部の地区に行きますと、もう小学校もなくなっちゃいました。おじいちゃん・おばあちゃんしかおりません。たまに遠足で子どもたちを連れていくと、「久しぶりに子どもの声を聞いた」と大喜びして下さいます。そんな地域なんですね。だから、そうゆうことを学んでいくと、現実を知っていくと下を向かざるを得ないんです。でもそこで生き抜いていかなければなりません。そんな状況ですが、違うんです。「尾鷲って素敵だよ」「尾鷲節があるよね」「ヤーヤ祭りがあるよね」と、素敵なところがいっぱいあります。海もきれいです。魚も美味しいです。尾鷲ひのきがとっても有名です。関東大震災の時に、関東で倒れなかった家は尾鷲ひのきが使われておりました。素敵なところもたくさんありますので、やっぱり子どもたちが「前を向ける」「上を向ける」そんな教育をしていかなきゃいかんかなと思います。でも、本当に仕事がありませんので、子どもたちは外へ出て行くんですね。早い子は高校から外へ出て行きます。尾鷲から出て行かなければ大学には通えません。仕事もそうです。ただ、尾鷲から出て行って、いろんなところで生活している人たちが「自分のふるさと尾鷲なんだ」、「こんなええところなんだ」って思ってもらいたい。地震が来るかもしれない、津波に襲われるかもしれない、屋久島に抜かれて日本で 2 番になっちゃったんですが、雨もたくさん降ります。そんなところですけども、どこに住もうが、どこに行こうが「素敵なところなんだよ」と思ってもらえる、思えるようなそんな教育をしていかなきゃいかんかなと思っています。最後は本当に自分の個人的な思いを語ってしまいました。

b)小学校グループ2

発表者 嶮口 善一 (田辺市教育委員会事務局学校教育室 主任指導主事)

嶮口 田辺市の嶮口と申します。最初に、せっかく来ていただきましたので、田辺市の話を少しさせていただきます。昨日の冒頭の挨拶から田辺市防災教育担当者会の会長のプレゼン、シンサイミライ学校の発表、それから今日の授業等々を見ていただきましたが、先生方はどう思われたでしょうか。新庄中学校の地震学の取り組みは、15年目になるんです。そして、田辺第一小学校と高雄中学校のシンサイミライ学



嶮口 善一先生

校は片田先生が来ていただいた3年前になります。この3つが田辺市を代表する学校なのです。ですから、市内に41校の学校がある中で、それ以外の学校の防災教育はどれくらいのレベルにあるのかを考えた時に、教育委員会も反省しなければいけないとなりました。新庄中学校があんなにすごい活動を続けてこられたのに、それを教育委員会として広げることをしなかったことを反省いたしました。そこで何をしようかとなったときに、この沿岸部地域、山間部地域、中山間地域の3種類の災害種別があるので、大変だけでも先生方が中心になってやっていく組織をつくることになりました。子供が主体的になるということは、先生方が主体的にならなければいけません。そして、会長を寺本先生に引き受けていただき、管理職主導でも教育委員会主導でもない組織を立ち上げました。それで、この組織で何をしようかという話になったときに、釜石市の防災教育手引きや和歌山県の手引きを活用した取り組みがあったのですが、田辺市は「自分たちでないところから作っていこう」となりました。作ることを通じて、先生方の意識が高まるのではないかと考えてやり始めていったんです。作り始めてから約1年半で一応完成しました。まだ整理できていないんですけども、たぶん70~80ぐらいの指導案が出来上がったと思います。最初はまったくないところから始めたので、各グループで「さあ、作ってください」と言っても、金井先生とかに教えていただいて、ある程度は頭で描けるんですけども、自分たちが今まで全く教えたことがない領域ですから、なかなかうまく進まず、途中で「ちょっと気持ちが落ちてるな」という感じもありました。しかし、「いつまでに仕上げよう」という会長の強い気持ちがあったので、最後は先生方が非常によく頑張ってくれたなという気がします。組織を立ち上げた当初、教育委員会主導で会を運営し、会の最初と最後の挨拶も教育委員会の課長がして、「皆さん、お願いしますね」というスタンスでやっていた時と、途中から寺本会長が牽引するようになってからは、先生たちの目の色が全然違うんですね。「上から言われる」、「やらされている」ではなく、やっぱり「自分だけでやっている」というのがすごく大事なんではないかなということを話させていただきます。

もう1つすみません。お昼にお話していただいた新庄愛郷会の真砂会長さんは、85歳なんです。先日、達筆な字で僕に「これでいきます」ということで発表内容を事前に持ってきていただきました。今日はその原稿をほとんど覚えられていました。この話を持っていかせていただいたときに、会長さんから使命感が伝わってきて、あの地域に住まわれている人だなと感じました。「行政が甘いよ」というようなことも言いましたが、もと田辺市の助役さんなんです。

新庄愛郷会は子育てにすごくプライドを持っている地域でありまして、片田先生に質問に対して、「助成させていただいております」とさらっと言われましたけど、実は今、新庄小学校を新しく建てるのですが、愛郷会から2億円寄付していただいたんです。新庄中学校の素晴らしさ、新庄小学校の素晴らしさがあるのですが、そのバックにある地域の力が違うかなと思います。



『地域との連携』について、先ほど先生方も言われていましたが、田辺市の一つ目の課題も町内会の参加率の低さなんです。平均したら50%強です。ですから、何をしても形にはなるんですけども、参加率が非常に低いというのがあります。二つ目に、地域の方々が学校へ依存しているというのがあります。3.11があったときも、避難してきた方々が「お腹が空いたよ。次は何くれるんだ？」と市の防災の方に言っていたそうです。それから、先日、ある町内会の人から防災の課長に訴えがあったのは、「自分の地域は子どもがいない。子どもがいる地域は子どもとともに考える防災ができるんだけど、子どもがいないから自分の地域ではできない。だから、学校からもっと積極的にアプローチして欲しいんだ」と言われたそうです。これは、どこまでが学校でできるのかが、非常に難しいと思うんですね。あと、校区に町内会を8つも9つも抱えている学校もあるんです。そうすると、ここの町内会と連携したら、ここの町内会が怒ってくる。だから、組織が作れていないんです。それが非常に辛いと考えます。改善策として、本庁の防災まちづくり課と話をしているのは、学校に「地域と連携してくださいね」とお願いしても、これは学校も苦しいと思うんです。地域によっているんなところありますから。ですから、行政として、ある程度枠組みをつくってしまっ、「こうゆう組織でやりませんか？」ということ、防災から地域へ、教育委員会から学校へと両方のアプローチでやっていくことはできないかなと考えています。できたら来年の4月から、そういう組織が出来ないかなと話をしています。

『防災教育の効果』ですけども、やはり継続していくことが前提にあるんだ、ということは押さえました。他者への思いやりとか、気持ちを育てるにはすごく良い心の教育だなということと、当たり前のことですけども、最終的には「主体的に行動する」、これも育成しなければいけないということです。『指導力』としては、本気にならないといけない、上辺だけで言うてはいけないよ、学校と地域と親が本気になるかどうかで変わってくるなというような話しをしました。あと、『組織』として、今、どの自治体もそうだと思うのですが、学校は50代と20代の先生が多くて、中間が少ないという状況にあります。若い先生方は、きちっと教えてあげないと、「学校は地域の中にある」という意識が非常に薄いと思うんです。「自分と子どもとの関係だけで学校が動いている」というような意識を持っているような気がします。なの

で、管理職がもっとぐいぐい引っ張って行くべきだという意見と、やっぱり教員同士の横のつながりが大事じゃないかなという話をしました。あとは、『地域とのつながり』です。ここが一番大事かなという話をしました。あと、具体的な防災教育でしたら、やっぱりマップ作りをしている学校が多かったです。防災マップは作ることが目的ではなくて、「作ることによって子供たちにいろんな力がつくよ」と片田先生もよく言われていると思います。あと、学校から地域へ発信することであるとか、昨日、田辺第一小学校の左海さんの授業にあったように、リアリティをどう持たせるか。またどこまで持たせるかというのも問題だと思うんですけども、そのあたりも大事かなという話をしました。



c)小学校グループ3

発表者 松本 孝嗣 (釜石市教育委員会学校教育課 指導主事)

松本 まず、今の釜石市の現状についてお話しさせていただきます。子どもたちの状況ですが、まだまだ震災前の教育の状況にはまだまだ遠く及ばない状況です。特に、校舎が被災した鶴住居小学校、釜石市東中学校、そして唐丹小学校、唐丹中学校につきましては、校舎建築が始まっているとはいえ、学区外からスクールバスを使って登校している子供が、いまだ 80%程度います。あと仮設住宅に住んでいる子どもたちも、まだまだたくさんいるという状況です。また、震災によって家族の状況が変わって、就学援助を受けている子どもが 30~40%となっております。そして、震災の影響とみられる不登校の児童生徒の割合についてもまだまだ高い状況にございまして、今、県のほうで「心のサポート授業」を行っています。その中で、心と体の健康観察を震災後すぐに始めたんですが、きちんとしたサポートが必要だという子どもの割合もかなりまだ高いような状況にあります。ただ、その震災当時、就学していた子供については、学校教育でかなり助けられた部分が多いです。一方で、震災当時、未就学だった子供たちは、家にいてかなり不安な気持ちを背負ったまま、まだトラウマがなかなか抜けない状況にあります。以上、今の釜石市の状況を伝えさせていただきました。

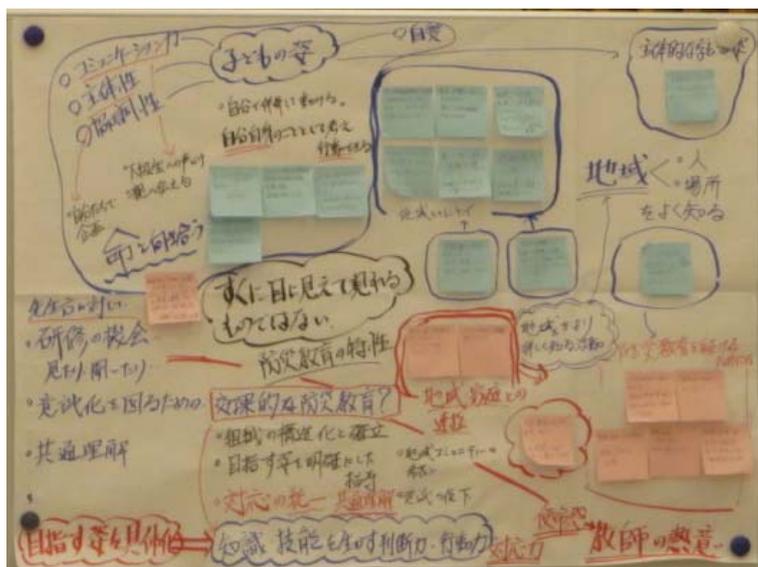


松本 孝嗣先生

テーマ 1、コミュニケーション力ということで、「効果的な防災教育と言った場合、何ををもって効果とするのか」ということなのですが、まず防災教育の位置付けとして、教育の最終目標は“人づくり”なので、その人づくりを支える 1つのパーツだろうと捉えてみました。そして、防災教育の効果について、『すぐ目に見えて現れるものではない』という特性を考えたときに、「どのように何ををもって効果とするのか」というのが、見えにくいだろうということが共通の話題として出されました。「効果がぱっと見られないからやる意味がない」ではなくて、子どもの姿から、きちんと効果とすべきであろうという結論です。防災教育を通して、子どもたちにどんな力をつけることができるのか、という視点で考えたときに、“コミュニケーション力”、“主体性”、“強調性”、“自覚”の四つが出てきました。先生方が目指す子どもの姿をきちんと明確にして、それに照らし合わせて子どもたちを見取ったときに、効果は確認できるのではないかと思います。例えば、下級生への声がけです。逃げるときに下級生に声がけする。あと学んだことをきちんと親に伝える。あと、今日の新庄中学校の生徒のように、自分たちできちんと企画して、それを進めることができる。このような子供の姿をきちんと見取る必要があるだろうという意見も出ました。

そして次、『教員に求められる指導力』とはどのようなものかについてです。大事なのは、教師の『熱意』だろうということです。「一部の先生任せになっている」「やる気の持続がなかなか難しい」「意識の低さ」など、我々指導者の今後の課題がたくさん出されました。その課題に対しては、研修の機会をきちんと設けるべきであろう。実際に見たり聞いたりすること。あとは、意識化を図るためになんらかの方策が必要だろう。共通理解も必要であろう。岩手県

は、人事異動が3年ごとに行われます。内陸の先生方が沿岸部に出てきます。そのため、現在、沿岸部の学校に、当時震災を経験された先生方ほとんど今いない状況なので、先生方の意識がバラバラです。私も震災当時、内陸にいたのですが、釜石市に来るまでは、防災教育の重要性については全然分かりませんでした。なので、先生方に対する意識付け、意欲付けというものは欠かすことができないのではないかなと思います。



次に、『効果的な防災教育とは何か』についてです。「防災教育には防災学習と防災指導があって、それをつなぐ道徳がある」という防災教育についてのきちんとした理解があった上で、『知識・技能を活かす判断力・行動力』を高めるような防災教育が、今後いっそう必要であろうという話も出されました。

『地域』についてです。防災教育の目指すものとして3点目に「学校、家庭及び地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献できるようにする」ことが挙げられています。やっぱり地域というのは欠かせない視点の1つではないかなと思います。学校のみで行われているのは、閉ざされた防災教育です。防災教育は開かれたものでなくてはならないという視点から考えると、地域にきちんと広めてあげることが必要です。実際には、避難訓練も含めて防災教育がきちんと行われている地域は正直あまり多くはないんじゃないかなと思います。だからこそ、学校が発信源となって、地域を巻き込んで地域一体となった防災教育を進める必要があるだろうという意見も出されました。ただ、その地域との連携についても、さまざまな問題点もごさいます。地域コミュニティの低下だったり、地域のみなさんの意識の低下というものもあります。その中で、学校で行ったものをどのように家庭とか地域にかえしていくのかということ、授業参観で防災の授業を行ったり、学校でやったことを家庭へ伝えるという積極的な活動が、今後一層求められるのではないかなという意見も出されました。

最後に、「釜石の奇跡」と呼ばれているのですが、奇跡ではないんです。あれは、ずっと片田先生にご指導いただいた訓練の通りに、子どもたちが行動したということでの釜石市の姿と捉えていただければと思います。釜石市できちんとした防災教育が行われていなければ、失われた命はもっと多かつたのではないかと私は思っております。震災後、防災教育を核として「命の教育」を進めています。「命の教育」と名前を変えて3年目になります。市内14校の全てが命の教育のねらいに沿って、実践を続けているところです。その結果を、命の教育の実践事例集としてこのように1つの冊子にまとめてあります。今後も、子供たちを守るため、そして地域を守るため、命の教育を積極的に推進してまいりたいと思っております。

d)中学校グループ1

発表者 宮川 昭二 (黒潮町立大方中学校 主幹教諭)

宮川 黒潮町でも、片田先生に来て頂いて、小学校・中学校の防災主任が集まって、作業部会を開催しています。黒潮町は、年間10時間程度の防災学習と6回以上の避難訓練を各校で実施しています。



宮川 昭二先生

では、テーマ1、『防災教育のためのコミュニケーション能力』についてです。効果的な防災教育のためには、1年から3年まで系統的な防災学習をつくるのが大事じゃないかと思います。地域によ

ても違うのですが、ある程度大まかな筋を作っていかなければいけないだろうと。細かいところじゃなくて、大まかなところということで、話も出ていました。そして、それを普段の生活で行動にいかしたり、自分の命を自分で守るために、課題解決学習を通じて、そういう力を身につけていくのが大事じゃないかなという意見が出てきました。

『普段の生活で行動』『自分の命は自分で守る』については、津波被害、雪の被害、土砂災害など、学校によっても、地域によっても違うのですが、最終的に、どういう時にどういうふうに行動するのかという危機管理能力を身につけさせることが大事になる。これは、課題を自分たちで見つけて、その課題をどうやって克服していくかを考える学習でもあるんじゃないかなということです。片田先生が言われているように、基礎となる学習として防災学習を位置づけることができるんじゃないかという意見も出ていました。その中で、地域に出て行って、地域を理解することで、地域愛がうまれる。さらに、地域の方々に理解して頂いて、認められる、褒められることを通じて、自己肯定感が向上して行って、子どもたちも良い育ち方ができるという形がでてきました。『生徒の成長』として、どういう姿を求めるかについては、先ほども出ていましたが、短期的に数字で表れて評価できるというものではなく、長期的に評価する必要があるんじゃないだろうか。長期的ということでは、例えば個人が将来どう生きていくとか、地域のことを考えるっていうことで、先ほどから言っているように、それぞれの課題を自分の力で解決させる能力を身につけさせることが、生徒の成長じゃないかなと思います。だから、例えば、地域を出たとしても、東京で生活しても、大阪で生活しても、そこで震災が起こったときにも応用して使えるんじゃないかなと。

『教員に求められる指導力』についてです。そういう子どもたちを育てていくためには、子どもにどうなって欲しいという“理念”というか“目標”を、それぞれの教師、そして学校が持つことが必要じゃないかと。それを動かすのが、“熱意”なんじゃないかと思います。“熱意”があったら、行動力、想像力があるので、新しい物を作っていくとか、繋ぐコーディネート力が出てくるんじゃないかな。先ほどから出ているように中堅教員は少ないです。50代が多いので、そういう先生方が後に繋げていくということで。ただ一番大事なのは、スキルは後からついてくるので、「自分からやってみる」っていうことが必要じゃないかなと思います。「どんどんやってみよう」ということを若い先生に伝えていく。それでも、なかなかできないようだったら、ベテランの先生方が「やっていこう」という姿勢を学校全体が見つけていく。「見せて

いく」ことが大事かなということが出ていました。そこには教員も楽しむという姿勢が大事かなと。防災教育だから楽しんでやろうという姿勢が大事かなという風に出ていました。

テーマ2の『地域と連携した防災教育とその継続』についてです。子どもを、地域に出していく、出て行かせるということがよく出ていましたが、そのなかでも、学校と地域の両方にメリットがあるように、仕組みでいく必要があるかなと思います。しかし、その中で、連携の障壁となる抵抗勢力がある。「こんなことやりたいんです」「新しいことやりたいんです」と言っても、「前例がない」と言われて、そこで止まってしまう。そこを突破していく力が必要かな。突破していくためには、説明能力や説明責任もいるでしょうし、先ほど言ったように、「両方にメリ

ットがありますよ」ということを納得してもらうことが必要かなっていうふうに出ています。

そして、『継続のための仕組み』としては、“繋いでいく”というシステム作り。学校独自、地域独自じゃなくて、両方でやっていくためには、いろんな所を繋いでいかなければならない。公民館や老人会、町内会などから繋いでいくためのコーディネート役作りを担ってもらうシステムを作っていくのはどうかと。そういうコーディネート役、それから繋ぎ役なんかを増やしていったらいいんじゃないかなっていうふうに出ています。そして、その中で、マスコミを利用する、マスコミでいろんなことを情報発信しようということ。岩手に行ったときに、自分は新聞の写真に載ってましたので、それを買って、持って帰ったら、「宮川、サボってないな」と校長先生に分かってもらったので、すごく説得力があります。あとは、続けていくとマンネリ感がでてきますので、新しい物を取り組んでいくという発想力が必要です。そして、「やってよかったね」という達成感が絶対必要かなっていうふうに出ています。

そういうことで共通のキーワードとして、防災だけど、「楽しくワクワク」というのは絶対必要かなと。黒潮町からは畦地次長ときていますが、3回とも僕は楽しくワクワクして来ます。だから、年末の黒潮町もそういうかたちで、皆さん、嫌々来ないで、ぜひ楽しくワクワク来てください。



e)中学校グループ2

発表者 谷本 明 (田辺市立新庄中学校)

谷本 午前中は新庄中学校への訪問、ありがとうございます。まだ途中段階で、仕上がっていないグループばかりだったと思うんですけど、片田先生に話してもらったり、全国の先生方に来てもらうことで、あの子たちの励みに、次の内発的動機付けに、やる気に繋がっていくと思います。なので、こちらとしても、皆さんに来て頂いて有難かったです。

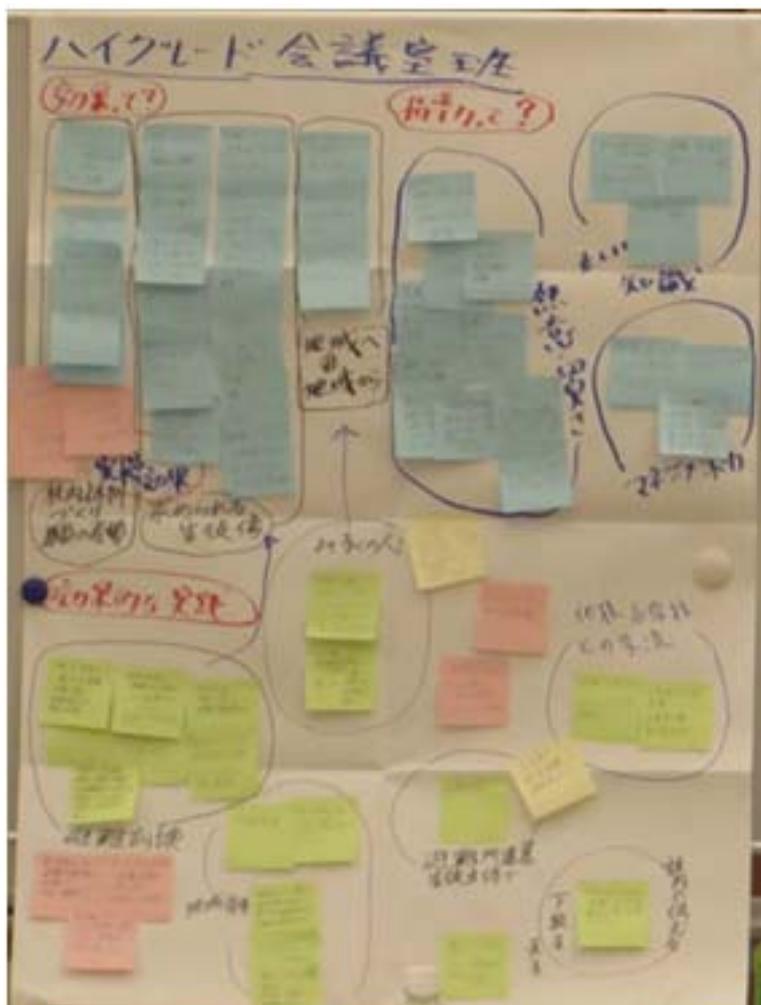


谷本 明先生

まず、防災教育の『効果』についてです。効果を上げるために、学校ではマニュアル化をしたりだとか、ゴールを設定して課題を決めたりだとか、そういったことが必要になるんじゃないかなということが出てきました。そして、期待される効果については、まずは「自分の命を守れる」ということが一番になってくると思います。あとは、「他者を助けてあげられる」といった共助の部分ですね。そういった効果があると思います。それ以外の部分で、生徒一人ひとりの成長とか、コミュニケーション能力だとか、正しい判断力とか、素早い行動力とか、生徒の防災以外の部分での効果というのも期待できるという意見がたくさん挙がってきています。そして、「地域から認められている」とか、学校からだけでなく地域と連携し、繋がりができるという効果も期待できるんじゃないかなという意見が出てきました。次に、その効果を出すための『教師の指導力』についてです。指導力の部分が、大きく3つに分けられるかなということでした。まずは教師の方も、津波や震災に対する“正しい知識”を持つことがまず大事じゃないかなという意見がでてきました。そして、“マネジメント力”です。いろいろな関係機関と連携を取ったり、学校の中で組織を運営していくときのマネジメント力というのにも必要になってくるんじゃないかなという意見がでました。そして、一番大事なところですけども、“熱意・切実さ”です。教師の気持ちがないと子どもたちに入っていくんじゃないかという意見がたくさん出ました。“正しい知識”とか“熱意”とか、こういった部分は全員、学校全体の教師が持つべきもので、“マネジメント力”は、リーダー的な防災の担当の教員が持つ必要があるかなという意見も出ました。

そして、『具体的な授業案』についてです。例えば、生徒全員に防災袋を持ってこさせて、それを学校で保管しているという学校もありました。そして、その防災袋をどこに保管するかを議論した結果、避難する場所に保管するのが一番いいだろうということで、そこに常に置いておく。それを定期的に中身を確認したり、もっといい物ないかとかいう議論をすることによって、さらに防災の意識も高まるという効果も期待できるという意見がありました。あとは、アルファ米ですかね。企業から賞味期限に近い物を頂いて、それを全員で食べるというのを行ったりとか。あとは一番多かったのは、避難訓練ですね。地域と合同の避難訓練をしているという所はたくさんありました。そして、地域と合同、ただ単純に一緒にするだけでなく、より高いレベルというか、ただやるだけじゃなくて、より多くの地域の方を呼べる避難訓練を目指しているという、意識の高い学校もありました。地域と一緒に避難訓練を行って、その後さらに発表会のようなものをしているという学校もありました。

テーマ 2、『地域と連携した防災教育』についてです。まず、具体的にどこと連携を取るかというのは、地域の小学校とか、公民館とか、あと消防とか、という意見が出ていました。僕自身が参考になったのは、海上保安庁と連携しているという学校もいくつかあったことです。ある学校は、船を出してもらって、船に乗って、生徒が沿岸部から地域を見るという事をしてもらっていました。またヘリコプターを出してもらった学校もありました。こちらから働きかけていくと、かなり協力してくれるということを知りましたので、是非またやってみようかなと思いました。あとは東北の学校とかですと、それ以外にNPOの団体とかとも連携をとっているという学校がありま



した。そして、最後、地域と連携をとる際に障壁となる部分です。例えばスクールバスを使っている学校で、スクールバスの登下校中に地震が起こった場合を想定して、避難経路を決めて、訓練したいという意見が出たそうなんですけども、民間のバス会社と町のバス会社の両方を使っているため、なかなかその意見が受け入れられていないというお話がありました。一方で、地域によっては、きちっと経路も決まって、バスでそういう訓練をしている地域もあるという意見もありました。そして、避難訓練についても、地域によっては、なかなか行政が協力してくれない。行政にお願いをしても、一斉放送というのは使えない状況だったりして、地域との合同避難訓練が難しいといったような学校もありました。いろんな取り組みをしているけど、それがまとまっていないので、そのデータ整理をする必要があるという意見もありました。『継続』するためにですけども、複数の教員で担当するのが大切じゃないかなという意見が出ました。岩手県ですと、教員が何年かごとに異動してしまうので、内陸の人と沿岸部の人との意識の差がかなり大きいという意見も出てきました。

(3) 討論会



金井 各グループからの発表を踏まえて、改めて、「防災教育のためのコミュニケーション力」と「地域と連携した防災教育とその継続」という二つのテーマについて、皆さんとディスカッションさせていただきます。

奈良 午前中のグループディスカッションを拝見しているの感想を述べたいと思います。三つあります。まず一つ目は、先生方はワークショップがお上手だなということです。こうやってテーマが出されたときに、たちまちご自分のものとされて当事者性をもって本当にすごい瞬発力と集中力で取り掛かるということ、たちどころにできるということは、なかなかないので素直にすごいなと思いました。

それから二つ目ですが、非常に根本的で本質的なところをキーワードとして出したりしていたときに気がつきました。『命の教育』といいますが、防災教育っていうのは人間教育なんだということを、皆さんが言葉は変わるんですけど、いろんなキーワードでもってついていらっしやることに気がつきました。例えば、繰り返しますが、「防災教育は人間教育である」とか、「防災教育は人づくりである」、「逃げろ逃げろ教育ではダメだ」、「防災教育のための防災教育ではダメだ」という表現をされている方もおられました。釜石市では『いのちの教育』ということで、立派な冊子もつくってくださっているということです。もちろんうまく防災教育をするテクニックは重要なんですけど、大元にある如何に根本、本質を教えられる教育にするか、ということを皆さんはやっておられるんだということに気がきました。考えてみれば、例えば、ある子が3年生なら3年生で教えられるときっていうのは限られていて、でもその子っていうのはこれから社会に出てずっと生きていきますし、学校を出て家に戻ったら生活があります。ハザードはその子その子で違って、しかもマルチハザードなわけですよね。一個のテクニックで「こういうときにはこうなさいね」と教えてもダメ。先生方はよくわかってらっしゃって、その子が正答のない問題に一生懸命悩んで考えることで、今後いろんな新しいハザードに出くわしたとしても、自分で考える力をつけていく。そういうことを皆さんされているんだな。それを今日もグループディスカッションでおっしゃっていました。汎用性のある防災教育、姿勢の防災教育ですよ。それについて議論されていたということであらためて知ったということが一つです。本質について議論されていたということです。

それから三つ目に皆さん議論を聞いていて、私が「そうか」と思ったことは、皆さん防災教育をおこなうにあたってのコミュニケーションの相手というものをちゃんといろいろ考えてらっしゃるといふこともわかりました。つまり防災教育のための防災教育だったらリスクコミュニケーションの相手というのは子どもたちだけなんですよね。でも、皆さん、もちろん子どもたちを中心にコミュニケーション



奈良 由美子先生

の相手を考えていらっしゃるわけなんですけれど、いろいろ議論聞いていますと、大人もちゃんと考えてらっしゃる。同僚も考えているし、反対勢力を説得するかのような、如何にやる気のない人にもやる気を出してもらえるようにするかとか、如何にしてお金とってくるんだとか、マスコミを活用するかとかですね、大人もコミュニケーションの相手としてちゃんと想定されていて、如何にうまくそれをおこなって巻き込んでいっていかけていふことを考えてらっしゃるといふこともよくわかりました。そして、さらに皆さんの発表を聞いていると、子ども相手のコミュニケーションと大人を相手にするコミュニケーションって共通点が多いなと思いました。例えば、正しい知識をこちらがもっているということを示すとか、こちらにはすごく熱意があるんじゃないだということをおわかってもらうとか、あなたのために、町のために、子どもためにと思っているんだという姿勢を相手に分かってもらうとか。これって子ども相手でも大人相手でも共通です。子どもに自己効力感をもたせるというコミュニケーションは大事。でも大人にだって自己肯定感を持ってもらうことは大事です。一緒に防災教育の仲間になってもらうためには、そういうことを皆さんは実践の中で感じ取られてキーワードとしてだしていらしたなと感じました。私の方からは三つ感じたことをお伝えさせていただきました。

三つ目に申し上げたコミュニケーションの相手について、皆さんの議論というのはリスクコミュニケーション論の中で正しいとされています。リスクコミュニケーションは信頼を形成すること、信頼をもってリスクコミュニケーションをおこなうことが重要というのは定石のように言われています。このときにリスクコミュニケーションにおいて信頼を形成するときのモデルとして、信頼形成モデルというのがあります。このモデルは二つのことを相手が認識してくれた場合に相手は自分を信頼してくれるというものです。そのうちの一つが、相手が「この人は専門的な知識があるな」ということを相手が認識することです。子どもたちが「先生、正しいことをちゃんと言ってくださっているな」、「先生は先生としてキャリアもあるし、防災教育の経験もあるし、正しいことを言ってらっしゃるな」と子どもたちあるいは教育委員会の方、住民の皆さんが認識するということがまず大事です。もう一つの要素ということが姿勢の好ましさを相手が認識することです。「A先生は町のために言ってくださっているな」とか、「A先生は僕たちのために言ってくれてるな」というふうに、A先生の熱意であるとか、正直さだとか、公正であるとか、嘘をつかないとか一生懸命コミットしてくれるとかっていふことを相手が認識することによって相手は先生を信頼するようになるんです。こういった学問分野でいわれているようなモデルを先生方は見事にクリアをされていて、それに基づいて実践されているんだなということも感じました。

片田 いまの奈良先生のお話を受けて、散々話してきたこととは、別な観点から思ったことを少し述べさせていただきます。先生方が先ほどの話題の中で一つの例として、「地域コミュニティとうまくどうやったらいいのか」、「地域をどう巻き込んだらいいのか」、「なかなかコミュニティの人間関係が希薄になっていて、とりつくしまがない」ということなんですけれど、そういうことすべて共通して最近思っていることがあります。例えば、コミュニティが地域で崩壊していつている。なぜか？それは簡単に言えば、コミュニティを維持する動機づけがないからです。「面倒くさい、だから戸建てよりもマンションの方がいい」みたいな話になったり、「壁の向こうは誰々が住むぞ」ということを批判的に言われるんだけど、結構気楽でいいからそうしてしまうわけです。コミュニティがコミュニティとして維持されないのは、コミュニティを維持する動機づけがないからです。なぜないのかということなんですけれど、昨年、高知で全国都市問題会議という会議があつて、そこで話をしたのですが、昔はコミュニティを維持せざるを得なかったんです。例えば、「火事と喧嘩は江戸の花」と言われていた。あれだけ大きい町だから一、二件の火事は起こるわけです。そうすると、火が出たら一刻も早くみんなで消さない限り、みんなでやられちゃうっていう状況ですから、コミュニティもへつたくれもないですよ。火がでた」と言ったらとにかく消す。日頃からの関係が当然必要です。昔村八分という言葉がありますけれど、この八分の残り二分は何かつていうと葬式と火事です。どんなに人間関係が疎遠でも火事と葬式だけ別というわけです。江戸では火事という災害にみんなで向かい合わなければならず、その必然性がコミュニティを維持する力になっていた。「みんなのためにみんなで守る」ことがコミュニティ維持の動機づけだったわけです。いま、コミュニティが崩壊していったのはなぜかつていうと、防災が大きな整備をやり過ぎたからです。つまり、みんな役所任せになったからです。堤防をつくってもらって、危ないときには避難勧告で教えてもらって、子どもたちは学校で防災教育をしてもらって、避難所に行ったら、飯はまだかと不満を言えばでてくる。こういう状態です。そうなってくると、荒ぶる自然に対して、みんなで向かい合うというコミュニティ維持の動機づけはなくなり、コミュニティは崩壊するわけです。だから、コミュニティが崩壊していくのが問題だと言つたつてしょうがないんです。

いま僕らは、防災、防災教育というものを推進していく中で、昔のようにみんなで向かい合う必要があるんだという共通認識があります。地域の人にもこの認識をちゃんとわかつていただかない限り、コミュニティ再生はありえないと僕は思うんです。こう考えると、「なぜコミュニティが崩壊しているのか」とか「コミュニティに入ってほしいけど、入ってくれない」とか、これらは課題だつていうんだけど、解決できずにそこで止まってしまつていないですか。だから、発想を変えるべきですよ。前提としてコミュニティは崩壊しているんだと。だけど、防災というもので、「もう一回コミュニティをつくつてくんだ」、「みんなで思いやるような社会をつくつていくんだ」「みんなでその災害に向かい合うようなコミュニティをもう一回つくつていくんだ」というふうに、「コミュニティが崩壊しているんで、それでなかなか地域に入っていくのが難しい」からの逆転の発想ですよ。防災を通じて、僕らが地域を変える」くらいに考えていった方がいいと思うんです。

こう考えていくと、いろんなことが見えてくる部分もあるんです。例えば、防災講演会に来るような人はそもそも意識の高い人で、本当は来ない人に防災をお伝えしたい。でも来ない。なぜ来ないのか。それを僕らは問題だという。市民の防災意識が低いと断じておしまいになつ

てしまうわけですね。でも、それでは何の進歩もないわけです。さっきのコミュニティが希薄化しているからと言って、そこで切ってしまったのと同じで、来ないのはなぜかって考えると来ないなりの理由があるんですよ。その人にとっては、防災は大事だとは思っています。防災も必要だとは思っています。でもその人はうちに寝たきりの婆ちゃんがいる、夕ご飯をその時間帯に食べさせてあげなきゃいけない。その人にとって、防災も大事な問題なんだけれど、もっと大事な問題があって、その人にとっての大事なことをやっている。要するに、ファーストプライオリティーに防災がなっていないだけなんです。でも僕らは防災を進めようと思っていると、来てもらいたいから「防災意識低い」とか批判的に見てしまう。いま僕らはすべきことは、如何にして防災をその人にとってのファーストプライオリティーと認識してもらうかであって、批判してもしょうがないんです。僕らは気づいているんですよ。防災をやることがどれだけ地域を変えられるか。どれだけ子どもたちの健全な育みということに対して効果的なのかと。僕らは気づいているから、声高に言おうとしている。けれど、気づいていない人たち、もしくは先生方のまわりの同僚に、防災教育の必要性を滔々と語るだけではダメなんです。「本当だ、防災教育って本当にいいよね」、「なるほど、わかった」と言って、腑に落ちたときに、その人にとってのファーストプライオリティーになったときに、初めてその行動をとってくれますよね。全部そうだと思うんです。これも一つの例なんですけれど、津波の後、逃げなかった人に「どうして逃げなかったの」と聞くと、すごく不愉快な顔をするんです。その人は逃げなきゃいけないことは百も承知だったんです。「僕は逃げないぞ」と意思決定していたわけじゃないんです。「よし、逃げよう」って意思決定ができずに、結果として、逃げていなかっただけなんです。それを僕らは、逃げていないと「なぜ逃げない」、「防災意識の低いやつだ」と批判する。そんなこと言われたら、「あんたにそんなこと言われる筋合いない」と彼だって不愉快です。コミュニケーションとして、「あなた、逃げなかったね」「どうしてそうやって防災意識低いの？」といきなりこんな言われ方したら、いっぺんにコミュニケーションエラーを起こしてしまうわけです。「本当は逃げなきゃいけないとわかっている」「ただそのときに逃げようっていう意思決定をしなかっただけ」という相手の気持ちに立って、「そうだよね。わかる。あのときに、よし、逃げようという気持ちになかなかないよね」という理解を示すことから、コミュニケーションを設計していくと、「でもそれじゃまずいよね」という中から心を動かすというところまで導いていけますよね。

ここまで議論してきたことも同様だと思うんです。例えば、「先生方が防災教育を広めるために同僚の先生にはどうするか」、「地域に広げるために地域コミュニティに対して、僕らの知っている“良かれこと”はどうお伝えしていけばいいのか」という議論すると、「同僚がやる気なくて悪い」、「コミュニティが悪い」、「親が無責任だ」などと、これまではコミュニケーションのエラーを起こしている要因を、常に相手方に求めようとしてきた。これをやっている限りは何も変わらないんです。「そうだよね」って言ってやらなきゃ、その人なりに理由があるんです。相手の視点からみるときに、何が見えてくるのかということがコミュニケーションの根本的で最も重要なことです。だから子どもたちとのコミュニケーションでも、子どもたちの側から見て、「そうだ、逃げなきゃいけない」という思いを子どもたちにどうつくってやるのかを考える。子どもたちにとって、お母さんとの関わりの中でのものを語ってやることで、「逃げなきゃ」って思うのではないか。「きみの命はきみだけの命じゃなくて、お母さんはきみの

命をととても大事に思っている」、「だからきみが逃げないとお母さんだって逃げないよね」と問いかけることは、子どもたちの価値観側でものを見たときに、そういうコミュニケーションが頭に浮かんでくるわけですね。こういうまさに「社会を変えていこう」、「人を変えていこう」と問題は、全部コミュニケーションの問題なんです。そして、そうしない人にはそうしないその人なりの理由がある。そうしてる人はそうしてるなりにその人なりの理由がある。そのため常に相手の行動や思いに対して“是”と言うところからスタートしないと、コミュニケーションは必ず失敗するという認識をもっています。だから、相手との交流を得ていくためには、「そうだよね」と常に YES の連続で相手の心をスムーズに誘導して行ってやれるようなコミュニケーションを設計していただくということが、すごく重要だと思っています。

奈良 理論的な話ということで、もう一つ付け加えさせてください。今の片田先生の話を受けまして、また私の話の補足になるんですけど、先ほどリスクコミュニケーションと信頼形成と二つの要件のお話をしました。一つは、相手が専門性を認識してくれるということ、もう一つが姿勢の好ましさを相手が認識してくれるということです。いくら自分が専門性を持っていても、相手に伝わらないとダメです。いくら自分が熱意を持っていてもそれが相手にわかってもらわないとダメです。両方がまず相手に認識してもらって初めてうまくいく可能性がでてきます。両方を認識してもらっても、リスクコミュニケーションは失敗をよくするんです。それで、いろいろな経験の結果、もう一つ重要なことがわかっています。価値の類似性です。価値観ということです。何を大事にしているかということです。相手が「A先生は私と同じものを大事にしてくれている先生だな」と認識したときに、相手はA先生を信頼するということです。自分と相手って所詮違う人間ですから、やっぱり大事にしているものが微妙に違うこともありうる。でも、「こういうところで同じものを大事に思っているよね」というところを見つける努力、時間がかかるけれどそうするしかない。それに尽きると思います。それがたぶん地域への愛であったり、家族を大事に思う気持ちであったりとなるのではないのでしょうか。

そして価値の類似性が高いなと思うのは、リアリティを共有している人に起きやすいんです。社会現実を共有している相手に対しては「この人って自分と同じものを大事にしてくれているな」と感じやすいんです。だからやっぱり同じ地域に住んでいる人が言うと説得力があるし、同じように被災をした人が言うとやっぱり心が動くんです。同じように子どもを愛する親が言うと心が動くという具合です。

金井 話題をしぼって、話を進めたいと思います。先ほど奈良先生にもお話いただいたように、「防災教育はすごく狭い範囲で防災のことだけを教えるものじゃない」というのは、十分にご理解いただいている。では、「そういう単純に教えなきゃいけないことを淡々と教えるという教育じゃない」、「自ら判断し行動できる」、「主体性を高める」という教育を行う場合に、何が重要になるかということについて、先ほどのグループディスカッションでほぼすべての班で言っていたのが“熱意”でした。そこで、今後、防災教育と一緒にしっかりやってくれるお仲間を増やすために、ここにいる皆さんの“熱意”をどうやって伝播していけばいいのか、というのは気になりました。その方法として、皆さんは、研修会をやったり、被災地に行って話を聞いたりすることをあげていました。

広い意味での防災教育をうまくことするために、“熱意”が重要だとするならば、それはどうやったら他の人に伝えられますかね。そもそも皆さんはなんで火がついたんでしょう。例え

ば、片田先生の話を聞いて、熱がついたって方もいらっしゃるかもしれないんですけど、でもその熱意のある片田先生の話のどこにひかれて、みなさん熱を持ったのかなど。熱を持った理由がわかれば、他の人にも同じことをしていけば伝えられるのではないのでしょうか。

林 僕は片田先生のことを知る前、阪神淡路大震災が大きかったです。阪神淡路大震災が起こったときには、私は教員をしていました。ちょうど弟が神戸の大学へ行っていて、あのときは和歌山県の私の住んでいるところでもベッドがドカンというくらい揺れがありました。テレビをつけたんですけど、そんなに大きな地震だったとはわかりませんでした。学校でテレビをつけたら、神戸の町がすごいことになっているというので、弟の安否確認をしたのですが、生きているということでした。そのあと、しばらくして落ち着いてからボランティアで神戸へ行ってきました。長田町へ行ったんですけど、悲惨な現状を見る経験をしました。阪神淡路大震災以降は、必ず自分のクラスでは、地震に対しての授業、ずっと防災はやっていました。子どもたちには絶対に話をしていました。紀伊半島大水害のときにも、同級生は一家5人が流されて全員死んでます。先輩の息子、中学生の野球少年でしたけれど、その子もおじいちゃん、おばあちゃんをかばって流されて死んでいます。というような体験もあるのかもしれませんが、具体的にそれがモチベーションなのかどうかわかりません。でも、今日のグループディスカッションでもあったんですけど、学校はすごく忙しくて、僕らもいつも防災のこと考えているわけじゃないです。普段は忙しい仕事に忙殺されるんですけど、こういう場に出てきて、釜石に行かせてもらったりとか、話や実践を聞いたりっていうのはすごくモチベーションがあがります。話を聞きながら、うちでもうちよってやっておかないといけないなと思って帰ります。段々薄れてくるんですけど、定期的にこういう会に出させてもらうっていうのは熱意や自分のモチベーションを高めるためには大切だなと思います。

金井 個人的な大きな経験があるからというのも一つの理由なんだなということもはっきりわかるお話でした。稲垣先生はどうですか？

稲垣 大学時代に岡山にいたんですけど、友達が鳥取にいまして、そこで地震がありました。実家へお手伝いしに行ったんですけど、半壊しているようなところがありました。次に広島の呉の友達のところへ遊びに行った際には、呉市で揺れて、いろいろお手伝いした経験もありました。教員になったときに、地震に対して怖さっていうのがありました。しかし、3.11のときに、うちの小学校では、まわりから「津波注意報が出ている」という放送が聞こえました。どうしたもんかなとなったときに、子どもたちを集めて集団下校させました。あとあと、考えたら間違った判断をしたっていうのが自分の中で思うところがありました。思うところがあったのだけれど、教師になって数年という段階でしたので、どうしていったらいいかというのがわから



林 宣行先生



稲垣 克明先生

ないままだったんですけど、熱意のある先輩から防災の担当を引き継ぐことになって、頑張ろうかなと思いました。

金井

ここにいらっしゃる皆さんは、熱意を伝えて頂く側になんだと思います。なので、もし熱意が大事だと言うのであれば、自分の中に溜め込まないで、振りまいていただき、模範になっていただきたいなと思います。最初にこの話をしたかのは、昨日も話に出したんですけど、徳島の津田中学校にお邪魔して色々お話聞いたときに、あそこも11年間、ずっと防災教育を総合学習の時間を使ってやってるんですね。でも、よく話を聞いたら、ぼうさい甲子園の常連校の津田中学校でも、担当者二人でずっとまわしてるんです。最初に立ち上げた小西先生というベテランの先生と、もう一人は、その立ち上げのときに一緒にいた佐藤先生という中堅の先生です。この二人で始めたのですが、佐藤先生が途中で異動してしまって、その後は小西先生が一人でずっと続けていたそうです。で、10年もいるので、そろそろ異動というタイミングで、佐藤先生が戻ってきて、そのまま佐藤先生が引き継いで、今度は小西先生は異動。現在は佐藤先生が一人で続けているそうです。津田中学校を訪問して、防災の話を聞きに行ったら、二人ともすごい喜んだんですよ。なんで、こんなに喜んでいっぱい話してくれるのかなと思ったら、職員室で防災の話をする相手はいないし、ほとんどその機会もないんだそうです。こういう状況を見ると、「熱意があって、一生懸命一人で動いちゃう人」にとどまらないで、その熱意で周りを巻き込むところまで、上手いことやってもらいたいです。同僚の先生の熱意を高めるようなこともしないと、どんどん進まないんじゃないかなと、皆さんのお話を聞いて思いました。

次に、地域との連携についてお話しさせてください。先ほど連携先について、片田先生の方から町内会とか自主防とかっていうのは、連携する先としては一番やりやすいけど、そこがしっかりしてない地域が増えてきているから、それを前提にやっていきましょうという話をいただきました。まさにその通りの地域が世の中にいっぱいあるんだろうなと思います。でも、そうは言っても、今学校の先生が本当に子供のことを思って、地域のことを思って、「悪いんだけど協力してくれませんか？」と言えば、無碍に断る組織ばかりじゃないと思うんですよ。私の少ない経験ですけど、少なくとも、消防と警察からは断られたことがないです。地域の活動でも、学校の取り組みでも、何かやるときに「お手伝いしてください」と言ったら、必ず地域の交番のおまわりさんが来て話をしてくれたり、警備にまわってくれたりとか、消防署の職員の方が協力してくれました。なので、どこかに必ず何かしらの連携できる素地のある所はあると思うんですね。そうなってくると、「連携が必要だ」じゃなくて、「どう連携先を上手く使うか」っていうことについて、もう一度ご意見いただきたいなと思うんですね。ここまでの議論で、防災教育を通じて、子供たちの自己肯定感を高めて、主体性を高めて、思いやり気持ちをつけて、コミュニケーション能力が高くなる、というような成果が、生徒の姿から見て取れることを認識していただいたと思うんです。であるならば、そういう子供たちの成果を上手く引き出すような、連携の上手い繋がり方どうしたらいいんだろうか。ただ行って、一緒にやってくださいじゃなくて、そこには多分企画力だったり、アイデアだったりが必要になると思うんです。せっかく連携するんなら、上手く使うための知恵というか経験を共有していけたらいいんじゃないかなと思っています。森本先生は、震災以前に釜石東中学校の先生をされていて、イーストレスキューを立ち上げています。あれはやるためにいろんな所をお願いに行って連携してたと思うんですけど、ご経験をご紹介していただけますか。

森本 先ほど、熱意を持ってというお話があったんですが、自分自身、例えば9年間釜石市にいまして、最初5年間ほとんど防災は取り組んでおりませんでした。そんな中で、熱意というか、「やっていかなきゃな」という必要感を持つようになったのは、片田先生の講演を聞いたのと、あとは釜石市の教育委員会の方針でした。そして、「やらなきゃな」と思ったときに、釜石東中学校に異動になりました。



森本 晋也先生

それで、1年目はとにかく地域に出て行って、子供たちと学んだというのが非常に大きかったなと思っています。地域との連携の部分では、自分がいろいろ企画したりして、「こんなことやってみたい」とか、先生方とも相談したのですが、そのとき一番の相談相手になってもらったのが、市の防災担当の方でした。いま振り返って、釜石の取り組みがよかったと思うのは、片田先生が入られて、自分も手引き作りとかいろいろ一緒にやるわけですが、そのときに必ず市の防災担当者の方がいて、「何かあれば、私に声をかけてください」とおっしゃってくださっていたんです。一担当者の私としては、市の防災担当職員との繋がりが核になったなと思います。例えば、それまで活動していたボランティアから防災ボランティアストで切り替えるときも、「こういう団体があります」「こういう方がいます」と紹介してくれました。そして、実際に会いに行くと、いつも別の地域学習でお世話になっている方だったりしました。そうすると、「地域はこの方々を中核に動いているんだ」というのも分かってきます。次の段階では、その方を中心をお願いしてきます。例えば、安否札の活動を大きく広げるときには、さらに核になる方が「ここここは僕が全部面倒みます」とか、フィールドワークをするときには、「この地区の学習については、この方を中心にやりましょう」とか、さらに「こういう方がいるので、ゲストティーチャーを用意はこちらでやります」とか、「こういうフィールドワークを私たちの両石町内会ではやりますよ」とか、「片岸だとどうやってやりますよ」というふうにだんだん連携が広がっていきました。それは防災だけでなく、様々な学校の取り組みに広がっていきました。ここまで学校と地域との関係が繋がっていく仕組みができると、担当者がいなくても、学校の体制と地域の関係作りが継続できていくんだらうなと思いました。片田先生も覚えてらっしゃると思うんですけど、鶴住居公民館で津波避難の家についての会議のときに、地域からいろいろご意見が出ました。学校としても、市としても、津波注意報が発表されたら避難する、という体制をつくっていたんですけど、ある地域の方が「注意報ごときでは逃げられない」と言い出し、空気が悪くなったんですね。そのときに、女性の民生委員さんが手を挙げて、「やっぱり子供たちは地域の宝だよ」と、まさにみんなが共有できる部分を指摘されて、「そのためにはやっぱり地域をあげて協力しようよ」とおっしゃって、そこからまた一気に協力する雰囲気変わったというのが印象に残っています。そのときに、「鶴住居小学校さんだって頑張ってるじゃないですか、釜石東中学校さんも頑張ってるじゃないですか。だから地域をあげて、みんなで防災を協力して取り組んでいきましょうよ。」となりました。まさに連携って、こんなふうにして進んでいくんだな、と実感しました。

片田 子どものことを大事に思わない地域はないんですよね。子どもたちがこんなに頑張ってるんだということを地域の大人が知れば、「嬉しいよね」と思う。この意識の共有は簡単に図れます。

子どもたちが頑張り、子どもたちが地域のことを思い、一生懸命やってくれている姿をですね、快く思わない人はいない。これだけは多分普遍的な事実なんだろうと思うんですね。

で、子どもたちが頑張っている姿を見せることと同時に、一方で、おじいちゃん、おばあちゃんに厳しいことを言ってるわけです。僕は釜石の高齢者大学で、「じいちゃんが津波警報を無視して、死ぬのはじいちゃんの勝手だ」、「でも、じいちゃんが逃げないから、釜石の鶴住居小学校の子どもは逃げないと言った」、「『どうして逃げないの』と聞くと、『だって、僕ん家、じいちゃん逃げないもん』と言った」、「じいちゃんは、背中で孫の命奪おうとしてるんだ」って話をしていました。考えてみてください。「じいちゃんが津波警報を無視して死ぬのは、じいちゃんの勝手だ」と、ここだけ切り取られたら、「片田はじいさんが死ぬのはじいさんの勝手だ」と言い放った」と言われるフレーズになるんですね。でも、それをじいちゃんはしみり聞いて、「うん、そうだ、これはいかん」って思ってくれた。それは、「じいちゃんの大事なものである孫を、僕も守りたいと思っている」と認識してもらえたからです。先ほどの奈良先生の話で言うならば、姿勢に対する好ましさを認識してもらえた。「僕もおじいちゃんの孫のことを大事に思ってる」、「だから、じいちゃん、その行動は駄目なんだ」と言ってる、この姿勢にじいちゃんは同意をしてくれるわけですね。

“子どもたち”というのは、地域をまとめるキーポイントになっているように思います。で、「子どもたちに協力してください」と行くのもいいんですけども、それよりも、子どもたちが地域に出張って行って、じいちゃん、おばあちゃんのことを考える。地域にお願いするんじゃなくて、学校から攻めていく。それに対して、地域のおじいちゃん、おばあちゃんは嬉しくて、「ありがたい」と言ってくれる。また、保育園の子どもたちのことを、中学生が頑張ってくれる。こういう子どもたちの頑張りが見てとれたときに、地域全体が嬉しくて、子どもたちを褒めてやりたくなる。で、家庭や地域からその気持ちが子どもたちに伝わると、子どもたちは嬉しくなって、さらに地域のことを考える、という正のループが回り始めるんですね。で、いまそれがグルグルグルグル回っているのが、小木地区だと思うんですよ。小木地区はどんどん変わっていている。全部子どもたちがポイントになっているように思いますよね。大人たちも、自分たちが中学生の頃、悪さをした覚えがあるから、「中学生なんてあんなもん」ぐらいに思っていたのが、「あの中学生たちがあんなふうに動いてくれるようになった」というのが、大人たちにとっての喜びになって、大人も動き出した。子どもを中心に地域を変えることはできると思うんですね。「協力をお願いする」という論旨でずっと話をしてきましたけど、違うと思うんですね。ちょっとしんどいんですけど、弾み車の最初は子どもたちを外に連れ出す。お願いに行ってから何か始めるよりも、こちらから出張っていった方が早いと思うんですけど、小川先生どうですか。

小川 今、片田先生がおっしゃってくれたことは、昨日、新庄地区の方もおっしゃっていましたが、生徒を出していくと、地域の方が喜んでくれる。それが子どもたちに跳ね返ってくれる。そのきっかけが、たまたま防災だった。小木中学校の場合は、防災教育をしようというよりも、避難訓練に一人でも多く参加してほしいと思っていた。その思いを廣澤先生を中心として、子どもを使って、攻めていったというよりも、仕掛けていった。その反動で、結果として、地域が動くところにまで繋がってきた。あるお寿司屋さんには、こちらから「貼ってくれ」と頼んだ覚えは一切ないのに、生徒が作ったハザードマップが正面に貼ってあるんです。それを嬉しそ

うに話してくれる。そういう光景が見られてくると、片田先生がおっしゃってくれた様に、「なんとかお願いします」ではなくて、「こんなことやってるんですけど、どうでしょう」くらいの感覚で、地域に出て行っているのが、今結果的に好転している大きな要因かなと思います。

廣澤

小木地区の最初のスタートは、あちらには熱い人が無理やり私を引っ張ったというのが一番なんです。その後、子どもたちが、「小木地区から津波の犠牲者を出さないためには、避難訓練をするのがいい」、「なるべくたくさんの人を避難訓練に参加させたい」と言い出しました。「じゃあ、どうしていけばいいか」ということで、1年目やりました。参加者は少ないです。「じゃあ、どうしていきますか」と子どもたちが考えたときに、街の中を見ると、お年寄りの人たちと保育園の人たちばかり。ちっちゃい街ですから、大人の人たち、高校生は他の地域に働きに行っています。お昼に外を見てみると、お年寄りが、寂しそうな感じでグランドゴルフをしています。そこで、そこに中学生が「グランドゴルフ一緒にさせてもらえませんか？」って行くんです。そして、一緒に楽しくグランドゴルフをやった後に「避難訓練参加してくれましたか？」って聞くんです。そしたら、「いや、俺は参加せんかったわ」って言われるんです。そしたら、子どもたちが「じゃあ今年一緒に参加してくださいね」って言うんです。防災活動なんですけど、楽しんでその後で一言言うんです。保育園の訪問も、結構どこの学校でもしてると思うんですけど、訪問するときに、防災に関係するような、踊りを作っていって、一緒に踊るんですね。保育園の人たちは皆で避難訓練に参加してくれるんですけど、園児に「お父さんとかお母さんとか、参加してくれたかな？」と聞いたら、「ううん」って言いますよね。お父さんとかお母さんとか来てない人も多いんです。「じゃあ、今度するときはお父さんとお母さんも連れてきてくれるかな？」って言ったら、皆「わー」ってなる。今自分たちの地域の中でどんなことをしたら、地域の人たちが喜んでくれるのかを考えて行動する。その結果、中学生が行って喜んでくれると、今度は地域の人たちが「中学生のために」って気持ちを持ってくれるというのをすごく実感しています。地域のことを題材にした劇を文化祭に作りました。そうすると見たことないようなお年寄りの人たちがたくさんきてくれるんですよ。台本は、詳しくそんな地域の人をお願いして、協力してもらって、一緒に作りました。それから衣装も地域の人たちが準備してくれて、道具も「こんなあるよ」と言って準備してくれる。それで新しいお年寄りと仲良くなる。すると、またその人たちも避難訓練に参加して下さる。避難訓練に参加して下さると、その中で当然いろんな活動していますので、今までに訓練に参加して下さらなかった、防災についてはあんまりっていう人たちも、その中で一緒に地域ひとつになって活動ができる。このように1年1年、少しずつどうすれば参加してもらえるかな、地域の人たちが喜んでくれるかなっていうのを子どもたち一緒に考えながらやってる、っていうのが、小木中学校の活動なんです。



小川 正先生



廣澤 孝俊先生

片田 「地域が協力してくれない」と文句を言うというか、そこに問題を見つけるのではなく、子どもたちが出張って行って、そして向こうが勝手に変わっていくってことですよね。日本でも指折りの有名な野中郁次郎先生っていう経営学者が僕のところに尋ねてきまして、僕にこういうことをおっしゃったわけです。「企業のイノベーションを僕はやっている」、「これ簡単だ」、「なぜならば、企業の若いやつらや企業体質を変えるには、アメとムチという武器がある」と。会社の方針を聞くやつには、給料、報酬をあげてやればいいわけです。言うこと聞かんやつは、給料下げてやればいいわけです。「でも、片田、お前がやっている防災は、社会とのコミュニケーションだ」と。例えば、僕と子どもたちの間、先生たちと子どもたちの間、僕と地域の人たちの間にはアメもムチもないわけです。でも変わってもらわないといけない。もしここで相手が変わるのならば、そこにあるのは“共感”だけなんです。共感を持つことで初めて相手は変わるわけですね。今の小木の話を知ると、子どもたちは、地域の人たちに避難訓練に参加してもらおう、彼らに変わってもらおうと思って、まず何をやったかという、共感を生むコミュニケーションをやってるんですよ。相手を批判するんじゃなくて、「出て来い」と言うんじゃないで、向こうの非を指摘するんじゃなくて、自分たちが出て行って、まずは一緒にグラウンドゴルフをやって楽しむ。おそらく、おじいちゃん、おばあちゃんは初めは面食らったと思うんですよ。中学生が突然やってきて、「まぜてくれ」と言われて。拒む理由もないし、最初は戸惑いながらも、とりあえず一緒にやってみたら、案外楽しそうにやってくれるなど。このように関係性ができた上で、「来てよ」と誘うので「分かった、行く」と返事してもらえる。先ほど、全部イエス、イエス、イエスというコミュニケーションをしていくべきだ、肯定的にコミュニケーションをしていくべきだと申し上げたんですけども、まさにそうですよね。「グラウンドゴルフなんて、年寄りくさい」と思ってたけど、「やってみると結構楽しいよね」と理解を示してくれた中学生に対して、共感がうまれた。その上で、子どもたちが考えている避難訓練に「出てきてよ」って誘う。じいちゃん、ばあちゃんは子どもたちが自分たちの命のことを考えていてくれることに気づく。全部正のループじゃないですか。このようにお互いを思いやっていると、共感が生まれると思うし、相手の行動の変化が起こると思うんですね。やらない人を批判するのではなくて、いつもその人なりの理由があるということを理解してやった上で、常に肯定のコミュニケーションを考えるとと思うんですね。僕は、小木の中学生たちは見事にそれをやってくれていると思うし、小川先生、大句先生、廣澤先生、皆さんがご指導してくださってるんじゃないかと思うんですね。新庄地区も、子どもたちの動きを地域の人たちが喜んでいて思うんです。おそらく本当に新庄の誇りなんだろうと思うんですよ。それが2億円の寄付なんですよ。

そういう観点からですね、地域に入っていく戦略っていうものも、「戦略」なんて言い始めた時点で下心があるみたいでダメですよ。子どもたちを地域に行かせて、地域が自分たちをすごく肯定的に前向きに、喜びを持って迎えてくれる、という実感を子どもたちに1回与えることがスタートなんじゃないかなって気がするんです。

奈良 その通りだと思います。コミュニケーションで、防災教育で、共感というのは、また大事なキーワードです。共感を呼ぶリスクコミュニケーションは、そのメカニズムは片田先生がおっしゃってた通りですし、その根底には、私が先ほど申し上げた価値観の共有、何を大事とと思っているかということ、相手の立場に立って、しようとする努力あるんだと思います。

金井 この連携の話から議論させていただいたのは、いろいろ方のお話を聞いてると、コミュニケーション力と、地域との連携は、セットで考えてもらった方がよいのではないかと感じたんです。先ほど片田先生も戦略を考えるっていう話をされましたけど、企画というか、仕掛けをどう作るかだと思うんですね。最初のきっかけを、すべて子どもたち側に置いてあげる。子どもたちが地域のことを学習するなかで、自分の地域で今足りないことに気づく。それを解決する方法を考え、実践する。この実践する段階で必要なところと連携する。いつでも最初のきっかけを子どもたち側に置いて、何かやんなきゃいけないから、とりあえず小中学校合同避難訓練って始めるんじゃないかと、中学生が自分たちの地域のことを考えて、その結果として、一人で逃げられない小さい子がいること気づく。「一緒に逃げてあげなきゃ」、「でも、いきなりは一緒に逃げられないだろうから、まずは一緒に訓練しよう」というように、子どもたち発案でできたものにあわせていくという“仕掛け”が重要なんじゃないかなと。

先ほど、森本先生にお話いただきましたが、安否札もそうでしたよね。最初に考えたのが、生徒会発案で、何か地域の人のために出来ることないかということで、「避難したかどうか、どこに避難したのかがわかるように、安否札を作って、配布する」ことになりました。全校生徒が手書きで、3000枚の安否札を作りました。それを生徒が配りに行くわけですが、受け取る側のおじいちゃん、おばあちゃんは嬉しそうな顔をしていました。人前で喋るのが苦手な女の子が、最初は先輩に背中を押されて、しどろもどろで説明していたのが、何件も配って回るうちに、だんだん上手く話せるようになっていました。先生方が教え込まずに、きっかけを与えることで、子どもたちに勝手に育ってもらう仕掛けがうまくいった事例かなと思います。こういう授業の企画ができるというのも、コミュニケーション力なのかなと感じました。

三浦 釜石中学校の三浦です。2日間、大変素晴らしい発表、実践を学ぶことができ、良かったなと思っています。実は、これだけは絶対言っておかなければいけないなと思うことがあったので、お時間頂きました。私は震災の数ヶ月前に、防災の会議で片田先生に会っていました。そのときに、鶴住居小学校から提案された地図の中に、鶴住居防災センターが一次避難所かなにかで指定されていました。会議の後に「こんな海拔高度のないところで大丈夫なのか」と担当の先生に言った覚えがあるんです。鶴住居防災センターは避難所ではないんですけども、普段避難訓練でお年寄りが避難する場所として使っていました。そして震災当日、東中学校と鶴住居小学校の子どもたちは学校にいたから、そちらには行かなかったんですけども、お年寄りがそこにいっぱい集まって亡くなってしまいました。だから、数ヶ月前に私は気づいてたんです、そのことに、何か気づいたことを言わないでいるのは、すごく後悔することになる。行政に「ここヤバイんじゃないんですか」とか「一次避難所でもいいんですか」って言ったから、どうなったかは分からないけど、それと同じ事を今回感じたんで、言わせてください。

新庄小学校、中学校は避難所に指定されているんですか。

谷本 小学校も中学校まであがってきます。

三浦 私は上空写真を見たときに、浮島のように見えました。まさに津波は北から南から、その避難所を囲むように押し寄せてきて、おそらく東側で合流するんだろうなと。で、一番怖いのは実は震災のときに火災が発生したことです。昭和21年の津波のときには、どうだったかはわかりませんが、皆さん知っての通り、大槌はその後の火災で丸焼けになりました。昔と比べて発火性の物は、かなり多くなってるはずなんです。浮島の山の麓に火がついたら、どうなる

んだらうなって。すごく立派な取り組みをやっている子どもたちですよ。その命を本当に守れるかなって、すごく不安に感じたところです。

消防は海から離れたところに移転していくんでしょうか？釜石は被災後、移転しました。警察も移転しました。警察は海べたにあったので何もできませんでした。消防もみんな津波にのまれて、消防士も何も動かなかったですよ。



三浦 誠先生

子どもたちはそうやって地域と一緒にして、一緒に取り組もうとしている。でも、その子どもたちの命をしっかりと守れるような市の体制っていうのは整ってるのかなっていう。そこはすごく心配になりました。おそらく、学校の近くには消火栓かなんかもあると思うんです。釜石では、私が避難した高台の足元に火がつかしました。消防団が、ぱっと動いて放水して、消火したんですが、消防団がいないときは、どうすればいいんでしょうかね。私たちが消火栓を動かすことができるんでしょうか。分からないです。やっぱり、そういったことっていうのも一緒に考えて、働きかけていかないと、起きてからでは遅いんじゃないかと思いました。

片田 今のお話なんですけども、おっしゃる通りなんです。でも、それはレベルがかなり高度な気づきだと思います。だから、まずは子どもたちがやるようになって、地域を巻き込んで、地域でこういう議論がちゃんとできるようになって、本当にここの避難所で大丈夫なのかっていう議論に火がついていくことを求めたいわけですよ。でも、おっしゃる通りで、周りが全部津波に浸かって、島のような。そして、非常に多くの場合、火がついて、焼けあがってくる。それを心配されています。これは、防災担当者会議で言うべきような話になるんですけど、避難場所は、「ここまで来て、これでよし」、「もうこれ以上の安全はない」という限界がある所よりも、「ここまで来たら更にここ」、「更にここまで来たら次はここ」、「こっちで火がついたらこっちに行ける」という二度逃げできる所というのがベターです。出来る限り、今回の教訓に基づくんならば、そういうことになります、でも、この問題は、単に恐れているだけじゃなくって、本当に地域全体が津波防災に対して、具体的にどうしたらいいのかって考え始めたときに、多分出てくる話題になるんです。そのレベルまでに行ったときに、防災としての実効性っていうのが出てくるように思いますよね。

鵜住居防災センターは、最初おっしゃる通りでした。でも、防災に説教して、あそこは津波の避難所からは除外してもらったんですよ。一応それを通達もしてあったんですよ。しかしそれが不徹底の状況の中で、ちょっと前に、あそこで避難訓練をやってしまった。いろんな不整合の中にああいうことが起こってしまった。後悔しています。後悔していますが、そういう問題も全部含めて、僕らがその日、その時までにはやらなければいけないこと、やってあげよかったって思えることって、まだまだいっぱい出てきます。新庄の話も一つの事例です。そういうことに気がきが、あれやこれや出てくるし、各地の、各地で起こった事例に学んで、それを一つ一つ反映していくということが、この地域の防災を高めていくということです。今の三浦先生のご指摘も、そういう項目の一つになってくるわけですね。そういう議論が、前向きに、どんどん積み重ねられるような地域に持って行くこと、地域との連携が出来るようになっていくことこそが、重要で、そういう地域に皆でしていきたいと思いますよね。

三浦 実際到大槌では、山に火がついて、北に逃げれば北から火がつき、南に逃げればまた南に火がつき、一晩中逃げ惑ったってという話を聞いています。山に火がつくことは本当にあるので、覚えていて欲しいなと思います。

大川 今日、本当にいろいろな話を聞かせていただいて、自分自身の今までの姿勢をもう一度取り直し、あかんって気持ちでいます。それと、林先生もおっしゃっていましたが、自分自身も幼い頃の経験があります。実は、僕も山崩れ、山津波で友達亡くしました。それで、僕はもう、雨の多い尾鷲に住みたくないって思いをずっと持ってたんです。今でも、雨が怖くて、夜雨、大雨が降ると寝られないんです。家族は平気で寝てるんですけども。その思いが僕はあって、尾鷲に住む以上は、急斜面の所は山が崩れてくるんやってことを忘れずにいます。だから今まで、僕がそれぞれのクラスに入って、自分の体験談を子供たちにずっと話してきたんです。だから、災害によって人が亡くなるんやっていうことは、身近に感じています。

今尾鷲市で中心になって、やって頂いている方っていうのは、やっぱり今日も話に出ましたが、現地を見て、話を聞いて、そして自分のものとして、帰ってきた先生方なんです。熱意をという話をされてましたので、やっぱり僕は一緒にそういう経験とか、一緒に考えるっていう、時間を取るしかないかなって思います。自分自身、実はこの4月から教頭っていう、管理職の立場になってしましまして、やっぱり今おる若い先生方に、頭ごなしにこれやれ、あれやれって言うの、全く問題外だなんていうのは思ってます。やっぱり、一緒になって何ができるかっていうのを考えて、また来週から先生方に今日の話は是非伝えて、一緒になって、うちの学校の防災教育というのをもう1回見直していきたいなって思いました。

松井 私は初めて参加させてもらいましたが、素晴らしいなって思って聞かせていただきました。熱をたくさん頂いたなというような印象であります。私は、昨日もちょっと話しましたが、中越地震と中越沖地震と2回、自分の学校が被災しています。管理職という立場だったもんですから、安全教育というよりは安全管理ということで、「自分のところで、下手起こさないぞ」という気持ちで、どんな準備をして、どんなことをしていけばいいか、そういう大きな文脈のなかで、じゃあ子供にどんなふうな教育をしていけばいいかと、そういう風な所から見えました。これまでも防災教育の大きな可能性を私なりに感じてきたところはあるんですが、昨日今日と、先生方のお話を聞いて、改めて強く感じさせていただきました。防災教育は人づくり、人づくりは街づくり、とつながっていくと思います。具体的な数字を出して考えていくと



大川 太先生



松井 謙太先生



松本 潤先生

私どものような地方は、厳しいことが結構あります。そのなかでも、子どもたちは未来の希望の星でありますので、この子どもたちへの未来、それにこの防災教育が大きな働きをしてくれるという、そういう期待感を高めた二日間でした。

松本 昨年度まで教育委員会に7年間勤めていて、片田先生にご指導いただいて、防災教育を担当していました。今年度から現場に戻りました。私が教育委員会の担当者だったとき、緑ヶ丘中学校は、ちょっと歯がゆかったんですね。防災教育に対しての気持ちがちょっと感じられなかったんです。ところが、昨年度から現在の校長が赴任すると、ガラッと変わりました。校長は前任校で、水害で生徒を3人亡くしているっていうことがあって、ガラッと変わりました。今年度からそこに赴任させていただいたのですが、先生方の意識がすごく高いです。防災のことは、自発的にやってもらっています。実は9月4日は、3.11の半年後に起きた紀伊半島大水害です。この大水害が4年前に起こりました。その日に防災集会を必ず開こうと校長が言ってまして、「お前はここで昨日今日聞いてきたことをそのときに話しなさい」と言われました。どうしようかなと思ったんですけども、これによって継続していくことも、あると思っています。防災教育に限らず、現場には、やらされ感とかっていうのが、出たりするときもあります。皆で一緒にやってみようっていう気持ちを持って、やっていきたいなと僕は考えています。本当に貴重なお時間を頂けた二日間でした。改めて自分が何をすべきなのかっていうことを考えさせられた二日間でした。

片田 二日間、本当にどうもありがとうございました。今回は、ディスカッションの時間をたくさん取りました。皆さんのお話を聞いて、変わってきたな、広がりつつあるなっていう実感を持っています。しかし、今日この場に来ておられる方は、やっぱり限定的な方々なんですよ。それぞれの学校に帰られて、広めて頂きたいと思ったり、それぞれの地域に帰って、地域で広げて頂きたいと思ったり。また、学校間の連携もどんどん広がっていいなと思っています。そして、我々に関係なく、先生方の間に、それぞれの間にこのコミュニケーションができていくということを本当に嬉しく思っています。ここで顔見知りになった者同士で、「あー、あそこの学校いい取り組みやってたな」「あれについてちょっと教えてもらおう」なんてのは、気軽にそれぞれで情報交換しあってください。これも皆さんにこの会議に参加して頂いているメリットだと思いますので、どうか、それぞれで連絡を取り合ってください。

いずれにしても、こういう動きのなかで少しずつ日本の防災教育が変わっていくということと、もっと大風呂敷広げて言うならば、日本の教育が変わっていくっていう形になっていくといいなと正直思っています。これまでの教育と何か違うものを感じつつ、まだそれを明文化できないようなモヤモヤとした状況だと思います。しかし、「何かありそうだ」という気付きを持った集団ですので、それぞれの実践の中で新たに気付かれたことを、次の黒潮町に持ち寄っていただきたいと思ったり。そして、「あれからこんなことやってみた」、「こういうことができた」、「こういう側面もある」、また「こうやってしくじった」とかでもよいので、皆さんとの共通知をさらに高めていけるといいなと思っています。

二日間ありがとうございました。以上をもって閉会したいと思います。

【付録】 当日配布資料

資料 01	プログラム
資料 02	参加者名簿
資料 03	パネルディスカッションの概要
資料 04-1	田辺市防災教育担当者会について 田辺市防災教育担当者会 会長 寺本 行雄 先生
資料 04-2	自分の命は自分で守る～シンサイミライ学校から学んだこと～ 田辺市立田辺第一小学校 佐々木 三千代 先生
資料 04-3	平成 27 年度 新庄地震学 田辺市立新庄中学校 生徒
資料 04-4	防災教育と地域連携 田辺市立新庄中学校 谷本 明 先生
資料 05	グループディスカッション資料